

# 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡

—西院月双町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡

—西院月双町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

株式会社 イビソク

株式会社 イビソク

# 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡

—西院月双町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

株式会社 イ ビ ソ ク

## 例　　言

1. 本書は京都府京都市右京区西院月双町84に所在する平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、文化財保護法第93条第1項に基づき平成25年5月9日付けで届出された土木工事に伴い、平成25年6月3・4日に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した結果、平安京跡に関連する遺構が検出されたため、同課により発掘調査の実施が指示されたものである。[京都市受付番号13H093]
3. 本調査は、集合住宅新築工事に伴う事前調査として、睦備建設株式会社の委託を受けた株式会社イビソクが実施した。
4. 発掘調査は、平成25年7月1日から平成25年10月7日にかけて実施した。
5. 発掘調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課、および京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言の下、株式会社イビソクが実施した。
6. 発掘調査は次の体制で行った。

調査主体 株式会社イビソク

調査員 内田 真一郎

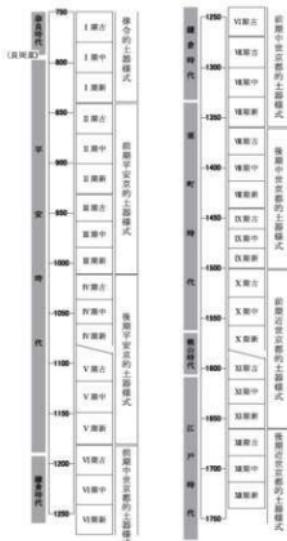
佐藤 好司

守谷 健吾

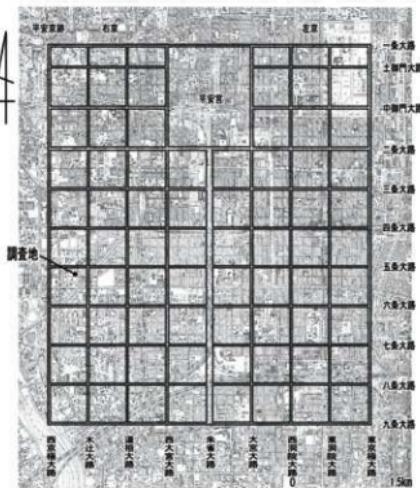
7. 本報告書の執筆・編集は佐藤・高木佑介・吉村晶が行った。
8. 本報告書では次に示した地図を調整・使用している。  
京都市地形図（1：2500）「山ノ内」「西京極」 京都市都市計画局発行
9. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。
10. 本報告書で示す方位・座標は、国土座標第VI系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海面（T.P.）に基づく数値である。
11. 本報告書に掲載した写真は、遺構写真を内田・守谷が、遺物写真を横山亮（オフィスマガネ）が撮影した。
12. 報告書作成にあたり、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所のご指導、ご協力を得ることができた。
13. 出土遺物については、関連する図面・写真等の記録類と共に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管している。

## 凡　　例

1. 遺構・遺物写真の縮尺は任意である。
2. 遺構番号は調査面毎に検出順に割り当てた。その後、編集段階で遺構の性格を付与して表記した。
3. 出土遺構の計測値は、小数点以下第2位まで表記する。
4. 表で示した出土遺物の計測値は、残存値に〔〕、復元値に（）を付けて表現する。
5. 遺物番号は、遺物実測図・観察表・遺物写真図版でそれぞれ対応している。
6. 本報告書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
7. 出土遺物の年代は、小森俊寛氏の編年（小森2005、第1表）を基調とし、その他の出土遺物に関して、本文・表中で記述の煩雑さを避けるため下記の分類・編年を使用・参照した。
  - ・中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
  - ・小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』京都編集工房



第1表 平安京土器型式一年代対応表



第1図 平安京復元図と調査地の位置

## 目 次

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査の経緯..... 1

第2章 位置と環境..... 2

第3章 調査の成果..... 5

    第1節 調査の方法

    第2節 基本層序

    第3節 遺構

    第4節 遺物

第4章 まとめ..... 83

写真図版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図 平安京復元図と調査地の位置	
第2図 調査地位置図	1
第3図 周辺調査位置図	2
第4図 調査区配置図	5
第5図 第1遺構面全体図	7
第6図 第2遺構面全体図	8
第7図 第3遺構面全体図	9
第8図 調査区東区東壁実測図	10
第9図 調査区東区-南区南壁実測図	11
第10図 調査区南区西壁・東区西壁実測図	12
第11図 建物1遺構実測図	14
第12図 建物2遺構実測図	15
第13図 建物3遺構実測図	16
第14図 建物4遺構実測図	17
第15図 棚1遺構実測図	18
第16図 土坑1212遺構実測図	19
第17図 溝1105遺構実測図	20
第18図 溝1106・1140遺構実測図	21
第19図 溝1143・溝1172遺構実測図	22
第20図 竪穴住居2001遺構実測図	24
第21図 竪穴住居2002遺構実測図	25
第22図 竪穴住居2003遺構実測図	26
第23図 竪穴住居2004遺構実測図	27
第24図 竪穴住居2005遺構実測図	28
第25図 竪穴住居2006遺構実測図	29
第26図 竪穴住居2039遺構実測図	30
第27図 竪穴住居2101遺構実測図	31
第28図 竪穴住居2102遺構実測図	32
第29図 竪穴住居2103遺構実測図	34
第30図 竪穴住居2113・竪穴住居2114遺構実測図	35
第31図 竪穴住居2119・竪穴住居2127遺構実測図	36
第32図 竪穴住居2120遺構実測図	37
第33図 竪穴住居2126遺構実測図	38
第34図 竪穴住居2128遺構実測図	39

第35図 堪穴住居2134遺構実測図	40
第36図 堪穴住居2139遺構実測図	41
第37図 堪穴住居2140遺構実測図	42
第38図 堪穴住居2148遺構実測図	43
第39図 堪穴住居2154遺構実測図	44
第40図 堪穴住居2155遺構実測図	45
第41図 溝2147遺構実測図	46
第42図 堪穴住居3002遺構実測図	48
第43図 堪穴住居3003遺構実測図	49
第44図 堪穴住居3101遺構実測図	50
第45図 堪穴住居3105遺構実測図	51
第46図 堪穴住居3106遺構実測図	52
第47図 堪穴住居3111遺構実測図	53
第48図 堪穴住居3112遺構実測図	54
第49図 堪穴住居3113遺構実測図	55
第50図 堪穴住居3115遺構実測図	56
第51図 土坑3110遺構実測図	57
第52図 土坑3123・土坑3139遺構実測図	58
第53図 溝3001遺構実測図	59
第54図 溝3109遺構実測図	60
第55図 第1遺構面出土遺物実測図①	63
第56図 第1遺構面出土遺物実測図②	65
第57図 第2遺構面出土遺物実測図①	67
第58図 第2遺構面出土遺物実測図②	70
第59図 第2遺構面出土遺物実測図③	72
第60図 第3遺構面出土遺物実測図①	74
第61図 第3遺構面出土遺物実測図②	76
第62図 第3遺構面出土遺物・瓦実測図	78
第63図 石製品実測図	79
第64図 遺構変遷図①	84
第65図 遺構変遷図②	86
第66図 遺構変遷図③	87

## 表 目 次

第1表 平安京土器型式一年代対応表	
第2表 周辺調査地一覧	3
第3表 遺構概要表	13
第4表 遺物概要表	61
第5表 土器観察表	80
第6表 瓦観察表	82
第7表 石製品観察表	82

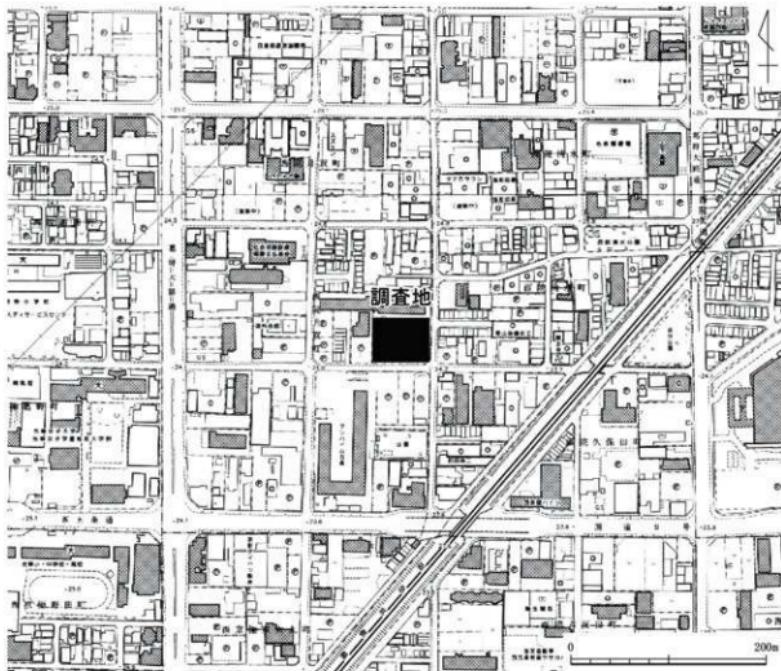
## 図 版 目 次

図版一	1. 第1遺構面南区全景（西から）	図版十一	1. 壺穴住居2039（南から） 2. 壺穴住居2101（西から）
図版二	1. 第1遺構面東区全景（北から） 2. 建物1（東から）	図版十二	1. 壺穴住居2102（南から） 2. 壺穴住居2103（西から）
図版三	1. 建物2（北から） 2. 建物3（北から）	図版十三	1. 壺穴住居2103壺（北西から） 2. 壺穴住居2113（西から）
図版四	1. 建物4（西から） 2. 土坑1120（南から） 3. 土坑1212（南から） 4. 溝1143（南から）	図版十四	1. 壺穴住居2114（東から） 2. 壺穴住居2119（西から）
図版五	1. 溝1143（南から） 2. 溝1172（南から） 3. 溝1172（北西から） 4. 溝1172出土状況（北西から）	図版十五	1. 壺穴住居2120（西から） 2. 壺穴住居2126（北から）
図版六	1. 第2遺構面南区全景（西から） 2. 第2遺構面中央区全景（西から）	図版十六	1. 壺穴住居2127（南から） 2. 壺穴住居2128（西から）
図版七	1. 第2遺構面東区全景（北から） 2. 壺穴住居2001壺（西から）	図版十七	1. 壺穴住居2134（南から） 2. 壺穴住居2139（西から）
図版八	1. 壺穴住居2002（北から） 2. 壺穴住居2003（北から）	図版十八	1. 壺穴住居2139壺 検出状況 (南から) 2. 壺穴住居2140（東から）
図版九	1. 壺穴住居2003壺（西から） 2. 壺穴住居2004（北から）	図版十九	1. 壺穴住居2148（北から） 2. 壺穴住居2154（北から）
図版十	1. 壺穴住居2005（東から） 2. 壺穴住居2006（東から）	図版二十	1. 壺穴住居2154壺（南から） 2. 壺穴住居2155（南から） 3. 壺穴住居2155壺（東から） 4. 溝2147（西から） 5. 溝2147（東から）

図版二十一	1. 第3遺構面南区全景(西から) 2. 第3遺構面中央区全景 (西から)	図版三十 図版三十一 図版三十二	1. 第1・2遺構面出土遺物 1. 第1~3遺構面出土遺物 1. 第3遺構面出土遺物
図版二十二	1. 第3遺構面東区全景(北から) 2. 壺穴住居3002、壺穴住居3003 (北から)	図版三十三 図版三十四	1. 第3遺構面出土遺物 1. 第3遺構面出土遺物 2. 第1遺構面出土遺物
図版二十三	1. 壺穴住居3002(北から) 2. 壺穴住居3003(北から)	図版三十五	1. 第1遺構面出土遺物 2. 第1遺構面出土遺物
図版二十四	1. 壺穴住居3101(西から) 2. 壺穴住居3101壺(南から)	図版三十六	1. 第1・2遺構面出土遺物 2. 第2遺構面出土遺物
図版二十五	1. 壺穴住居3105(西から) 2. 壺穴住居3106(東から)	図版三十七	1. 第2遺構面出土遺物 2. 第2遺構面出土遺物
図版二十六	1. 壺穴住居3106出土状況 (東から) 2. 壺穴住居3106炉(南から) 3. 壺穴住居3106壺(南から) 4. 壺穴住居3111(北西から)	図版三十八 図版三十九	1. 第2遺構面出土遺物 2. 第2遺構面出土遺物 1. 第3遺構面出土遺物 2. 第3遺構面出土遺物
図版二十七	1. 壺穴住居3112(東から) 2. 壺穴住居3112壺(東から) 3. 壺穴住居3112出土状況 (東から) 4. 壺穴住居3112壺(東から)	図版四十	1. 第1・3遺構面出土遺物 2. 第2・3遺構面出土遺物
図版二十八	1. 壺穴住居3113(南から) 2. 壺穴住居3115(東から)		
図版二十九	1. 壺穴住居3115壺(東から) 2. 壺穴住居3115壺 挖り方 (東から) 3. 土坑3123(西から) 4. 土坑3123出土状況(西から) 5. 土坑3131(西から) 6. 土坑3139出土状況(東から)		

## 第1章 調査の経緯

調査は、集合住宅建設に伴う発掘調査である。調査地は、京都市右京区西院月双町84に所在する、平安京跡（遺跡番号1）及び西京極遺跡（遺跡番号931）である。当該地において睦備建設株式会社により集合住宅が建設されることになり、睦備建設株式会社より京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）へ、平成25年5月9日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出をおこなった。京都市文化財保護課はこれを受け、平成25年6月3・4日に試掘調査を実施したところ、当該地に弥生～平安時代の遺構が残存していることが確認された（京都市受付番号13H093）。そのため京都市文化財保護課から発掘調査の指導があり、調査については、睦備建設株式会社から発掘調査の委託を受けた株式会社イビソクが実施することになった。株式会社イビソクは、文化財保護法第92条に基づき京都府教育委員会に平成25年6月28日付で埋蔵文化財発掘調査の届出をし、許可されたので平成25年7月1日より調査を開始した。



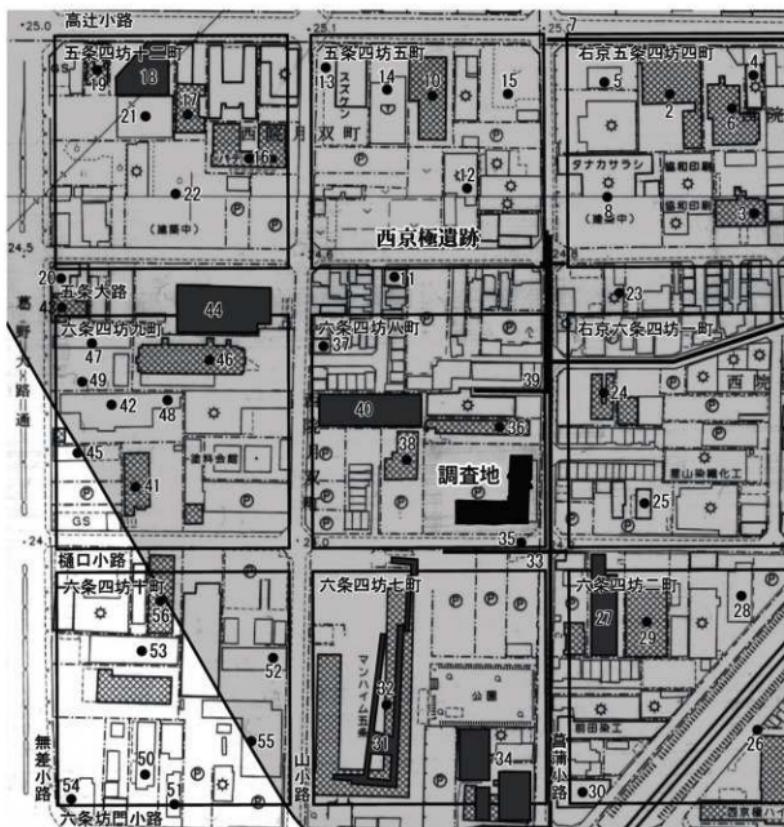
第2図 調査地位置図（縮尺1/5,000）

## 第2章 位置と環境

当調査地は五条通りと葛野大路通りの交差点より東へ250m、北へ200m程に位置する。

平安京では北を五条大路、南を樋口小路、東を菖蒲小路、西を山小路に囲まれた右京六条四条八町の南東角にあたる。また、弥生時代から奈良時代にかけての集落跡である、西京極遺跡の中央よりやや南に位置する。

周辺調査では、平安京関連の遺構は多くはないが、2006年の発掘調査で平安時代の掘立柱建物跡が検出されており（40）、また九町では1991年の発掘調査で五条大路南側溝のほか車の轍、人や牛の足跡等が多数検出されている（44）。平安時代以前では、先述の2006年の調査で古墳時代の竪穴住居、奈良時代の総柱建物が検出され、他の周辺の発掘調査においても弥生時代から古墳



第3図 周辺調査位置図（縮尺 1/2,500）

時代の堅穴住居や奈良時代の掘立柱建物等が数多く検出されている。調査地周辺で弥生時代から奈良時代にかけて、集落遺跡が良好に残存していることが明らかであり、当調査地でもその関連遺構及び平安京関連遺構の確認が予想された。

第2表 周辺調査地一覧

番号	遺跡名	調査	概要	文献
1	五条四坊四町	立会	GL-0.92m以下糠倉・時期不明の包含層各1.	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局
2	五条四坊四町	試掘	GL-0.9m以下、池沼状堆積。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局
3	五条四坊四町	試掘	GL-1.8m以下、湿地状堆積。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』京都市文化観光局
4	五条四坊四町	立会	GL-1.1m以下、湿地状堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局
5	五条四坊四町	立会	GL-0.9mでオリーブ黒色粘土の湿地状堆積を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局
6	五条四坊四町	試掘	全域が湿地状堆積だが、GL-2.2mで中世の整地層を検出。遺構なし。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局
7	五条四坊四町	立会	GL-0.65m、暗オリーブ灰色粘土の湿地状堆積。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
8	五条四坊四町	試掘	少なくともGL-3.2mまで湿地堆積。堆山には未達。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成21年度』京都市文化市民局
9	五条四坊四町	立会	GL-1.06m、オリーブ黒色粘土の湿地状堆積。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成23年度』京都市文化市民局
10	五条四坊五町	試掘	GL-1.45mにて平安の小穴6.溝3、古墳時代の落込み2.	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局
11	五条四坊五町	立会	GL-0.76m以下時期不明の包含層2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局
12	五条四坊五町	立会	GL-0.73mにて弥生後期の住居址状の落込み。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局
13	五条四坊五町	試掘	LT : GL-1.4mで弥生～古墳時代の遺物包含層 GL-1.5mで南北溝を検出する。2・3T ; GL-1.2m以下、池状堆積。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成5年度』京都市文化観光局
14	五条四坊五町	試掘	GL-1.45mで黄褐色粘土の地山。耕作痕数条を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
15	五条四坊五町	試掘	GL-1.25mで古墳時代～平安時代の遺構を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局
16	五条四坊十二町	試掘・立会	GL-0.73mにて弥生～室町の土壙。堅穴住居址、溝、柱穴など10数基。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局
17	五条四坊十二町	試掘	GL-1.88mにて室町の土壙1.溝1.~0.94mにて古墳後期の土壙。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局
18	五条四坊十二町	発掘	弥生後期の方形周溝墓2基、堅穴住居6棟、古墳後期の備から二輪玉出土、飛鳥の総柱建物1棟、奈良の船立柱建物など検出。	『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財团法人京都市埋蔵文化財研究所
19	五条四坊十二町	立会	No.1: GL-0.9mで時期不明の包含層、土壙器片。No.2: -0.75m弥生の土壙、土器片。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局
20	五条四坊十二町	立会	No.1 : GL-0.9m、平安後期の包含層（土師器皿）。-1.13m、平安中期の包含層（黒色土器皿）。-1.46m以下、褐色荒砂の地山。No.2 : -1.18m、平安末期の包含層（青磁鉢）。-1.34m、平安後期の包含層（土師器皿）。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局
21	五条四坊十二町	試掘	GL-1mで弥生時代の土壙、礫等を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局
22	五条四坊十二町	立会	古墳の堅穴住居址、平安前期の柱穴等を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成22年度』京都市文化市民局
23	五条大路・西京極道路	試掘	GL-0.5m以下湿地堆積。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局
24	六条四坊一町	立会	GL-1.5m以下、包含層4.平安前期1.、時期不明3.、-2.8mにて古墳後期の土壙。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局
25	六条四坊一町	立会	No.1 : GL-0.5~0.82m、時期不明の包含層3.、-1.09m以下、黒褐色砂泥の地山。No.2 : -1.16m以下、褐色粘土の地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局

番号	遺跡名	調査	概要	文献
26	六条四坊二町	立会	弥生後期の土器を多量に含む溝状遺構	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度 財團法人京都市埋蔵文化財研究所
27	六条四坊二町	発掘	弥生中期～後期の堅穴住居5棟検出。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財團法人京都市埋蔵文化財研究所
28	六条四坊二町	試掘	GL-1. 1mで古墳時代の流路跡を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成9年度』京都市文化市民局
29	六条四坊二町・西京極遺跡	発掘	弥生時代後期の堅穴住居8棟、奈良時代の縦柱建物・井戸を検出。	『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』2007年 財團法人京都市埋蔵文化財研究所
30	六条四坊二町	立会	弥生の堅穴住居跡を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成23年度』京都市文化市民局
31	六条四坊七町・西京極遺跡	発掘	弥生時代中期の遺構を検出。	『昭和50年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財團法人京都市埋蔵文化財研究所
32	六条四坊七町	立会	弥生中期の東西構、弥生の落込み。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市文化観光局
33	六条四坊七町	立会	GL-0. 45m、弥生の包含層（弥生土器）。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』京都市文化市民局
34	六条四坊七町	発掘	弥生中期の堅穴住居・構、弥生後期の堅穴住居、古墳時代の堅穴住居を検出。	『平安京跡研究調査報告第23報 平安京右京内5遺跡』財團法人古代学会
35	六条四坊八町	立会	土器類・須恵器も包含層	『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度 財團法人京都市埋蔵文化財研究所
36	六条四坊八町	試掘	GL-1. 4mにて包含層、平安前期。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局
37	六条四坊八町	立会	GL-0. 4mにて包含層、時期不明。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局
38	六条四坊八町	立会	古墳中期・奈良のピットを検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局
39	六条四坊八町	立会	GL-0. 7m、時期不明の包含層（土師部）。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局
40	六条四坊八町	発掘	畿文～奈良の落込み。古墳時代中期・後期の堅穴住居。奈良時代の縦柱建物、堅穴住居。平安の縦柱建物を検出。	『平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡』2006年 財團法人京都市埋蔵文化財研究所
41	六条四坊九町	試掘	GL-1. 6m以下古墳～平安の包含層、構2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局
42	六条四坊九町	試掘	GL-1. 14m以下、時期不明の包含層3。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局
43	六条四坊九町	立会	GL-1. 1m以下時期不明の流れ堆積。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局
44	六条四坊九町	発掘	畿文の土坑。弥生～古墳の構。古墳後期の堅穴住居3棟。五条大路間連遺構、疊倉の土坑。	『京都文化博物館調査研究報告第8集平安京右京六条四坊九町・五条大路』京都府京都文化博物館
45	六条四坊九町	立会	GL-0. 8mにて複地状堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』京都市文化観光局
46	六条四坊九町	試掘	GL-1. 26mで時期不明の南北構1条。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局
47	六条四坊九町	立会	GL-1. 1m以下、にぶい黄褐色粘土の地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局
48	六条四坊九町	立会	GL-1. 1m、時期不明の耕作土。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局
49	六条四坊九町	立会	GL-1. 16mで黄褐色砂泥層を検出。遺構、遺物は検出できず。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』京都市文化市民局
50	六条四坊十町	試掘	GL-0. 9m以下、時期不明の湿地堆積。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局
51	六条四坊十町	立会	GL-0. 75m、時期不明の包含層（土師部）。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局
52	六条四坊十町	試掘	GL-0. 94～1. 1mで平安前期の包含層。上面で土坑・構を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成13年度』京都市文化市民局
53	六条四坊十町	試掘	GL-0. 85m以下、湿地状堆積。	『京都市内遺跡調査概報 平成13年度』京都市文化市民局
54	六条四坊十町	試掘	GL-1. 5m以下、氾濫堆積。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成14年度』京都市文化市民局
55	六条四坊十町・西京極遺跡	試掘	西京極遺跡の西側境界を明らかにした。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成14年度』京都市文化市民局
56	六条四坊十町・西京極遺跡	試掘	旧耕作土以下、湿地状堆積。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局

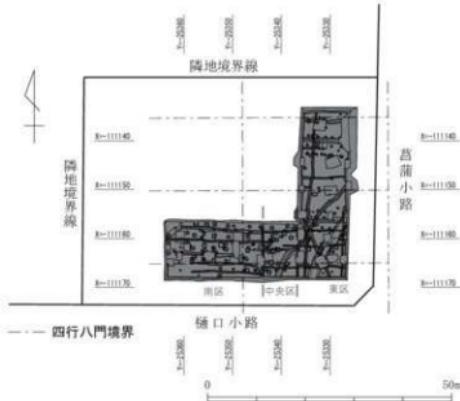
## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の方法

調査区の設定にあたっては、京都市文化財保護課による調査指導範囲にしたがい、睦備建設株式会社の建築計画に基づいて設定を行ったが、調査の施工ヤード確保の関係から、調査区を南区・中央区・東区に3分割し、南区→東区→中央区の順に行い、南区については調査完了のち埋戻しを行ったが、東区・中央区については連続して調査を実施した。

調査地は従前は駐車場となっていた。試掘調査の結果によれば、現地表から0.6m程までは現代の造成土であることが明らかであったため、この部分についてはバックホーによる機械掘削とした。部分的に建物基礎のコンクリートパイルが認められたが、遺構検出面以下について除去をせず埋戻し時に撤去を行った。盛土層を除去すると部分的に近代以降とみられる水田耕作土と床土層が認められたが、この部分においても表土除去時に随時精査・除去を行い、遺構検出面（標高22.9m付近）の確認を行った。その後、遺構検出、遺構の掘り下げを行い、記録図面作成、記録写真撮影などを随時行いながら調査を実施した。試掘調査によれば遺構検出面は單一面であつたが、調査完了時において下層の確認調査を実施し、遺構の有無の確認を行った。各遺構面の調査時および完掘時においては京都市文化財保護課による検査を受け、調査内容・遺構状況等の指導・確認を行つた。

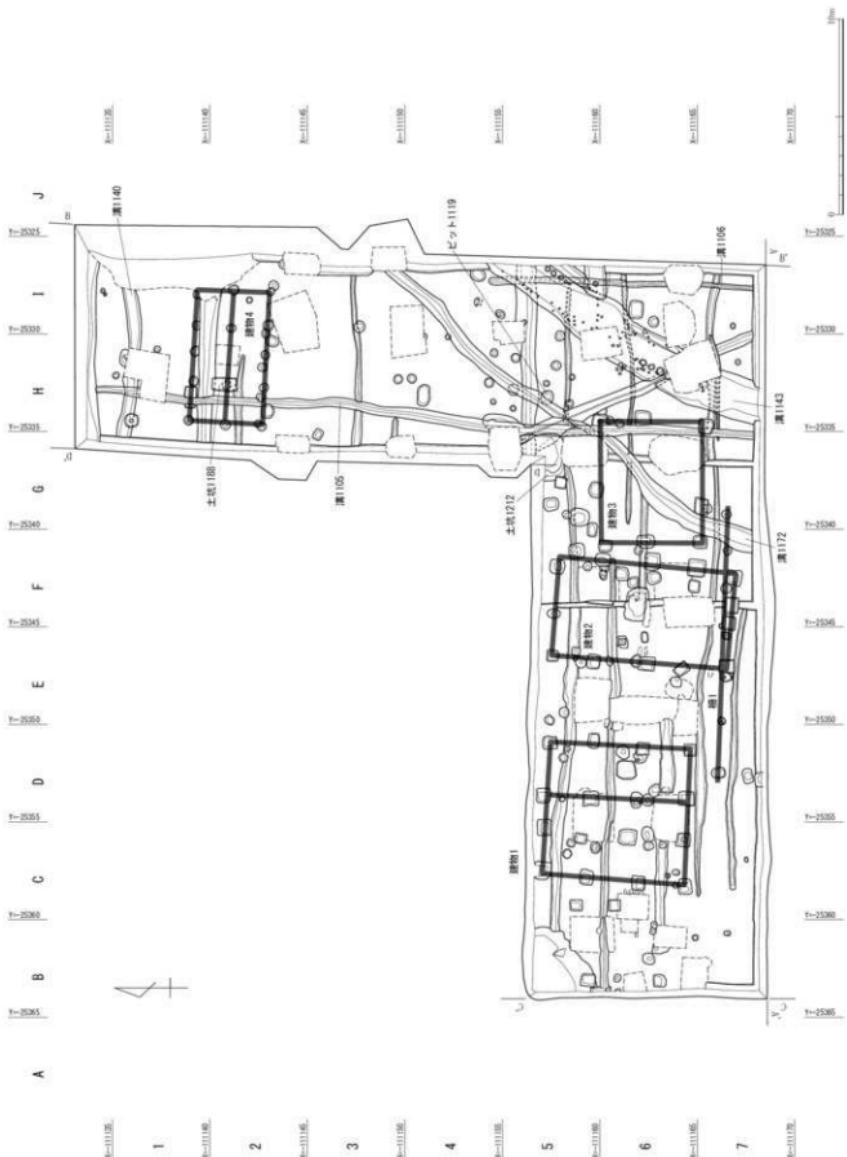
調査にともなう遺構などの記録図面の作成にあたっては、随時デジタルやアナログ測量の手法を用いて作成した。



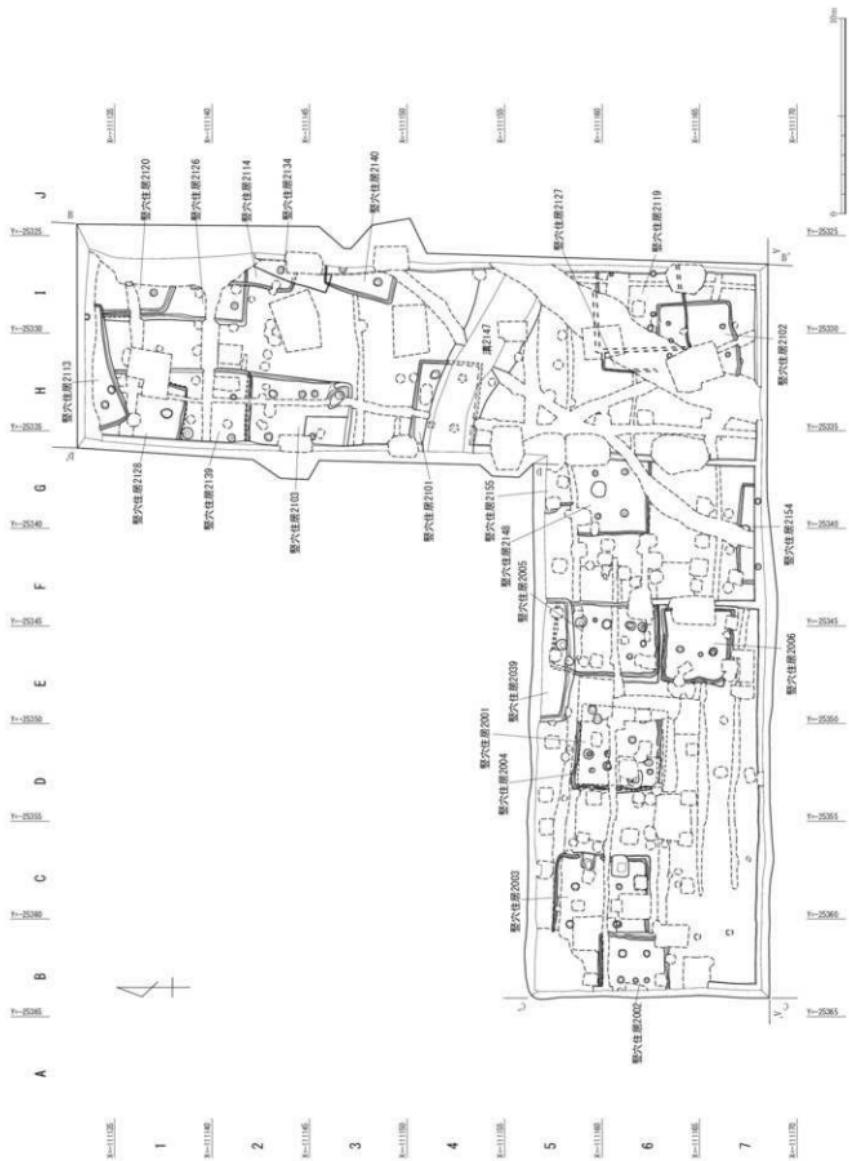
第4図 調査区配置図 (縮尺 1/1000)

## 第2節 基本層序

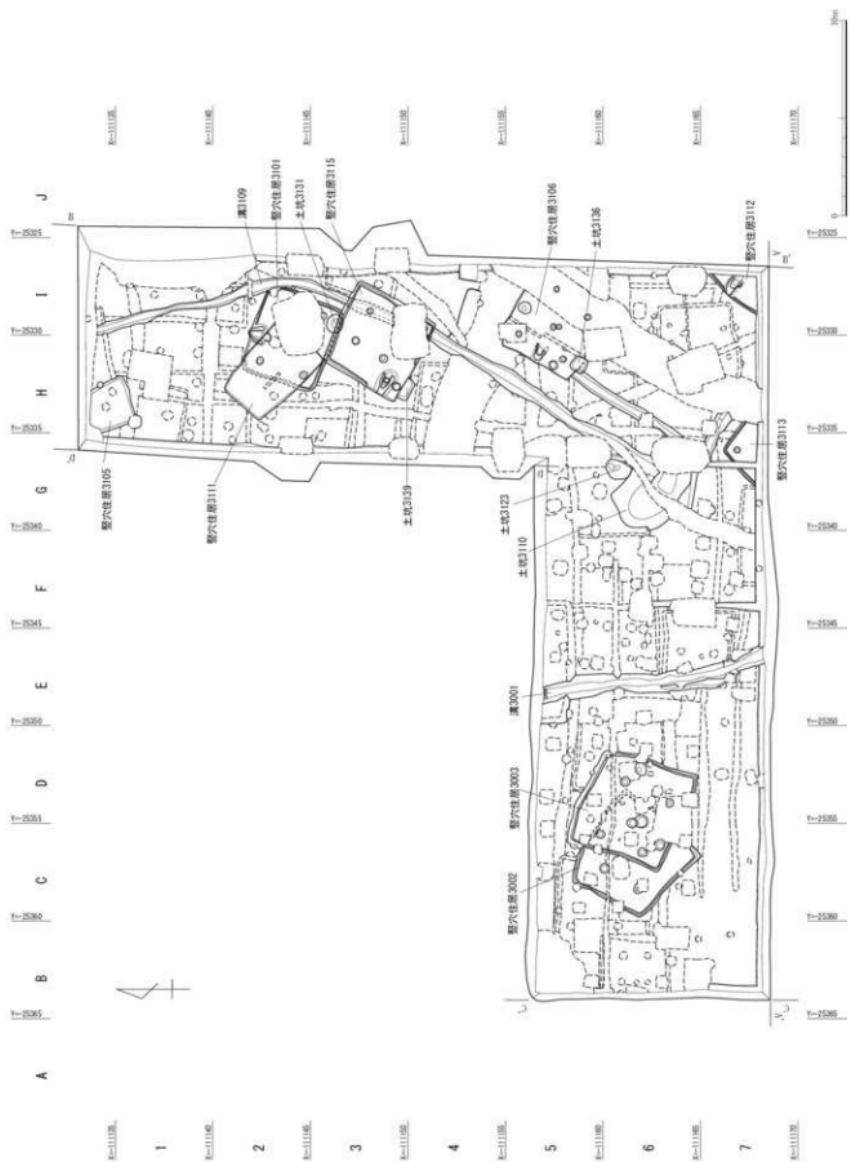
調査地での基本層位は1層から14層を確認している。現地表から0.6m程は現代の造成土(1層)であり、旧建物の基礎が部分的に地山面を掘削していた。それより下位の2層から6層にかけては、ほぼ水平に堆積する水田耕作土とその床土層であり近代から現代にかけてのものである。これらを除去すると標高23.1m付近でにぶい黄褐色シルト層(7層)と褐色シルト層(8層)、灰色土とにぶい黄褐色泥土(9層)が確認された。9層は南区の西端部でのみ確認されており、沼地状の堆積物である。近世と思われる小溝(耕作溝)はほぼ7層上面から掘削されているものであり、7・8層についてはこれら耕作に関連する整地土であると考えられる。遺構検出面は褐色シルト層(10層)、灰黄褐色砂質土(11層)の地山層であるが、10層は調査区東側に向かうにつれ薄くなっており、東区の一部においては11層上面で遺構検出を行っている。東区北側においては部分的に砂層や砂礫層が露出していることが確認されたため、調査完了の後に下層確認もかねて南北にトレーニング上に掘削を行ったところ、埋没流路の存在が確認された。



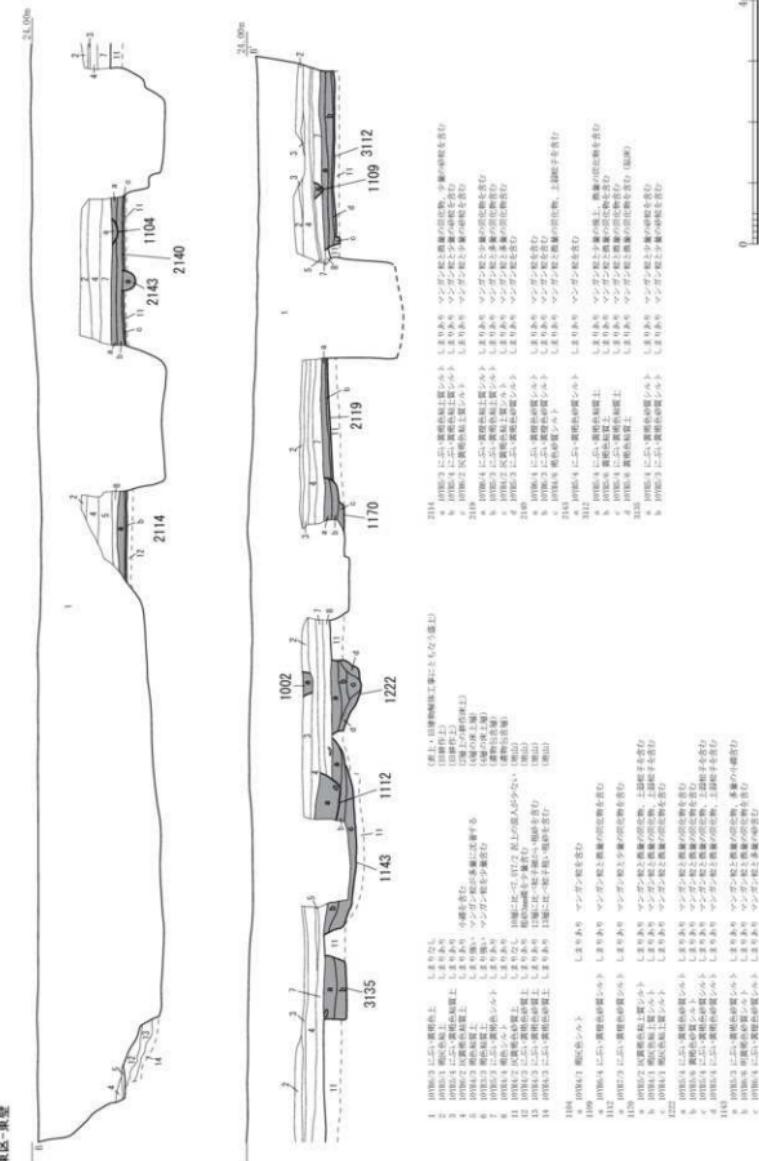
第5図 第1造構面全体図（縮尺1/250）



第6図 第2造構面全体図（縮尺1/250）

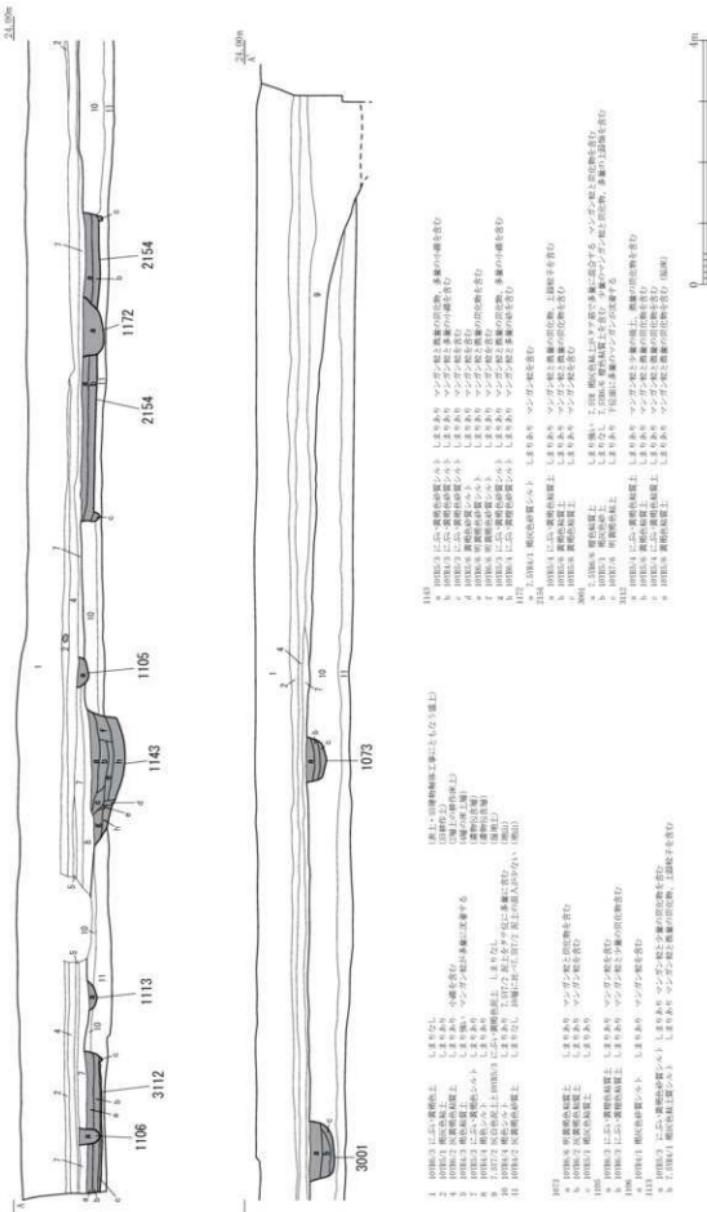


第7図 第3遮構面全体図（縮尺1/250）

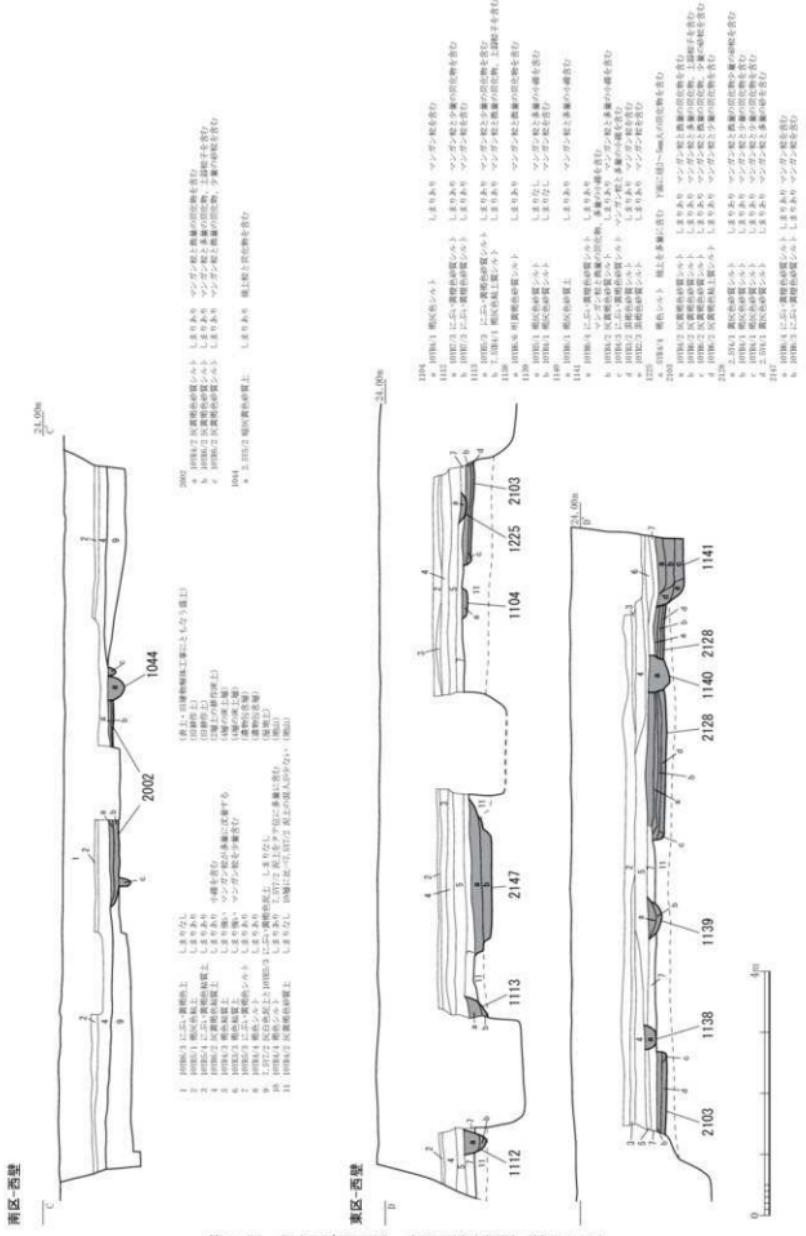


第8図 調査区東区東壁実測図 (縮尺1/80)

東区-南区 南壁



第9図 調査区東区-南区南壁実測図(縮尺1/80)



第10図 調査区南区西壁・東区西壁実測図(縮尺1/80)

### 第3節 遺構

第3表 遺構概要表

時代	遺構
平安時代以降 (第1遺構面)	建物 1・2・3・4 柵 1 溝 1105・1106・1140・1143・1172
飛鳥～奈良時代 (第2遺構面)	竪穴住居 2001～2006・2039・2101～2103・2113・2114・2119・ 2120・2126～2128・2134・2139・2140・2148・2154・ 2155 溝 2147
古墳時代 (第3遺構面)	竪穴住居 3002・3003・3101・3105・3106・3111～3113・3115 土坑 3110・3123・3139 溝 3001・3109

#### 1) 第1遺構面検出遺構

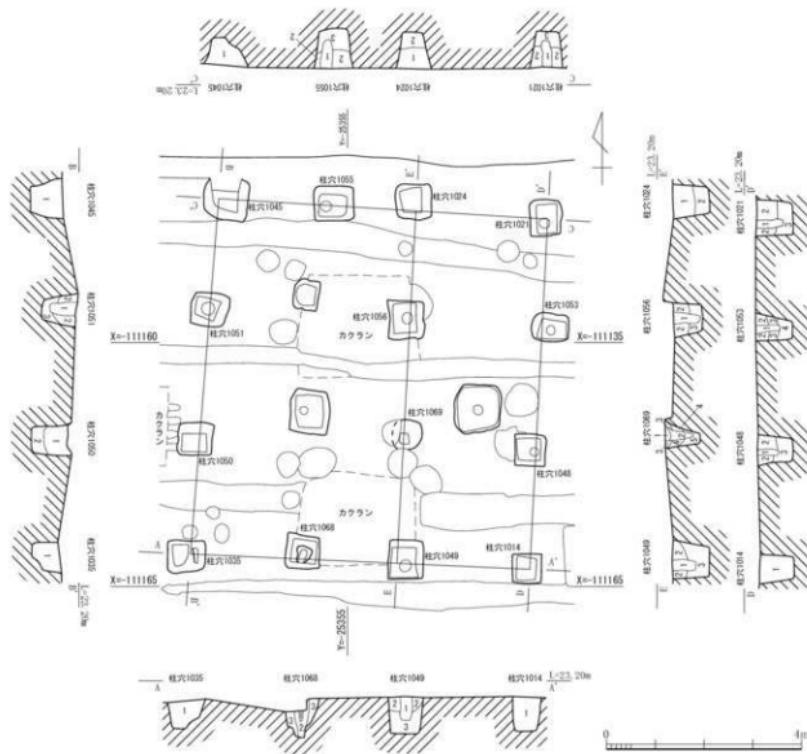
##### 概要

第1遺構面では、中世以降とみられる耕作溝、奈良時代末～平安時代の掘立柱建物跡、平安時代以降の柵列、掘立柱建物跡、溝跡を検出した。耕作溝については伴出する遺物もなく時期も不明であることからここでは取り扱わない。掘立柱建物は方形の掘方をもつものと円形の掘方をもつものの2形態を確認したが、遺構の重複状況から方形のものが古いことが明らかである。

##### 掘立柱建物跡

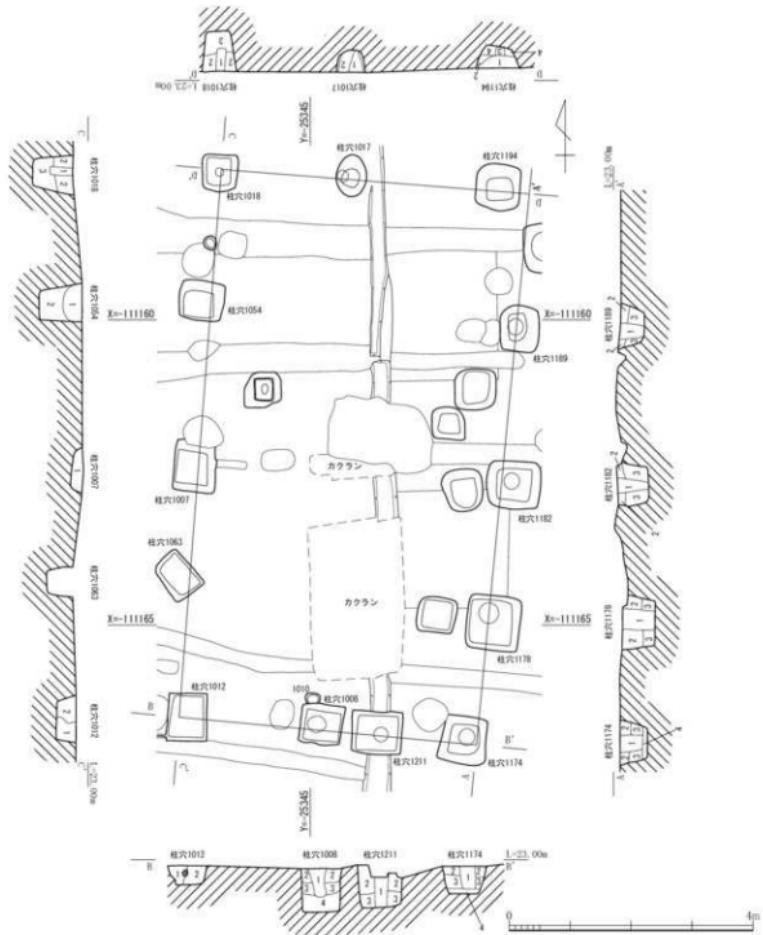
**建物1**（第11図、図版二） 南区において検出された掘立柱建物で建物2の西側に位置する。南北3間、東西2間で東側に庇をもつ南北棟の側柱建物である。建物2と柱筋をそろえる。東に3° 傾する。柱間は桁行・梁間とともに1.2m（4尺）である。庇は1.8m（6尺）の出幅をもつ。身舎の柱穴は1045、1055、1024、1056、1069、1049、1068、1035、1050、1051で庇の柱穴は1021、1053、1048、1014である。柱穴の掘方は1辺0.6～0.9mの方形で、深さは0.76～0.56m。柱痕跡から推定される柱径は0.16～0.3mである。柱穴掘方内からは須恵器蓋（第55図1）・杯身（第55図2）・高杯、土師器片が出土している。8世紀後半である。

**建物2**（第12図、図版三） 南区・中央区において検出された掘立柱建物で建物1の東側に位置する。南北4間、東西2間の南北棟の側柱建物である。建物1と柱筋をそろえる。東に4° 傾する。柱間は桁行・梁間とともに1.1m（3.6尺）であるが、桁行の1054～1007間、1189～1182間、1182～1178間は1.2m（4尺）と柱間が広い。柱穴は1018、1017、1194、1189、1182、1178、1174、1008、1012、1063、1007、1054である。柱穴の掘方は1017を除くと1辺0.54～0.82mの方形で、深さは0.30～0.70m、柱痕跡から推定される柱径は0.25～0.34mである。柱穴掘方内からは須恵器蓋（第55図5）・須恵器杯蓋（第55図3・4）、土師器甕（第55図6）が出土している。8世紀後半である。

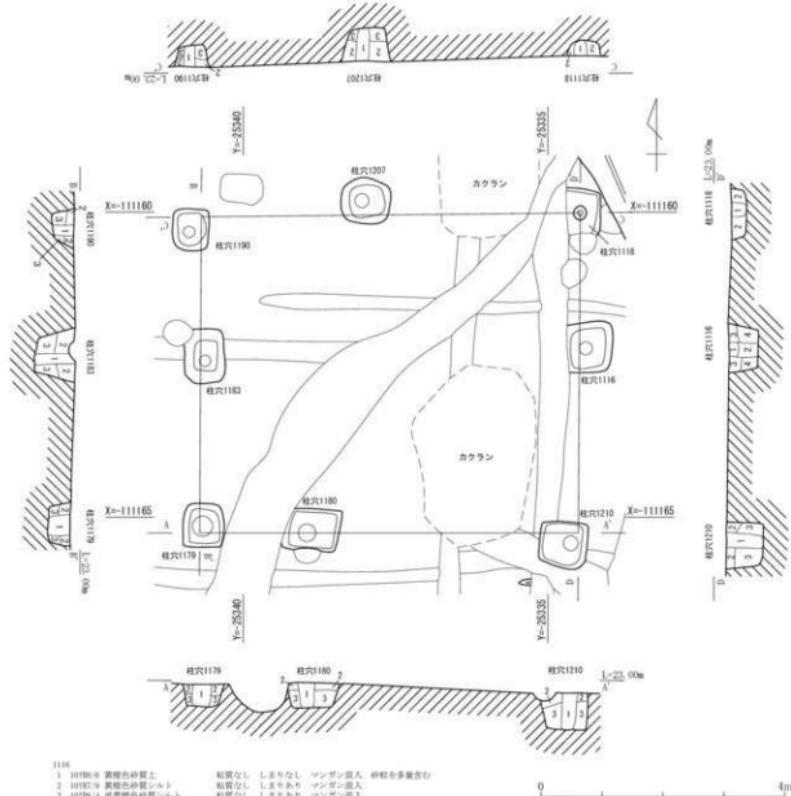


- 1014  
1. 柱穴1035 3. (C-E) 黄褐色砂質土 しまりややあり 地上柱子・汎化物を含む  
1015  
1. 1015/1 黃褐色砂質土 しまりややあり 地上柱子・汎化物を含む  
2. 1015/2 黄褐色砂質土 粘質あり しまりやや 黃褐色砂質土  
3. 1015/3 (C-E) 黑褐色砂質土 粘質なし しまりややあり  
1016  
1. 1016/1 (C-E) 黄褐色砂質土 しまりややあり 地上柱子・汎化物を含む  
2. 1016/2 黄褐色砂質土 粘質なし 黄褐色砂質土  
3. 1016/3 黄褐色砂質土 粘質あり しまりややあり  
1017  
1. 1017/1 (A-E) 黄褐色砂質土 しまりややあり 地上柱子・汎化物を含む  
1018  
1. 1018/1 (A-E) 黄褐色砂質土 しまりややあり 地上柱子・汎化物を含む  
2. 1018/2 黄褐色砂質土 粘質あり しまりやや 黃褐色砂質土  
3. 1018/3 黄褐色砂質土 粘質なし しまりややあり  
1019  
1. 1019/1 (A-E) 黄褐色砂質土 しまりややあり 地上柱子・汎化物を含む  
2. 1019/2 黄褐色砂質土 粘質あり しまりやや 黃褐色砂質土  
3. 1019/3 黄褐色砂質土 粘質なし しまりややあり  
1020  
1. 1020/1 (A-E) 黄褐色砂質土 粘質あり しまりややあり  
2. 1020/2 黄褐色砂質土 粘質なし しまりややあり
- 1015  
1. 1015/2 (A-E) 黄褐色砂質土 しまりややあり マンガン混入  
2. 1015/2 黄褐色砂質土 粘質あり しまりやや マンガン混入・開化物を含む  
3. 1015/3 黄褐色砂質土 粘質なし しまりややあり  
1016  
1. 1016/2 (A-E) 黄褐色砂質土 しまりややあり  
2. 1016/3 (C-E) 黄褐色砂質土 粘質あり しまりやや 黃褐色砂質土  
3. 1016/4 黄褐色砂質土 マンガン混入  
4. 1016/5 黄褐色砂質土 粘質なし しまりやややや マンガン混入  
1017  
1. 1017/2 (A-E) 黄褐色砂質土 しまりややややあり  
2. 1017/3 (C-E) 黄褐色砂質土 粘質あり しまりやや 黃褐色砂質土  
3. 1017/4 黄褐色砂質土 粘質なし しまりやや  
1018  
1. 1018/2 (A-E) 黄褐色砂質土 粘質あり しまりやや 黃褐色砂質土  
2. 1018/3 (C-E) 黄褐色砂質土 粘質あり しまりやや 黃褐色砂質土  
3. 1018/4 黄褐色砂質土 粘質なし しまりやや  
1019  
1. 1019/3 (A-E) 黄褐色砂質土 粘質あり しまりやや マンган混入  
2. 1019/3 (C-E) 黄褐色砂質土 しまりやや マンган混入  
3. 1019/4 (A-E) 黄褐色砂質土 粘質あり しまりやや 黃褐色砂質土  
4. 1019/5 黄褐色砂質土 マンガン混入  
5. 1019/6 黄褐色砂質土 粘質なし しまりやややや マンガン混入

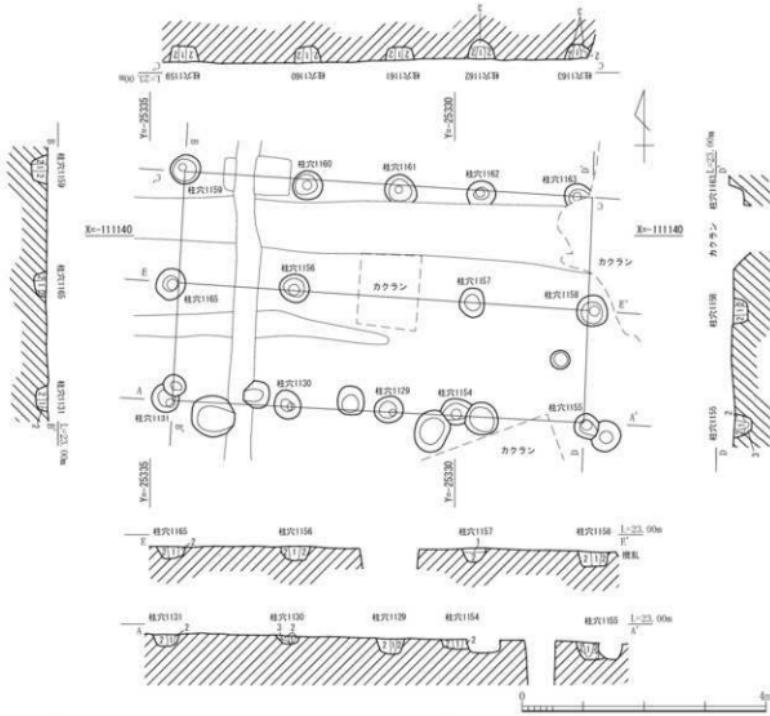
第11図 建物1遺構実測図(縮尺1/100)



第12図 建物2遺構実測図（縮尺1/80）



第13図 建物3遺構実測図（縮尺1/80）

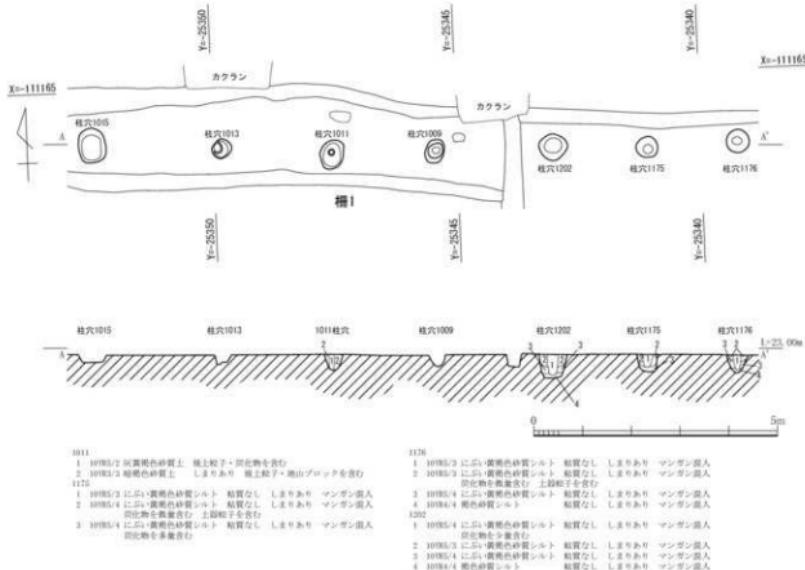


第14図 建物4遺構実測図（縮尺1/80）

**建物3**（第13図、図版三）中央区・東区において検出された掘立柱建物で建物2の東側に位置する。南北・東西とも2間の東西棟の側柱建物である。軸は正方位である。柱間は等間ではなく、北辺の桁行が1190-1207間で1.8m（6尺）、1207-1118間で2.1m（7尺）、南辺の桁行が1179-1180間で1.2m（4尺）、1180-1210間で2.7m（9尺）、梁間が1118-1116、1190-1183間で1.5m（5尺）、1116-1210、1183-1179間で1.8m（6尺）である。柱穴は1190、1207、1118、1116、1210、1180、1179、1183である。柱穴の掘方は1辺0.47～0.90mの方形で、深さは0.25～0.66m、柱痕跡から推定される柱径は0.17～0.30mである。掘方内からは須恵器杯蓋（第55図7）、須恵器瓶（第55図8）、土師器高杯（第55図9）が出土している。8世紀後半である。

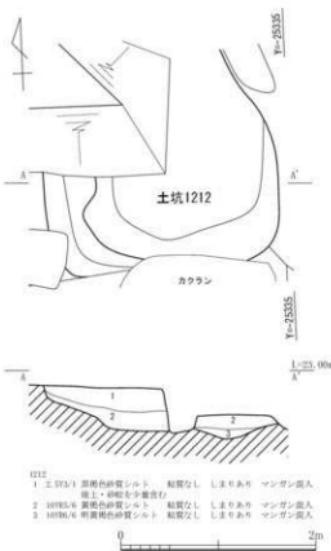
**建物4**（第14図、図版四）東区において検出された掘立柱建物である。南北2間、東西4間の東西棟の建物である。柱穴1156と1157間の柱穴については搅乱により消失したものとみられるところから総柱建物と推定される。柱間は桁行1.6～1.8m（5尺～6尺）梁間1.8m（6尺）で桁行に関しては等間ではない。柱穴は1159、1160、1161、1162、1163、1158、1155、1154、1129、1130、1131、1165、1156、1157、1158である。柱穴の掘方は径0.39～0.53mの円形で、深さは0.13～0.28m、1156から須恵器杯（第55図10）が出土している。9世紀前半である。

**柵1**（第15図）南区・中央区において検出された柱穴列で柵と思われる。建物2の柱穴1012と1174と重複関係にあり、建物2より新しい。柱穴1015・1013・1011・1009・1202・1175・1176の計7本の柱穴から構成されている。柱間は1175-1176間が1.8m、1202-1175間が2m、1009-



第15図 柵1 遺構実測図（縮尺1/100）

1202間が2.3m、1101-1009間が2.1m、1013-1011間が2.3m、1015-1013間が2.65mであり、西に向かうにつれ柱間が広くなる傾向にある。柱穴の掘方は径0.4~0.75mの円形で、深さは0.2~0.5m、柱痕跡から推定される柱径は0.2m程度である。柱穴1011掘方内から須恵器蓋（第55図12）が出土している。遺物は8世紀前半であるが、遺構の重複関係から8世紀後半以降の遺構と考えられる。



第16図 土坑1212 遺構実測図（縮尺1/50）

### 土坑

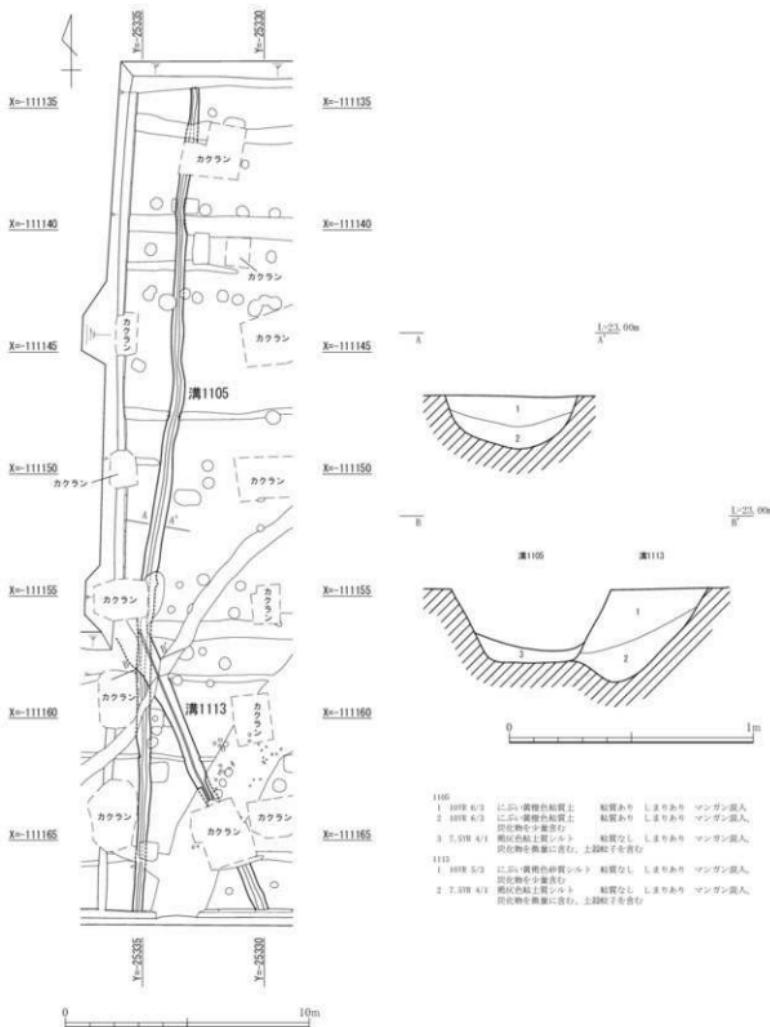
**土坑1212**（第16図、図版四） 中央区・東区において検出された土坑で南側を耕作溝、搅乱に、東側を溝1105に、北側を搅乱より消失する。そのため、全容は不明であるが、東西2.44m、南北2.10m以上で、検出面より底面までの深さは0.44mである。遺物は須恵器杯身（第56図43）、土師器甕（第56図40・41）、土師器皿（第56図39）、製塙土器（第56図42）などが出土している。8世紀中ごろである。

### 溝跡

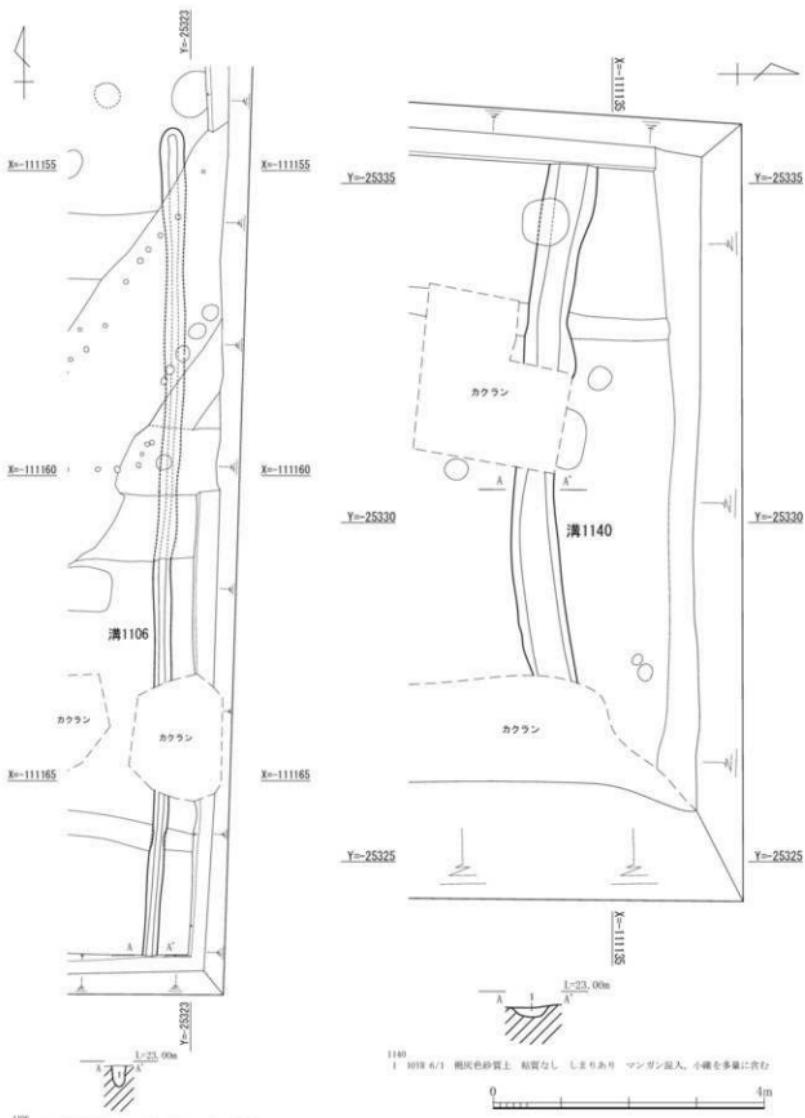
**溝1105**（第17図） 東区において検出された溝で、溝1139、1140、1172、1113、1138（耕作溝）、1104（耕作溝）、1102（耕作溝）、1101（耕作溝）、1108（耕作溝）、1110（耕作溝）、1144（耕作溝）、1214（耕作溝）、1118（耕作溝）、建物3、土坑1212、竪穴住居・2128、2113、2139、2103、2101、3111、3114よりも新しい。北側と南側は調査区外に延びる。南北35m以上、幅0.3mで調査区の南半まではほぼ正方位であるが、調査区北半では東に6°偏する。検出面から底面までの深さは0.2mで南に向かい緩やかに下がる。遺物は須恵器小形壺（第55図18）、須恵器杯蓋（第55図16）、須恵器高杯（第55図19）、須恵器鉢（第55図17）、灰釉陶器皿（第55図13）、土師器皿（第55図15）などが出土している。遺物の年代は8世紀末～9世紀初頭である。

**溝1106**（第18図） 東区において検出された溝で、溝1109（耕作溝）、1101（耕作溝）、1221、1222、1143、1112、竪穴住居2119・3112よりも新しい。南側は調査区外に延びていく。検出長13.5m、幅0.3mで正方位である。溝1105の正方位部分と平行して存在する。検出面よりの深さは0.3mで南に向かい緩やかに下がる。遺物は土師器高杯（第55図21）などが出土している。遺物の年代は8世紀末～9世紀初頭である。

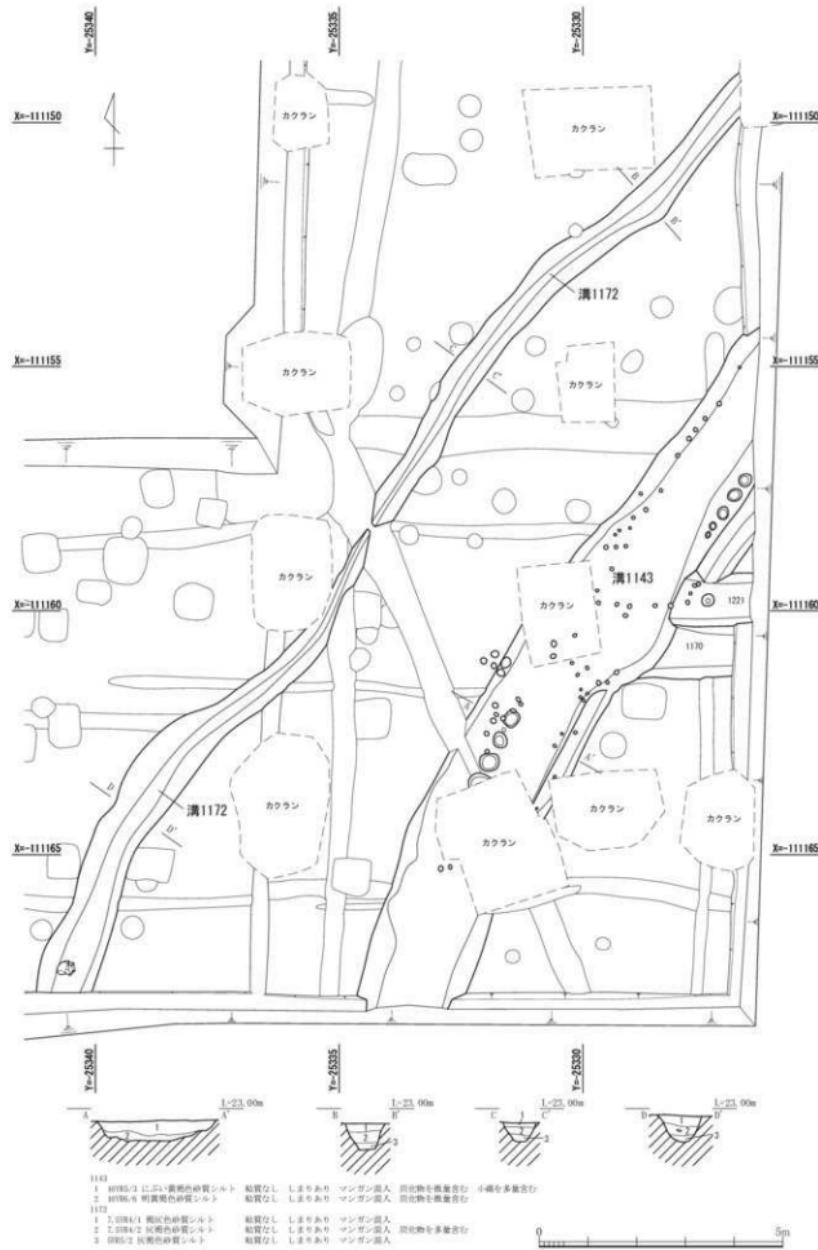
**溝1140**（第18図） 東区において検出された東西に延びる溝で、溝1105よりも古く、溝3109、土坑1171、竪穴住居2113・2118・2126・3105よりも新しい。検出長8.6m、幅0.6mで、溝の東西は調査区外に延びる。検出面よりの深さは0.25mである。四行八門にのることから境界溝の可能性



第17図 溝1105 遺構実測図 (縮尺1/200)



第18図 溝1106・1140 遺構実測図（縮尺1/200）



第19図 溝1143・溝1172遺構実測図 (縮尺1/100)

が考えられる。遺物は須恵器瓶（第55図23）、土師器椀（第55図22）などが出土している。遺物は8世紀前半のものと思われるが、遺構の重複関係から8世紀後半以降の遺構と考えられる。

溝1143（第19図、図版四・五） 東区において検出された溝で、ほぼ溝1172と並走する。溝1102（耕作溝）、1101（耕作溝）、1108（耕作溝）、1110（耕作溝）、1170（耕作溝）、1113、1112より古く、竪穴住居2102、2119、2127、3106、3113より新しい。北側と南側は調査区外に延びていく。幅2.3m、検出長15.8mで東に30°偏する。検出面から底面までの深さは、北側で0.4m、南側で0.6mであり北より南に向かい深くなる。断面形状は両側に犬走り状の段をもち逆凸字状を基本とする。この犬走り状の段部を中心に径0.1m程の杭列が認められ護岸杭とみられるが、溝底面中央部にも連続的に認められることから堰などの構造があった可能性も考えられる。また、部分的に径0.15～0.4mのビットが列状に並ぶ箇所もあり、柱列が用いられた箇所もあったとみられる。溝の堆積土は大きく2層に大別されるが、上層は人為的に埋め戻された可能性が考えられ、下層は砂質土であり、流水があったことが伺える。溝底面には部分的に沈鉄層が形成されていた。遺物は須恵器杯（第55図25・26）、須恵器杯蓋（第55図24）などが出土している。溝の機能段階は8世紀末～9世紀前半であり、耕作溝が開削される中世以降には埋め戻されたものとみられる。

溝1172（第19図、図版五） 中央区・東区において検出された溝でほぼ溝1143と並走する。溝1109（耕作溝）、1193（耕作溝）、1101（耕作溝）、1102（耕作溝）、1112（耕作溝）、1105より古く、竪穴住居2148、2154、2140、土坑3110より新しい。北側と南側は調査区外に延びていく。幅0.6～1.1m、検出長23.8mで緩やかに蛇行しており、東に35°偏する。検出面から底面までの深さは、北側で0.5m、南側で0.6mであり北より南に向かい深くなる。断面形状は逆台形を基本とする。溝の堆積土は3層に分別されるが、いずれも砂質土であり、流水があったことが伺える。遺物は主に2層から須恵器甕（第56図36）、須恵器鉢（第56図35）、須恵器杯蓋（第56図31）、須恵器杯（第56図32～34）、土師器甕（第56図30）、土師器皿（第56図27）、移動式甕（第56図28・29）などが出土している。溝の機能段階は7世紀末から8世紀前半を中心とする時期であり、耕作溝が開削される中世以降には埋没したものとみられる。

## 2) 第2遺構面検出遺構

### 概要

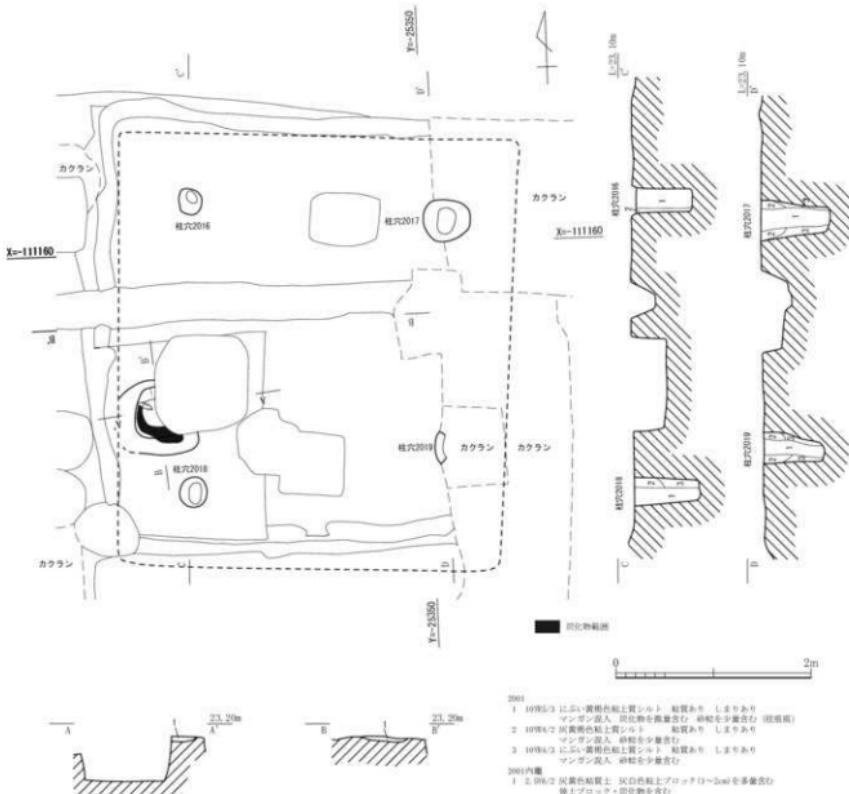
第2遺構面では、飛鳥時代～奈良時代にかけての竪穴住居跡23軒を検出した。遺構の検出状況から、主に正方位軸の竪穴住居を2面検出遺構として取り扱った。2001、2003、2103からは作り付けの竈が確認され、貼床が確認されるものもあった。なお、竪穴住居2114、2134、2140は2面検出遺構として調査を行ったが、本来は3面検出遺構として扱ったほうがよいものである。

### 竪穴住居

竪穴住居2001（第20図、図版七） 南区において検出された竪穴住居である。竪穴住居2004上面で検出されたが、壁の立ち上がりは上面の耕作により削平を受け消失しており、僅かに竈の火床部および主柱穴とみられる柱穴2016、2017、2019、2018が認められたのみである。床面は不明確

であるが、明確な貼床構造は確認されていない。そのため、規模は不明であるが、主柱穴の状況から1辺4m程の方形プランが推定できる。主柱穴の掘方は径0.25～0.5mの円形で、深さは0.6mで柱痕跡が確認されている。竈は西辺部の南側に偏しており、焚口部は柱穴1062により破壊されているため全容は不明確であるが、長さ0.5m以上、幅0.75m、火床部径0.5m、深さ0.2mである。火床面は擂鉢状に僅かに窪みをもち被熱していた。遺物は竈内より土師器甕の胴部破片が出土している。7世紀中ごろとみられる。

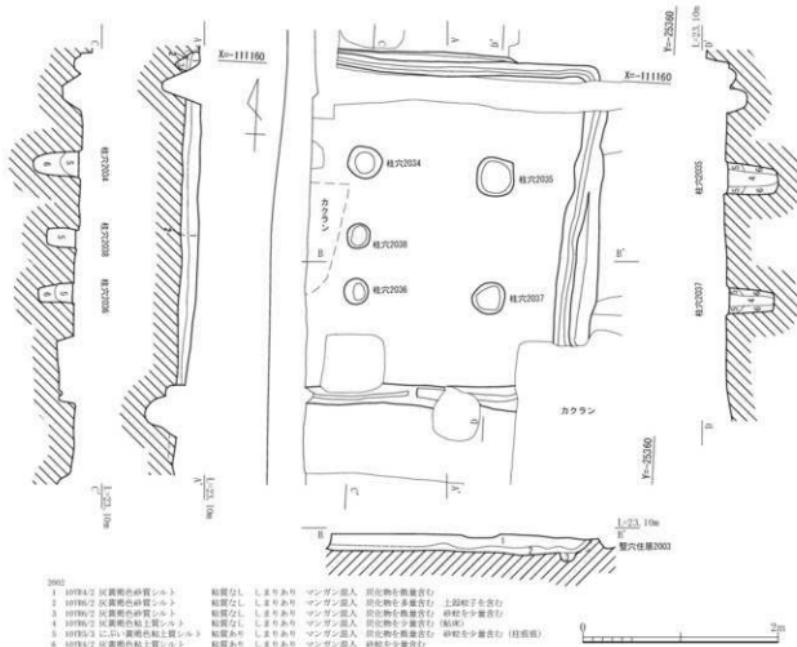
**堅穴住居2002（第21図、図版八）** 南区において検出された堅穴住居である。東側で堅穴住居2003と重複するが、2003より新しい。西側は調査区外にかかるが、東西2.9m以上、南北3.6mで平面形はほぼ正方形を呈する。正方位である。検出面から床面までの深さは0.2mで、壁内側には幅0.2m、深さ0.15mの壁周溝が全周する。主柱穴は2034、2035、2037、2036の4本柱とみられ、2034と2036の間には2038の補助柱が検出された。2038の深さは0.3mで主柱穴より深い。主柱穴



第20図 堅穴住居2001 遺構実測図（縮尺1/50）

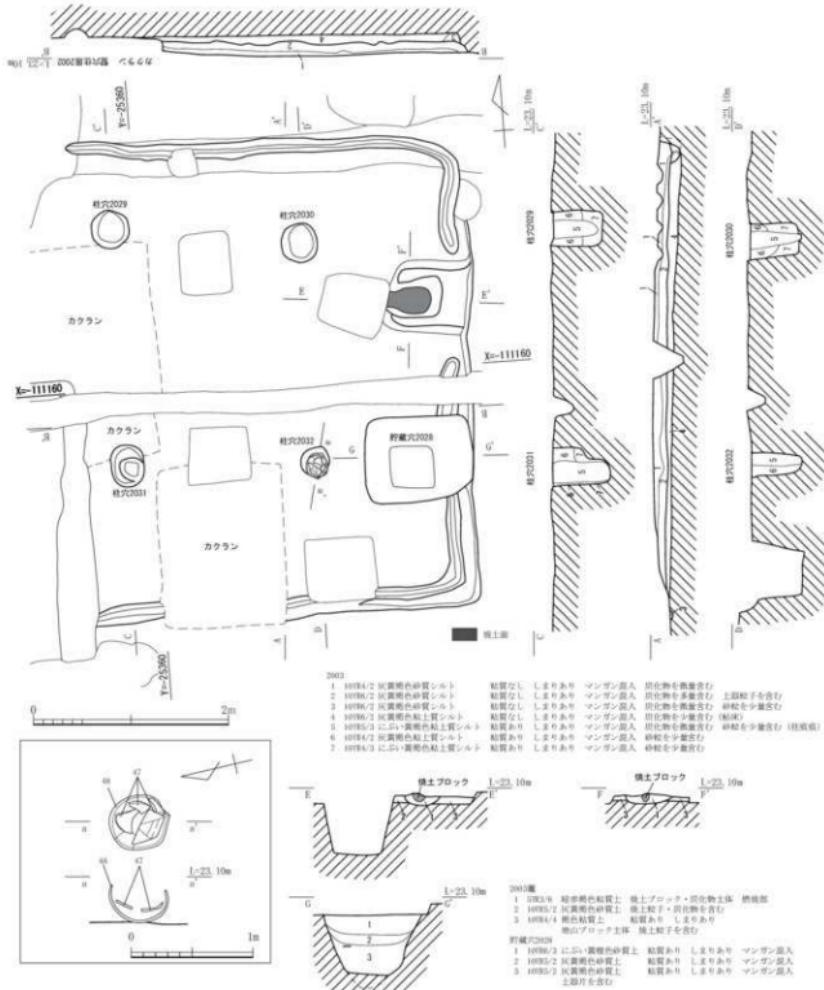
の掘方は径0.25～0.4mの円形で、深さは0.4～0.5mで、2035、2037からは柱痕跡が確認されている。床面はほぼ平坦であるが、明瞭な貼床面の痕跡は見いだせなかった。竈等の火処は確認されていない。遺物は、床面付近より土師器甕口縁部小片、須恵器杯身破片（第57図44）が出土している。8世紀後半とみられる。

堅穴住居2003（第22図、図版八・九） 南区において検出された堅穴住居である。西側で2002と重複するが、2002が新しい。そのため西側の壁は消失している。東西4m以上、南北4.9mでほぼ正方形を呈するものとみられる。正方位である。検出面から床面までの深さは0.2mで、壁内側には幅0.15m深さ0.1mの壁周溝が巡るが竈部は途切れる。主柱穴は2029、2030、2032、2031の4本柱で、いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘り方は径0.3～0.4mの円形で、深さは0.5～0.6mである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.05～0.1m程の貼床を行い床面としている。東壁において竈と貯蔵穴の可能性がある土坑(2028)が検出された。竈は東壁の主軸より北側に偏しており長さ0.8m、幅0.75mの長方形で、火床面0.25m×0.45mである。袖部は幅0.3m程で、褐色粘質土により作られ、火床面は擂鉢状に僅かに窪みをもち被熱していた。竈内からは構築材とみられる焼土ブロックが検出されている。貯蔵穴2028は東壁の主軸より南側に偏しており長さ1.1m、幅0.85mの隅丸長方形、深さ0.7mで床面は平坦である。遺物は柱穴



第21図 堅穴住居 2002遺構実測図(縮尺1/50)

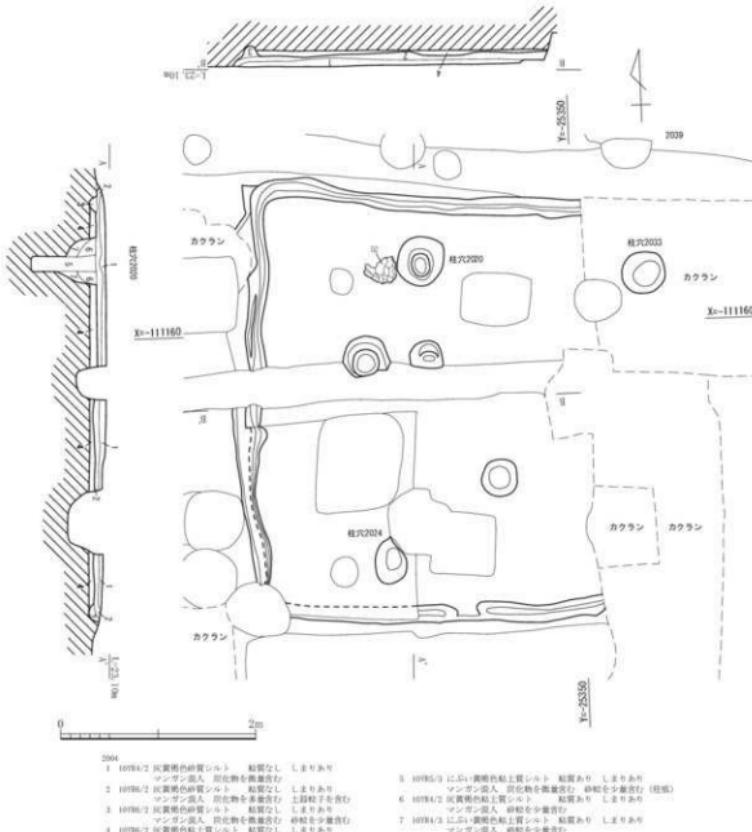
2032上より土師器壺（第57図48）の胴部下半が潰れた状態で出土しており、床面付近より須恵器杯蓋（第57図45）、土師器杯（第57図46・47）などが出土している。8世紀中ごろ～後半とみられる。貯蔵穴2028からは土師器鉢（第57図49）、須恵器杯蓋（第57図50）などが出土している。7世紀中ごろのものであり、2028は位置から貯蔵穴と考えたが、出土遺物からみて、混入でな



第22図 竪穴住居 2003 遺構実測図（縮尺1/50・1/20）

れば住居に先行する土坑の可能性も考えられる。

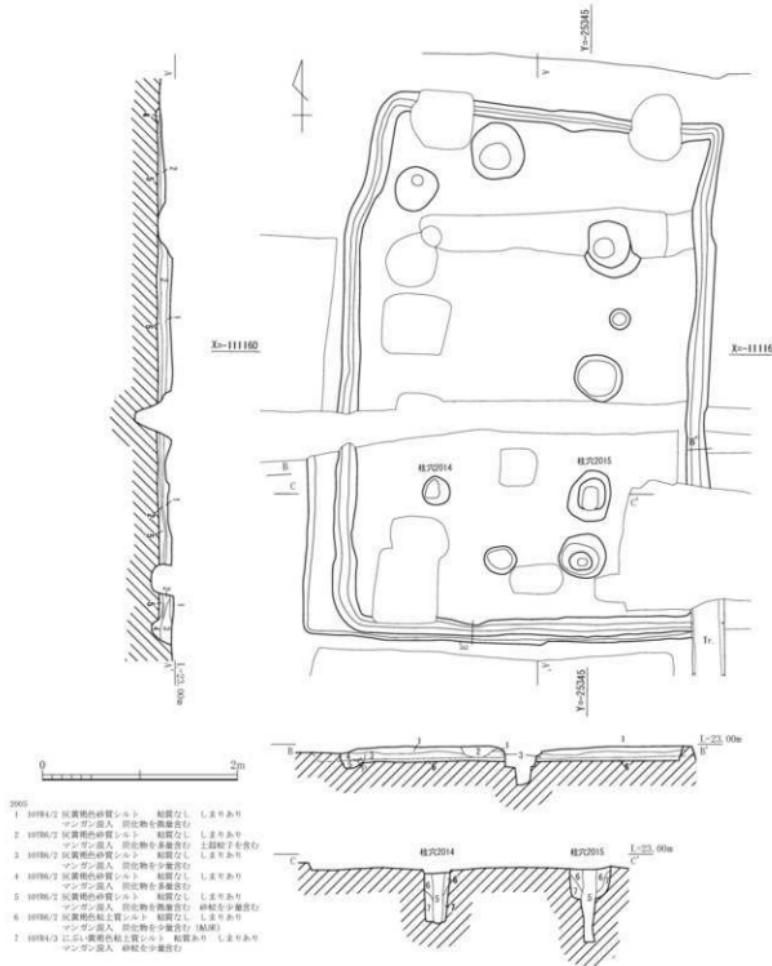
**竪穴住居2004**（第23図、図版九） 南区において検出された竪穴住居である。上面には竪穴住居2001が存在しており削平を受ける。東西3.6m以上、南北4.3mで、主柱穴の配置から東西軸の長方形を呈するものとみられる。正方位である。検出面から床面までの深さは0.1mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.1mの壁周溝が巡るが、南辺の一部が0.2m程途切れている。主柱穴は2020、2033、2024が検出されたが、南東側は搅乱により深く削平されていることから、4本柱であったことが窺われる。いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.4～0.5mの円形で、深さは0.6～0.7mである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.08m程の貼床を行い床面としている。なお、南西部の床面は一部調査時に貼床部まで掘削してしまっている。竈等の火処は確認されていない。遺物は柱穴2020の西側に接して弥生時代中期の弥生土器壺（第57図51・



第23図 竪穴住居 2004 遺構実測図（縮尺 1/50）

52) の胴部下半が潰れて横転した状態で出土しているが混入であろう。

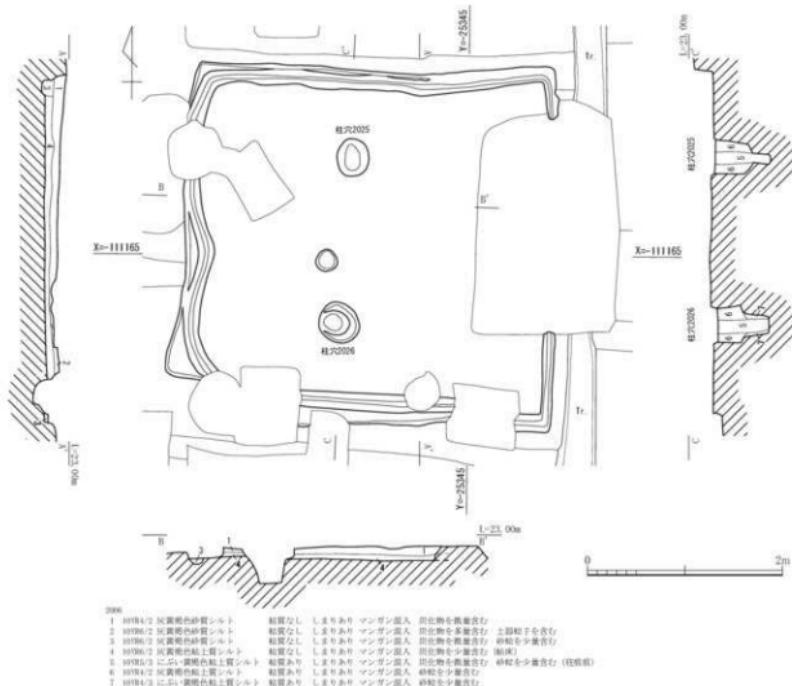
**竪穴住居2005**（第24図、図版十） 南区において検出された竪穴住居である。南側において竪穴住居2006と0.1m程の間隔で接続するが、直接の重複関係ではない。南北5.5m、東西3.8mの南北軸の長方形である。正方位である。検出面から床面までの深さは0.1m程で、壁内側には幅0.24m、深さ0.1mの壁周溝が全周する。床面より柱穴2007、2008、2009、2010、2011、2012、2013、2014、2015が検出されたが、柱痕跡が認められたのは2012、2013、2014、2015であることからこれ



第24図 竪穴住居 2005 遺構実測図 (縮尺 1/50)

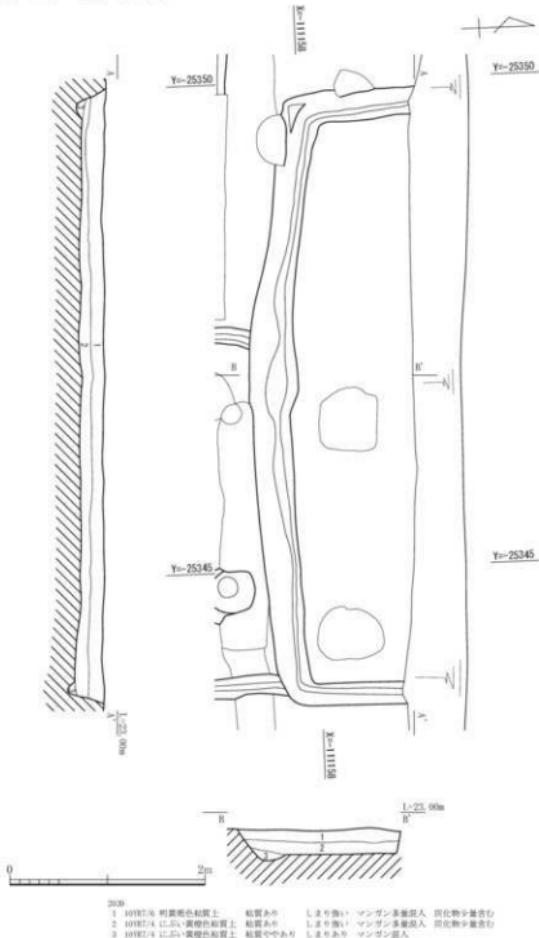
らが主柱穴であったとみられる。主柱穴の掘方は径0.4～0.6mの円形で、深さ0.5～0.7mである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.08m程の貼床を行い床面としている。竈等の火処は確認されていない。遺物は床面付近より須恵器杯蓋（第57図54）、土師器杯（第57図53）などが出土している。遺物は6世紀中ごろのものであるが、遺構の重複関係から7世紀中ごろ～後半以降の遺構と考えられる。

**竪穴住居2006**（第25図、図版十） 南区において検出された竪穴住居である。北側において竪穴住居2005と0.1m程の間隔で近接するが、直接の重複関係ではない。東西3.8m、南北3.2mの東西軸の方形で東側が搅乱により一部消失する。正方位である。検出面から床面までの深さは0.06mで、壁内側には幅0.2m、深さ0.1mの壁周溝が全周する。主柱穴は2025、2026の2本柱で、いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.4mの円形で、深さ0.6mである。主柱穴の柱筋は南北の中心軸よりやや西に偏している。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.08m程の貼床を行い床面としている。竈等の火処は確認されていない。遺物は床面付近より須恵器高杯（第57図56）、土師器杯（第57図55）などが出土している。8世紀前半である。



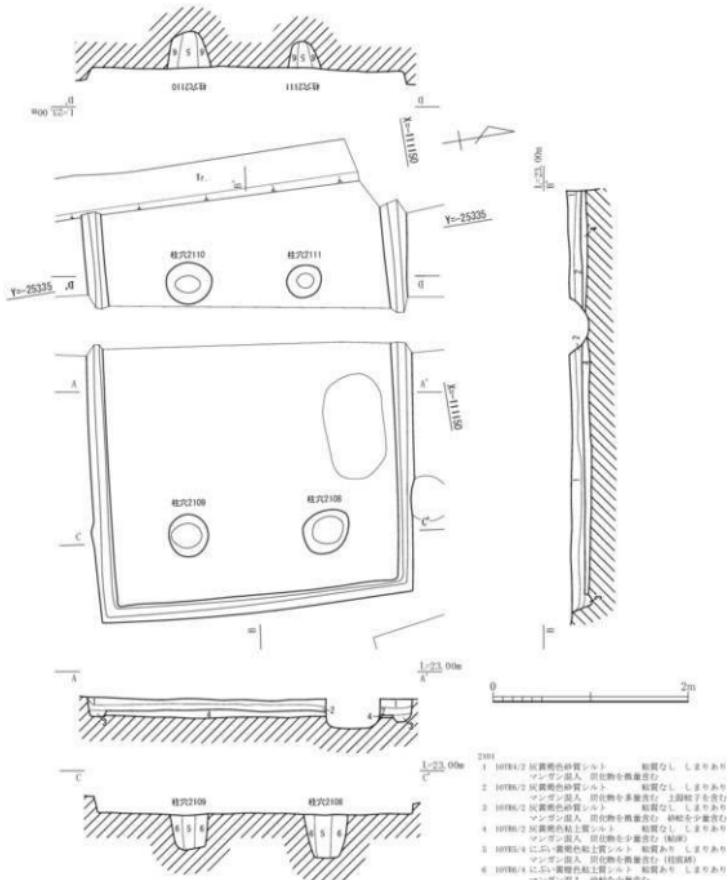
第25図 竪穴住居 2006 遺構実測図（縮尺1/50）

**堅穴住居2039**（第26図、図版十一） 南区において検出された堅穴住居である。南側において堅穴住居2005、溝3001と重複するが堅穴住居2005より古く溝3001より新しい。北側の大半は調査区外にかかる。東西6.3mの方形とみられ、正方位である。検出面から床面までの深さは0.2mで壁内側には幅0.12m、深さ0.05mの壁周溝が巡る。主柱穴は確認されていない。床面はほぼ平坦であるが明確な貼床構造は認められない。竈等の火処は確認されていない。須恵器平瓶（第57図61）、須恵器甕（第57図62）、土師器杯（第57図57・58）、土師器甕（第57図59）などが出土している。7世紀中ごろ～後半である。



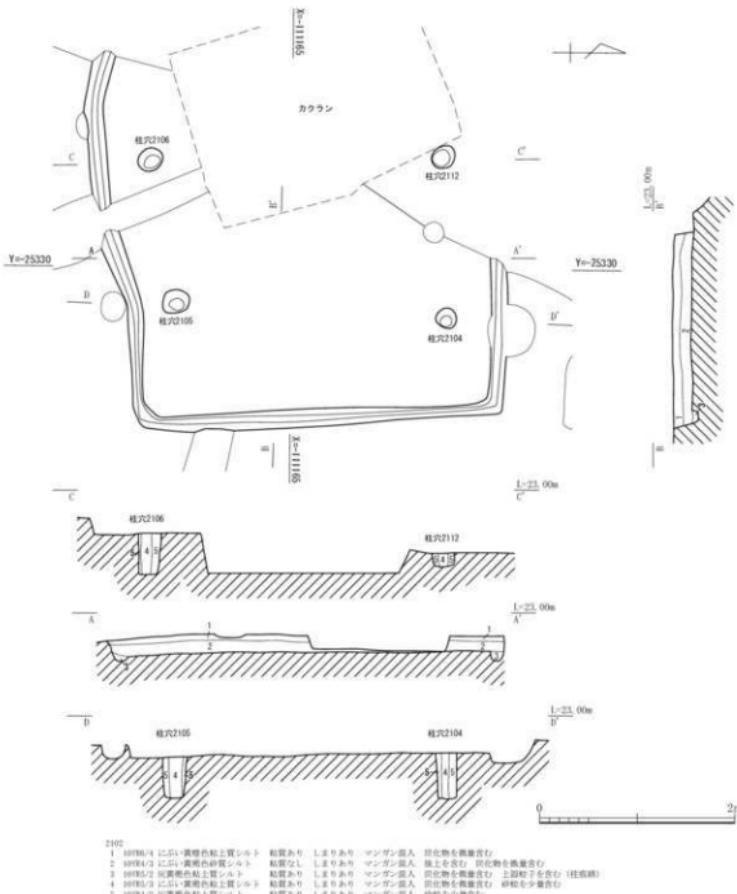
第26図 壁穴住居2039遺構実測図(縮尺1/50)

堅穴住居2101（第27図、図版十一） 東区において検出された堅穴住居である。東西4.2m以上、南北3.4mの東西軸の長方形である。西辺は調査区外にかかる。正方位である。検出面から床面までの深さは0.1mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.07mの壁周溝が巡る。主柱穴は2111、2108、2109、2110の4本柱で、いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.5~0.4mの円形で、深さ0.3~0.5mである。主柱穴の柱筋は堅穴対角線よりやや内側に偏している。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.08m程の貼床を行い床面としている。竈等の火處は確認されていない。遺物は床面付近より須恵器杯（第58図65）、甕（第58図66）、土師器杯（第58図63）、土師器高杯（第58図64）などが出土している。7世紀末~8世紀前半である。



第27図 堅穴住居2101 遺構実測図 (縮尺1/50)

堅穴住居2102（第28図、図版十二） 東区において検出された堅穴住居である。西側において溝1143と、北側において堅穴住居2127と重複するが、溝1143より古く、堅穴住居2127より新しい。東西3.9m、南北3.9～4.3mの正方形であるが南辺は湾曲する。正方位である。検出面から床面までの深さは0.2mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.05mの壁周溝が巡る。主柱穴は2112、2104、2105、2106の4本柱で、いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.2～0.3mの円形で、深さ0.4mである。床面はほぼ平坦であるが明確な貼床構造は認められない。竈等の火処は確認されていない。遺物は出土していない。



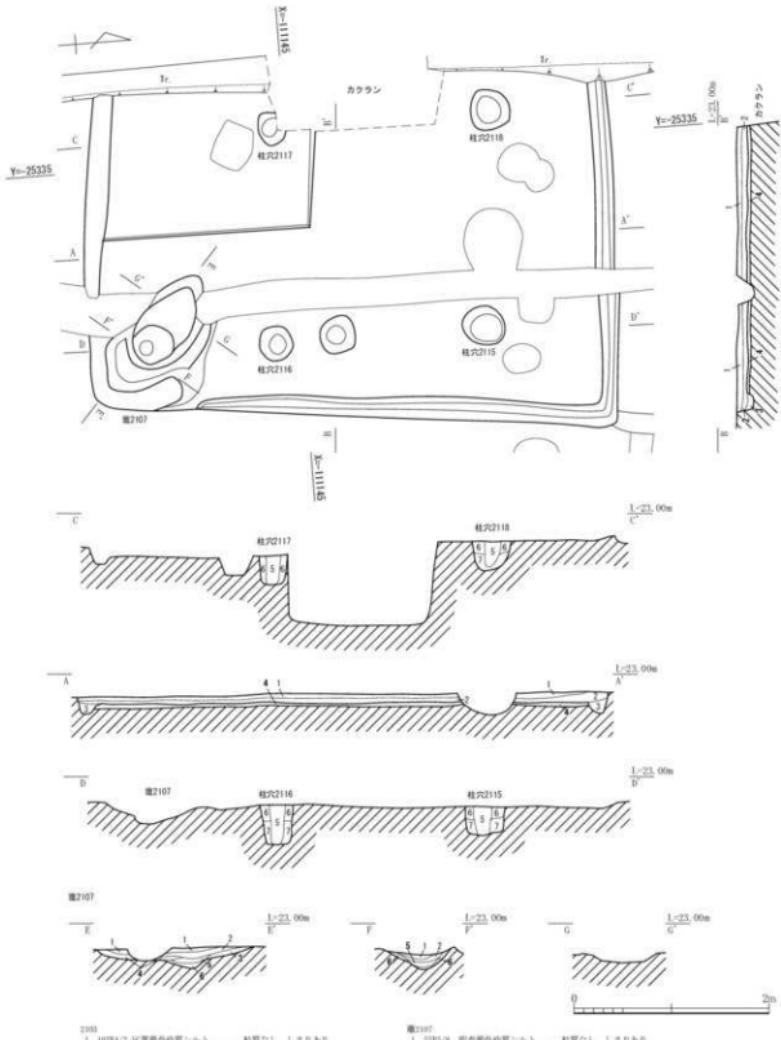
第28図 堅穴住居2102 遺構実測図（縮尺1/50）

**豎穴住居2103**（第29図、図版十二・十三） 東区において検出された豎穴住居である。北側において豎穴住居2139と重複するが新しい。東西3.6m以上、南北5.4mの東西軸の長方形である。西辺は調査区外にかかる。正方位である。検出面から床面までの深さは0.13mで、壁内側には幅0.2m、深さ0.07mの壁周溝が巡るが竈部は途切れている。主柱穴は2118、2115、2116、2117の4本柱で、いずれも柱痕跡が認められた。柱穴2116の北側にはピット2133が確認されている。主柱穴の掘方は径0.3～0.4mの円形で、深さ0.3～0.4mである。主柱穴の柱筋は豎穴北側にやや偏しているが、これは南東隅部に竈が存在するためである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのに厚さ0.05m程の貼床を行なった。なお、南西部の床面は一部調査時に貼床部まで掘削してしまっている。北東壁隅において竈2107が検出された。耕作溝1105に埋されており右袖部は消失するが、長さ1.65m、幅1.2mの長方形で、火床面は0.4m×0.4m程で被熱していたが、火床面の下部には0.6×0.4m程の擂鉢状の掘込みが確認されており、内部には微量の焼土や炭化物が含まれていた。袖部はほとんど遺存していなかった。遺物は床面付近より須恵器杯（第58図67）、土師器甕（第58図68）などが出土している。7世紀前半である。

**豎穴住居2113**（第30図、図版十三） 東区において検出された豎穴住居である。南側において豎穴住居2120・2128と重複するが、いずれよりも新しい。南北6.3mの方形で、北側の大半が調査区外にかかる。西に20°偏する。検出面から床面までの深さは0.3mで、壁内側には幅0.2m、深さ0.1mの壁周溝が巡る。主柱穴は2121、2125の2本が検出されているが、いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.3～0.4mの円形で、深さ0.17～0.2mである。床面はほぼ平坦であるが明確な貼床構造は認められない。竈等の火処は確認されていない。遺物は床面付近より須恵器杯（第58図70）、土師器甕（第58図69）などが出上している。遺物は7世紀末～8世紀初頭のものであるが、遺構の重複関係から8世紀後半以降の遺構と考えられる。

**豎穴住居2114**（第30図、図版十四） 東区において検出された豎穴住居である。北側において豎穴住居2126と、南側において豎穴住居2134と重複するが、いずれよりも新しい。北側は搅乱により消失しているため規模は不明である。3.3m以上の方形で、東側が調査区外にかかる。東に8°偏する。検出面から床面までの深さは0.3mで、壁内側には幅0.17m、深さ0.05mの壁周溝が巡る。主柱穴は2122の1本が検出されており、柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.38mの円形で、深さ0.3mである。床面はほぼ平坦であるが明確な貼床構造は認められない。竈等の火処は確認されていない。遺物の出土はない。

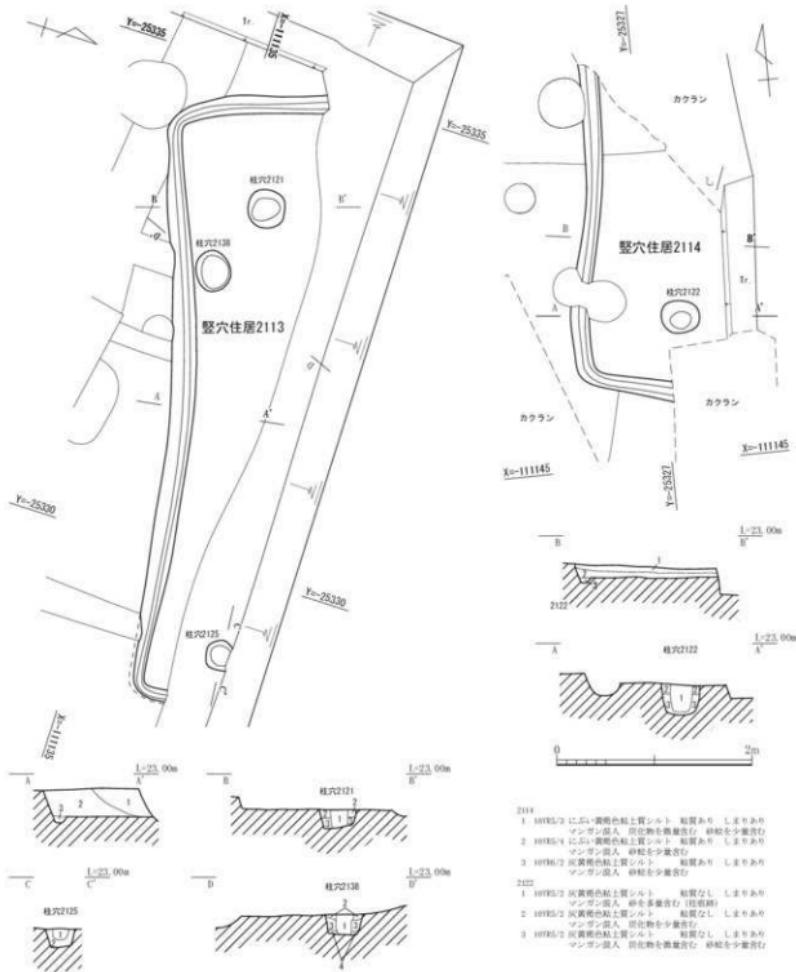
**豎穴住居2119**（第31図、図版十四） 東区において検出された豎穴住居である。西側において溝1143・豎穴住居2127と北側において土坑1115と、南側において豎穴住居2102とそれぞれ重複するが、溝1143・土坑1115・豎穴住居2102より古く豎穴住居2127より新しい。東西4.5m以上、南北4.6mの方形とみられる。東辺は調査区外にかかる。正方位である。検出面から床面までの深さは0.2mで、壁内側には幅0.1m、深さ0.12mの壁周溝が巡る。主柱穴は2131、2129、2130の3本が確認されたが、北西の主柱穴は搅乱により消失していた。いずれも柱痕跡が認められた。柱穴2130の東側にピット2132が確認されている。主柱穴の掘方は径0.2～0.35mの円形で、深さ0.4mである。主柱穴の柱筋は豎穴北側にやや偏しており、豎穴住居2103同様に南東隅部に竈が存在した可能性



- 2103
- 1 1078/2 反葉褐色砂質シルト 粘質なし しまりあり
  - 2 1078/2 反葉褐色砂質シルト 粘質なし しまりあり マンガニ盛入、汎化物を多量含む
  - 3 1078/2 反葉褐色砂質シルト 粘質なし しまりあり
  - 4 1078/2 反葉褐色砂土上層 粘質なし しまりあり マンガニ盛入、汎化物を少量含む (鉢底)
  - 5 1078/3 にら葉褐色粘土質シルト 粘質あり しまりあり
  - 6 1078/2 反葉褐色粘土質シルト 粘質あり しまりあり マンガニ盛入、砂粒を少量含む
  - 7 1078/2 にら葉褐色粘土質シルト 粘質あり しまりあり マンガニ盛入、砂粒を少量含む

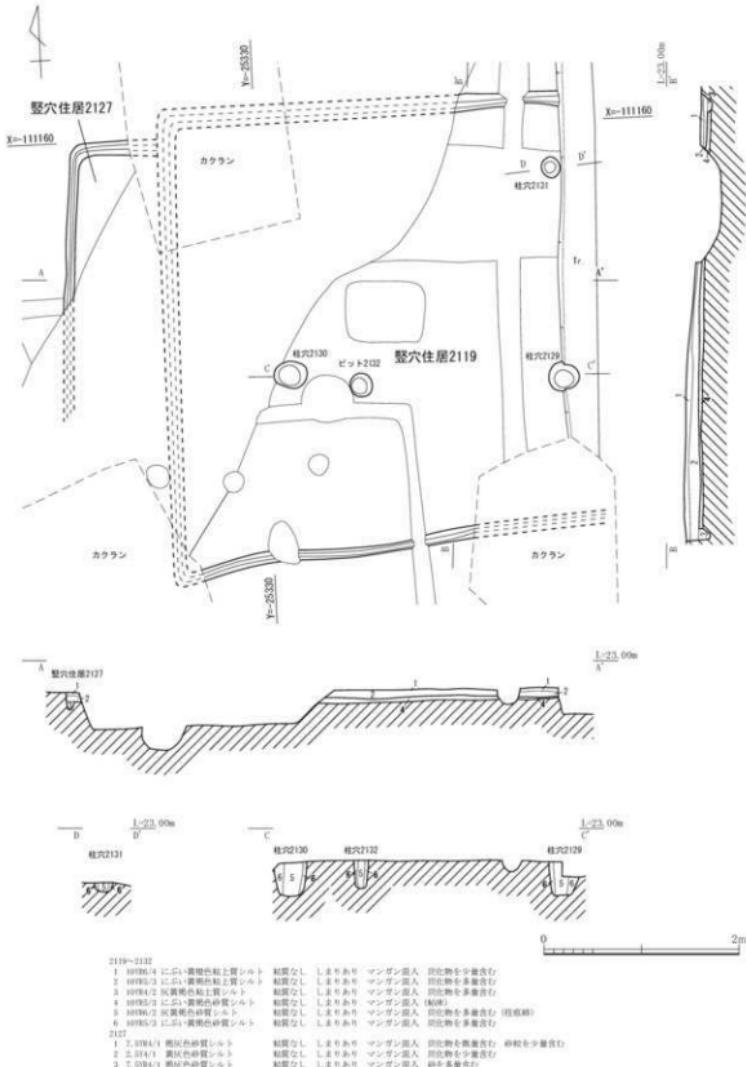
- 2107
- 1 ST97/9 明赤褐色砂質シルト 粘質なし しまりあり
  - 2 10716/6 明黄褐色砂質シルト 粘質なし しまりあり
  - 3 10717/6 明黄褐色砂質シルト 粘質なし しまりあり
  - 4 10717/4 にら葉褐色砂質シルト 粘質なし しまりあり マンガニ盛入、汎化物を少量含む
  - 5 10717/6 明黄褐色砂質シルト 粘質なし しまりあり
  - 6 10717/6 明黄褐色砂質シルト 粘質なし しまりあり マンガニ盛入、砂粒を少量含む

第29図 壁穴住居 2103 遺構実測図 (縮尺 1/50)



- 2113  
 1 10035-3 にぶ・黄褐色粘土質シート 砂質なし しまりあり マンガン混入 砂化物を少量含む  
 2 10036-1 沈炭灰砂質土 砂質なし しまりあり マンガン混入 砂化物を多量含む  
 3 10036-2 沈炭灰質土 砂質なし しまりあり マンガン混入 砂を多量含む  
 2114  
 1 10036-2 にぶ・黄褐色粘土質シート 砂質なし しまりあり マンガン混入 砂化物を多量含む  
 2 10036-2 黄褐色粘土質シート 砂質なし しまりあり マンガン混入 砂化物を少量含む  
 3 10036-2 黄褐色粘土質シート 砂質なし しまりあり マンガン混入 砂化物を微量含む  
 2122  
 1 277 層の砂質土 砂質なし しまりあり マンガン混入 砂化物を少量含む  
 2 017-2 灰白色砂質土 砂質なし しまりあり マンガン混入 上層砂子を含む  
 2123  
 1 2.30m 黄褐色砂質土 砂質なし しまりあり マンガン混入 砂化物を微量含む  
 2 3W-1 黄褐色砂質土 砂質なし しまりあり マンガン混入 砂化物を少量含む  
 3 DW-1 黄褐色砂質土 砂質なし しまりあり マンガン混入 砂を多量含む  
 4 DB-1 黄褐色砂質土 砂質あり しまりあり マンガン混入

第30図 壊穴住居2113・壊穴住居2114 遺構実測図(縮尺1/50)

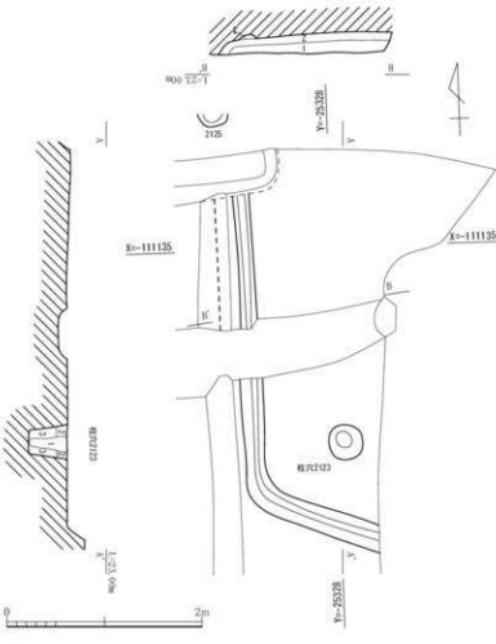


第31図 堅穴住居2119・堅穴住居2127 遺構実測図（縮尺1/50）

がある。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.05m程の貼床を行ない床面としている。竈等の火処は確認されていない。遺物の出土はない。

#### 堅穴住居2120（第32図、図版十五）

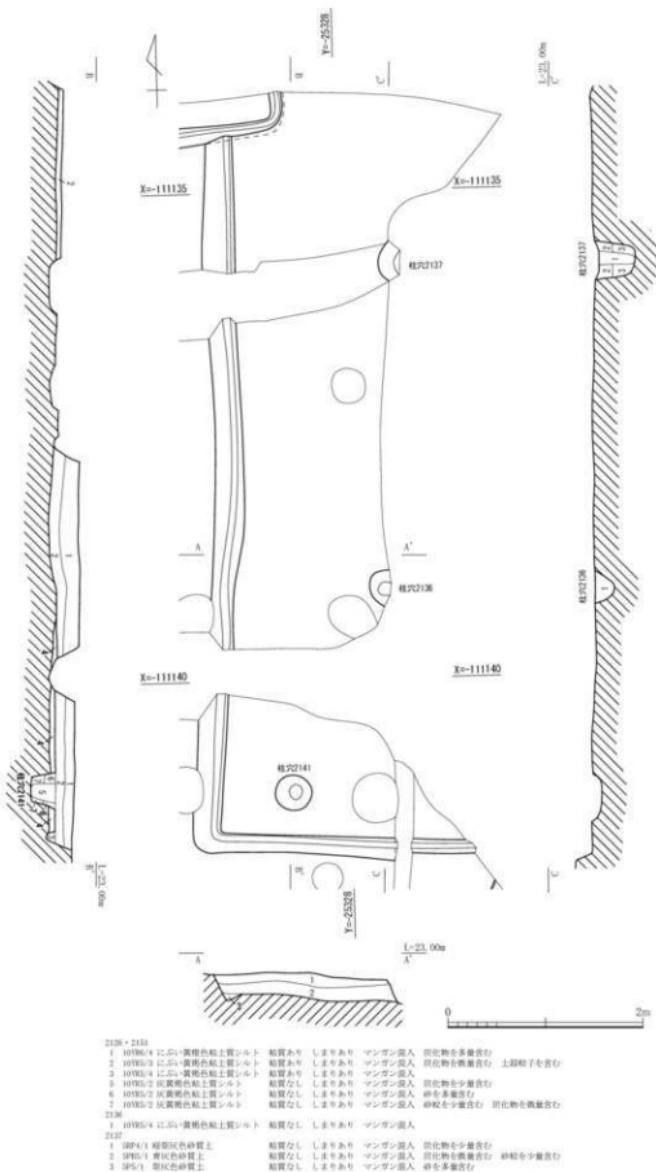
東区において検出された堅穴住居である。北側において堅穴住居2113と南側において堅穴住居2126とそれぞれ重複するが、堅穴住居2113より古く堅穴住居2126より新しい。東西2.7m以上、南北4.1m以上の方形とみられる。北・東辺は調査区外にかかる。正方位である。検出面から床面までの深さは0.2mで、壁内側には幅0.25m、深さ0.05mの壁周溝が巡る。主柱穴は2123の1本が確認されたが、南西隅の主柱穴になるものとみられる。柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.35mの円形で、深さ0.4mである。床面はほぼ平坦であるが明確な貼床構造は認めら



第32図 堅穴住居2120 遺構実測図（縮尺1/50）

れない。竈等の火処は確認されていない。遺物は床面付近より須恵器杯（第58図72）などが出土している。8世紀後半である。

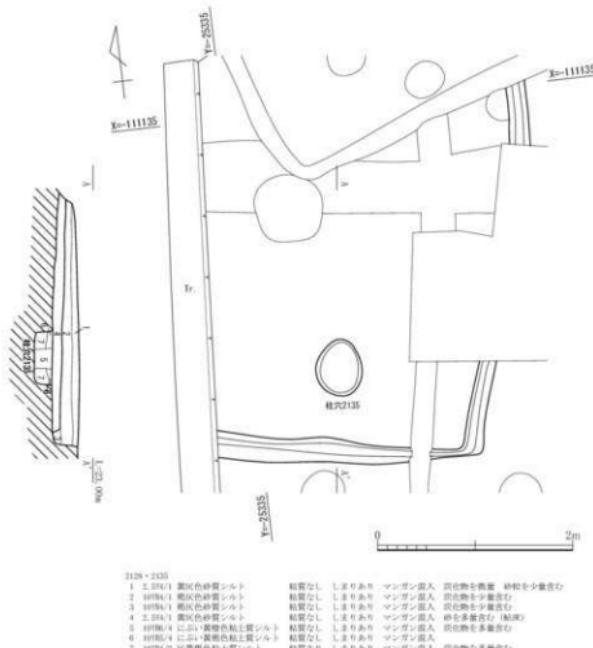
**堅穴住居2126**（第33図、図版十五） 東区において検出された堅穴住居である。北側において堅穴住居2120と南側において堅穴住居2114とそれぞれ重複するが、いずれよりも古い。東西2.9m以上、南北7.3m以上の方形とみられ、大形の堅穴住居である。北・東辺は調査区外にかかるが東側は搅乱により大きく消失する。正方位である。検出面から床面までの深さは0.2mで、壁内側には幅0.08m、深さ0.08mの壁周溝が巡る。主柱穴は2136・2137の2本が確認され、2137からは柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.4mの円形で、深さ0.4mである。床面はほぼ平坦で、南辺から北側へ2.3mの範囲に厚さ0.05m程の貼床が認められた。北側の床面においては明確な貼床構造は認められておらず、拡張の可能性が示唆される。竈等の火処は確認されていない。遺物は床面付近より須恵器杯（第58図73）などが出土している。8世紀前半である。



第33図 堅穴住居2126遺構実測図(縮尺1/50)

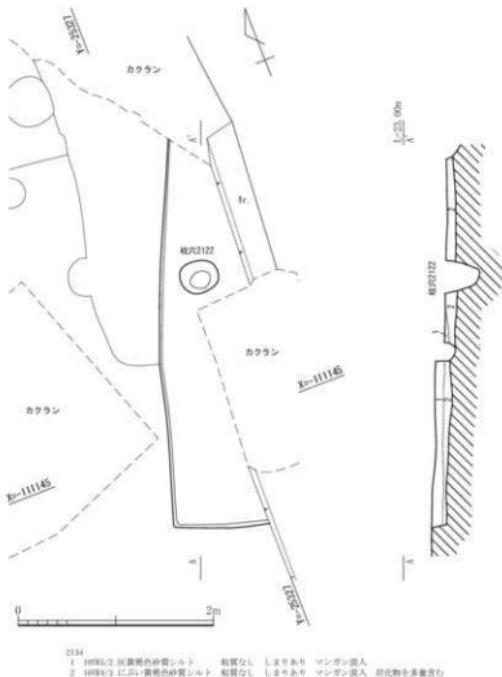
**豊穴住居2127** (第31図、図版十六) 東区において検出された豊穴住居である。南側において溝1143と、東側において豊穴住居2119と重複するが、いずれよりも古い。そのため、僅かに北西隅部を確認したに過ぎない。正方位である。検出面から床面までの深さは0.1mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.05mの壁周溝が巡る。主柱穴は確認されていない。床面はほぼ平坦であるが明確な貼床構造は認められない。竈等の火処は確認されていない。遺物の出土はない。

**豊穴住居2128** (第34図、図版十六) 東区において検出された豊穴住居である。北側において豊穴住居2113と、南側において建物4・豊穴住居2139と重複するが、豊穴住居2139より新しく、建物4・豊穴住居2113より古い。東西3.4m以上、南北3.8m以上の方形とみられ、西側は調査区外にかかる。東に7° 傾する。検出面から床面までの深さは0.17mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.1mの壁周溝が巡る。主柱穴は2135の1本が確認され、柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.37～0.57mの円形で、深さ0.17mである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.12m程の貼床が認められた。他の豊穴住居と比較すると貼床の厚さが厚い。竈等の火処は確認されていない。遺物は床面付近より須恵器杯蓋（第58図74）、土師器壺（第58図75）、土師器ミニチュア土器（第58図76）などが出土している。8世紀前半である。



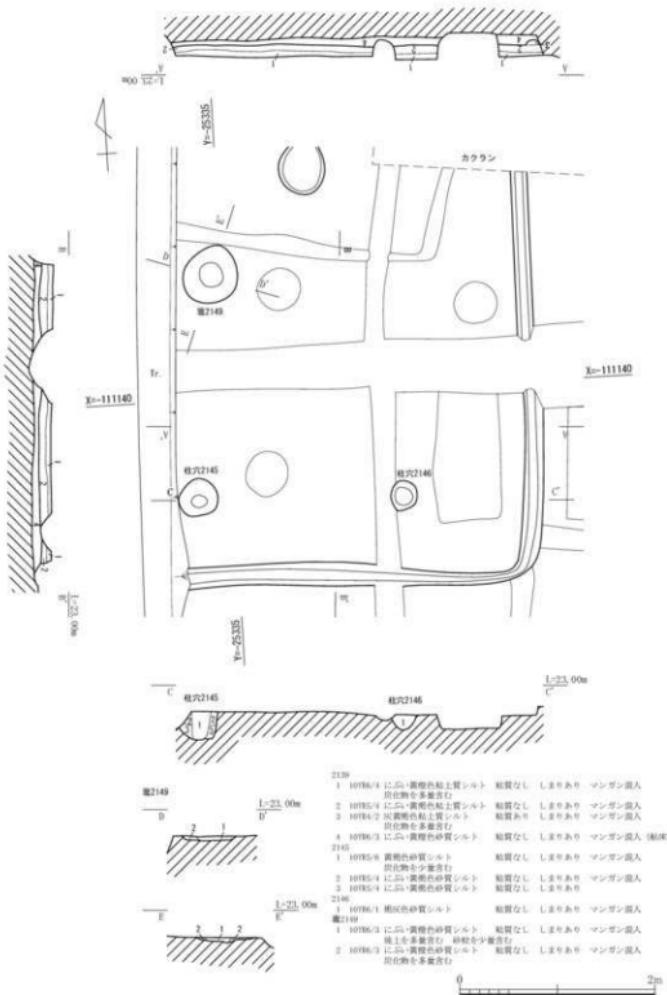
第34図 豊穴住居2128 遺構実測図 (縮尺1/50)

**豊穴住居2134**（第35図、図版十七） 東区において検出された豊穴住居である。南側において豊穴住居2114と重複するが、古い。北側は搅乱により消失しているため規模は不明である。南北4mの方形で、東側の大半が調査区外にかかる。東に20°偏する。検出面から床面までの深さは1.2mで、壁周溝や主柱穴は認められない。床面はほぼ平坦であるが明確な貼床構造は認められない。竈等の火処は確認されていない。須恵器杯（第58図77）が出土している。6世紀前半である。



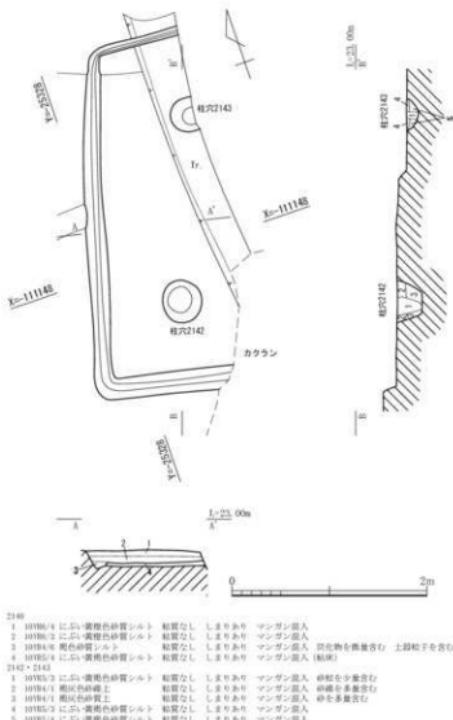
第35図 豊穴住居2134 遺構実測図（縮尺1/50）

**豊穴住居2139**（第36図、図版十七・十八） 東区において検出された豊穴住居である。北側において豊穴住居2113・2128と、南側において豊穴住居2103と重複するが、いずれよりも古い。東西3.8m以上、南北4.3m以上の方形とみられ、西側は調査区外にかかる。正方位である。検出面から床面までの深さは0.12mで、壁内側には幅0.17m、深さ0.04mの壁周溝が巡る。主柱穴は2145・2146の2本が確認され、いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.28～0.4mの円形で、深さ0.3mである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.06m程の貼床が認められた。柱穴2145の北1.7mの地点で0.57m×0.6mの円形で深さ0.05mの断面皿状の掘込み中に焼土が確認された（竈2149）。壁から離れているため竈と考えにくいが、火処であったものとみられる。遺物の出土はない。



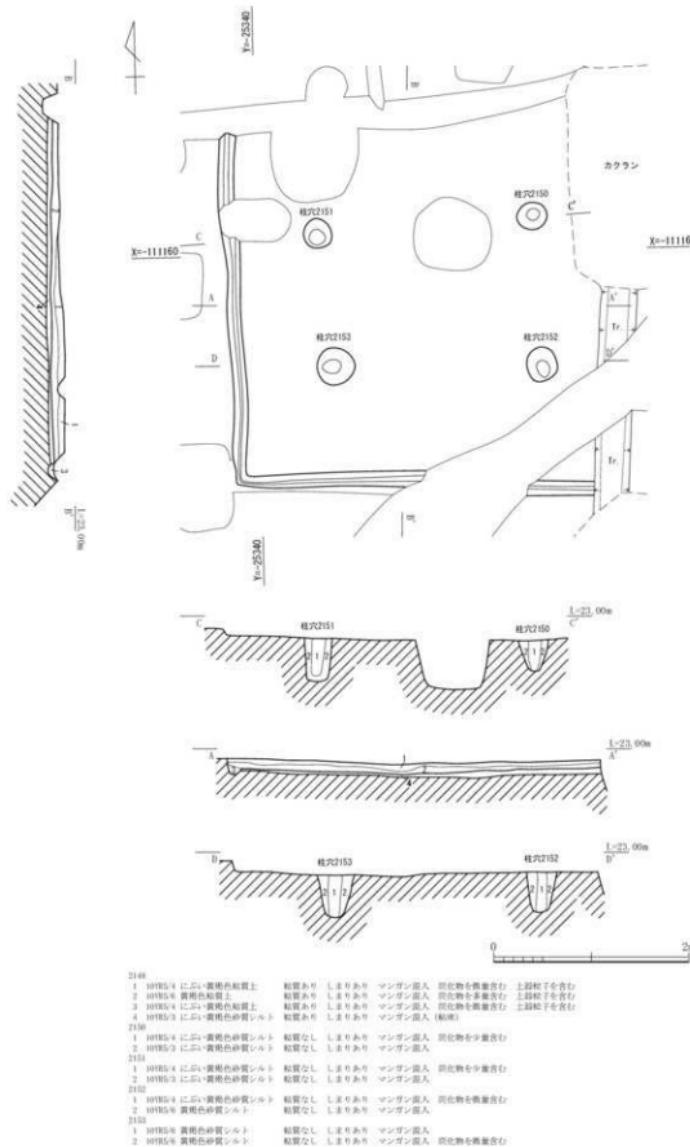
第36図 堅穴住居 2139 遺構実測図 (縮尺 1/50)

**堅穴住居2140**（第37図、図版十八） 東区において検出された堅穴住居である。北側において堅穴住居2134と、南側において溝1172と重複するが、溝1172よりも古く、堅穴住居2134より新しい。東西1.2m以上、南北3.6mの方形とみられ、東側は調査区外にかかる。東に18° 傾する。検出面から床面までの深さは0.12mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.07mの壁周溝が巡る。主柱穴は2143・2142の2本が確認され、いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.35～0.45mの円形で、深さ0.25mである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.05m程の貼床が認められた。竈等の火処は確認されていない。遺物の出土はない。



第37図 聰穴住居2140遺構実測図(縮尺1/50)

**堅穴住居2148**（第38図、図版十九）中央区において検出された堅穴住居である。北側において堅穴住居2155・溝1001（耕作溝）と、南側において建物3と重複するが、溝1001・建物3よりも古く、堅穴住居2155より新しい。溝1001により北辺部が、調査区外周トレンチや搅乱により東辺が消失するが、東西3.7m、南北3.6mの方形とみられる。正方位である。検出面から床面までの深さは0.15mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.17mの壁周溝が巡る。主柱穴は2151・2150・2152・2153の4本が確認され4本柱であったとみられる。いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴

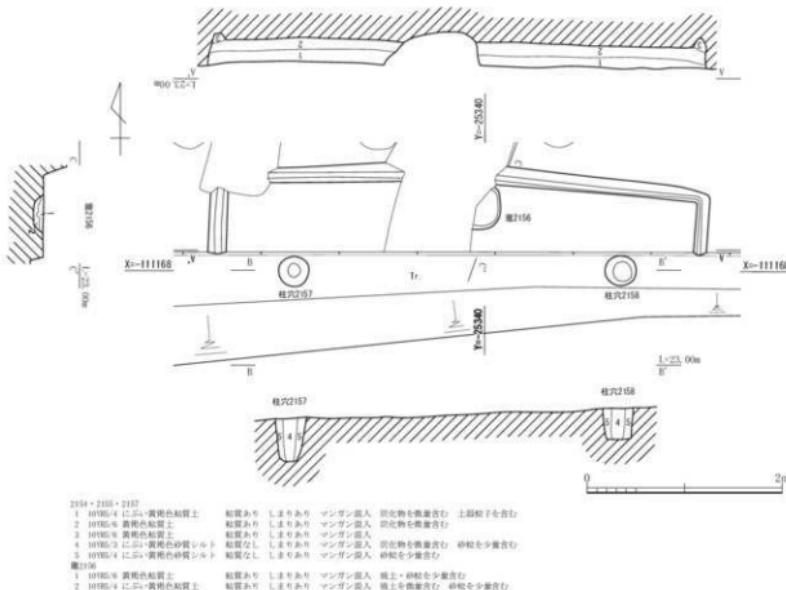


第38図 穴住居2148遺構実測図(縮尺1/50)

の掘方は径0.3～0.38mの円形で、深さ0.3～0.45mである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.05m程の貼床が認められた。竈等の火処は確認されていない。遺物は主に2層より須恵器杯身（第59図89～91）、須恵器皿（第59図92～95）、須恵器蓋（第59図86・87）、須恵器瓶（第59図99）、須恵器斐（第59図96～98）、須恵器高杯（第59図100）、土師器杯（第59図79・80）、土師器斐（第59図83）、土師器鍋（第59図82・84）などが出土している。7世紀後半・8世紀・8世紀末～9世紀初頭のものがある。

**堅穴住居2154**（第39図、図版十九・二十）中央区において検出された堅穴住居である。中央部を溝1172に切られている。東西5.1mの方形とみられる。南側の大半は調査区外にかかる。正方形である。検出面から床面までの深さは0.25mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.1mの壁周溝が巡る。主柱穴は2157・2158の2本が確認され、いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.3mの円形で、深さ0.3～0.45mである。床面はほぼ平坦であるが明確な貼床構造は認められない。北壁のはば中央に径0.5m深さ0.1mの断面皿状の掘込み中に焼土が確認された（竈2156）。竈の火床面とみられるが、西半分は溝1172により消失しており、袖も認められなかった。遺物の出土はない。

堅穴住居2155（第40図、図版二十）中央区において検出された堅穴住居である。南側において堅穴住居2148と重複するが、古い。東側においては攪乱により消失しているため全容を窺うことはできず、西辺の壁と竈を僅かに確認したに過ぎない。そのため規模は不明である。正方位である。



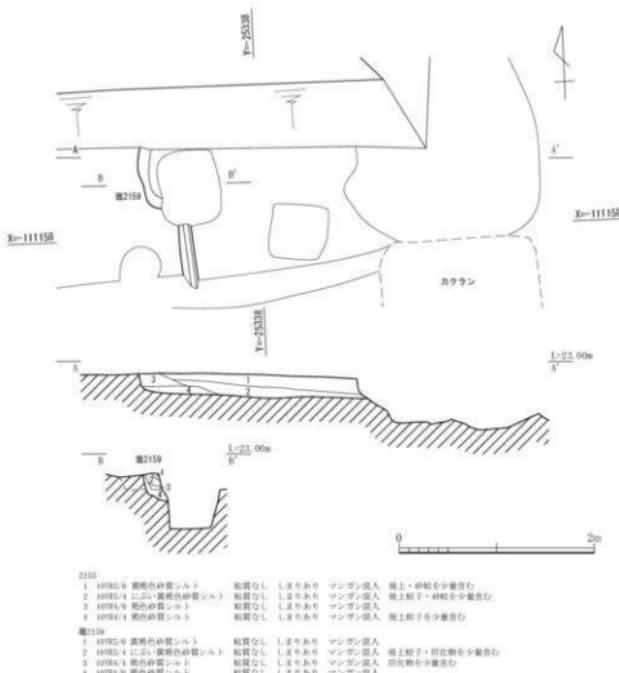
第39図 穴住居2154遺構実測図(縮尺1/50)

検出面から床面までの深さは0.25mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.1mの壁周溝が巡る。

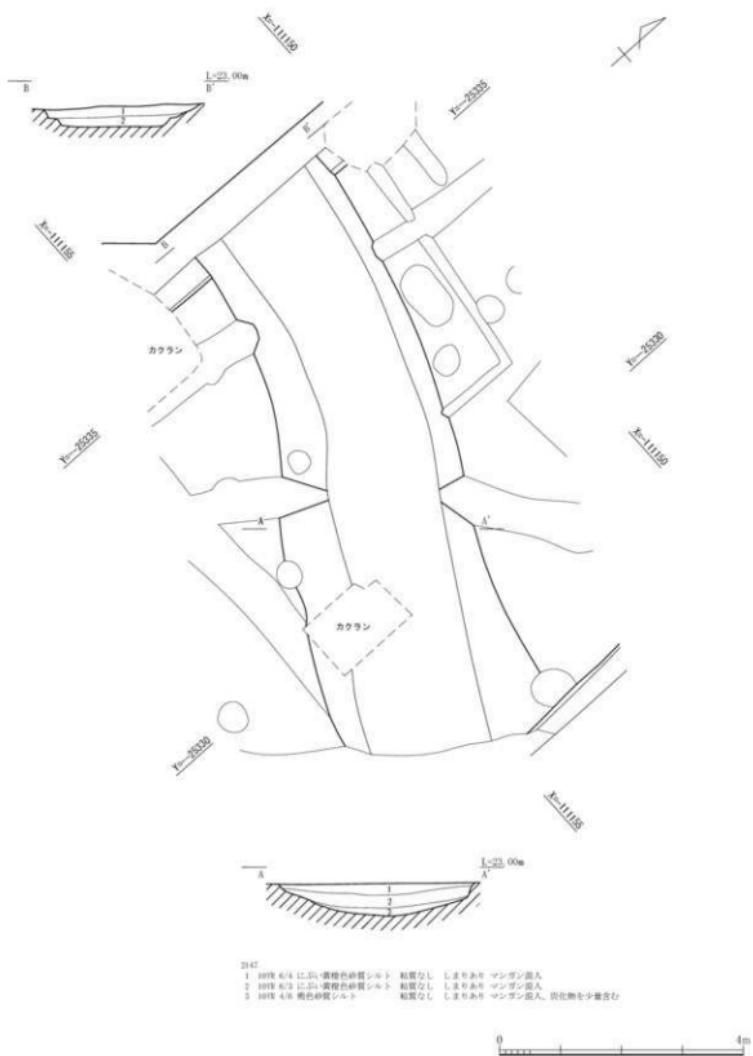
西壁には竈2159が検出されたが、柱穴1198により消失しており、全容は不明である。遺構の遺存度に比し遺物は多く、床面付近より須恵器瓶類（第58図108・109）、須恵器蓋（第58図103・104）、須恵器杯（第58図106・107）、須恵器鉢（第58図105）、土師器杯（第58図101）、土師器製塙土器（第58図102）などが出土している。8世紀中ごろ～後半である。

### 溝跡

溝2147（第41図、図版二十） 東区において検出された溝跡である。堅穴住居2101、3106、溝1143、1172、3109と重複するが、堅穴住居2101、溝1143、1172より古く、堅穴住居3106、溝3109より新しい。西、東共に調査区外に延びていく。幅3m、検出長9.5mで緩やかに蛇行しており、西に65° 傾する。検出面から底面までの深さは、西側で0.4m、南側で0.45mであり西より東に向かい深くなる。断面形状は台形を基本とする。機能時の堆積土である2層は砂質で3層は粘質土であり流水があったことが伺える。土師器高壠、須恵器壺などが出土している。7世紀～8世紀代である。



第40図 堅穴住居 2155 遺構実測図（縮尺 1/50）



第41図 溝2147遺構実測図(縮尺1/80)

### 3) 第3遺構面検出遺構

#### 概要

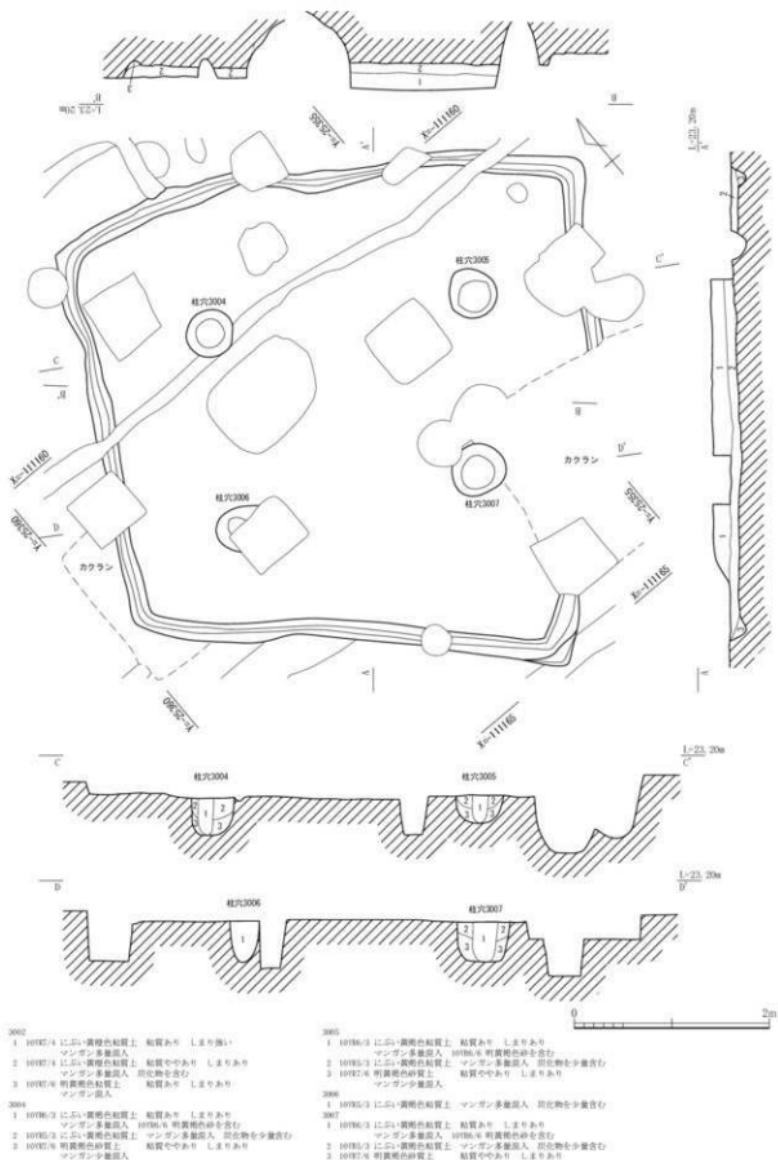
第3遺構面では、古墳時代中期～後期にかけての竪穴住居跡9軒、溝3条、土坑3基を検出した。遺構の検出状況から、主に正方位に対し斜行軸の竪穴住居を3面検出遺構として取り扱った。竪穴住居は平面正方形のしっかりとした掘込をもつものが多く、3106、3101、3112、3115からは作り付けの竈が確認され、高杯を用いた支脚が確認されるものもあった。土坑3110、3123は本来2面遺構として扱うものである。

#### 竪穴住居

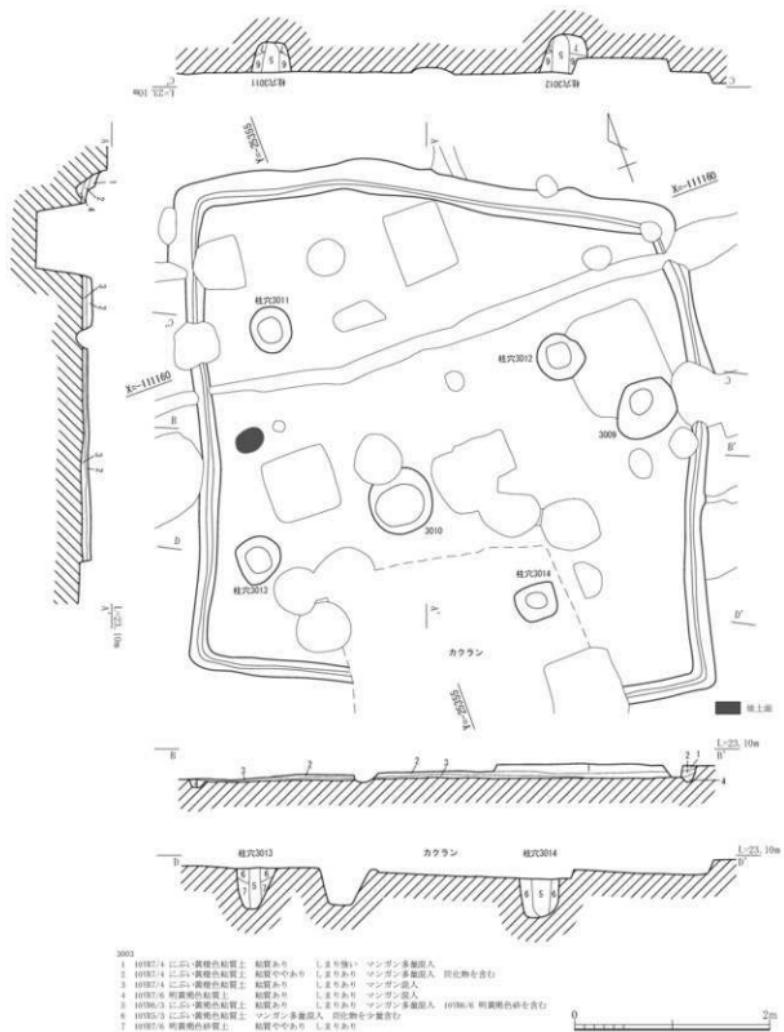
**竪穴住居3002**（第42図、図版二十二・二十三） 南区において検出された竪穴住居である。東側において竪穴住居3003と重複するが、古い。東辺は搅乱により一部消失している。東西5.2m、南北5.4mの方形であるが、東辺が5.2mあるのに対し西辺は4mと狭く台形を呈している。西に38° 傾する。検出面から床面までの深さは0.28mで、壁内側には幅0.2m、深さ0.1mの壁周溝が全周する。竈や炉などの火凧は確認されていない。主柱穴は3006・3004・3005・3007の4本が確認され、4本柱であったとみられる。柱の配列は北辺に対し軸を揃えている。3006を除き柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.48～0.56mの円形で、深さ0.28～0.4mである。床面はほぼ平坦であるが明確な貼床構造は認められない。遺物の出土はない。

**竪穴住居3003**（第43図、図版二十二・二十三） 南区において検出された竪穴住居である。西側において竪穴住居3002と重複するが、新しい。南辺は搅乱により一部消失している。東西5.3m、南北5.4mのほぼ正方形である。西に21° 傾する。検出面から床面までの深さは0.15mで、壁内側には幅0.2m、深さ0.1mの壁周溝が全周する。西壁のほぼ中央に壁より0.16m離れたところに0.3m×0.2mの平面積円形の範囲で焼土が認められた。床面が硬化する程の被熱はないが炉跡とみられる。主柱穴は3011・3012・3014・3013の4本が確認され、4本柱であったとみられるが、主柱穴の配列は竪穴に対してやや西に傾している。いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.36～0.5mの円形で、深さ0.3～0.44mである。他にも床面からは3009・3010が確認されているが、深さは3009が0.28m、3010が0.2mといずれも掘込みが浅く柱痕跡は認められていないため柱穴ではない。床面はほぼ平坦であるが明確な貼床構造は認められない。遺物は石錘（第63図161・162）が出土している。

**竪穴住居3101**（第44図、図版二十四） 東区において検出された竪穴住居である。西側において竪穴住居3111と、南側において3115、北東側において溝3109と重複するが、竪穴住居3111、溝3109よりも古く、竪穴住居3111よりも新しい。中央部を搅乱により消失する。東西4.6m、南北4.1mの東西軸の長方形である。東に23° 傾する。検出面から床面までの深さは0.2mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.05mの壁周溝が巡るが北辺の竈部は途切れている。主柱穴は3103、3102、3104の3本が確認されたが、北東側の主柱穴は搅乱により失われており、本来は4本柱であったものとみられる。いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.4mの円形で、深さ0.13～0.2mである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.07m程の貼床を行い床面としている。

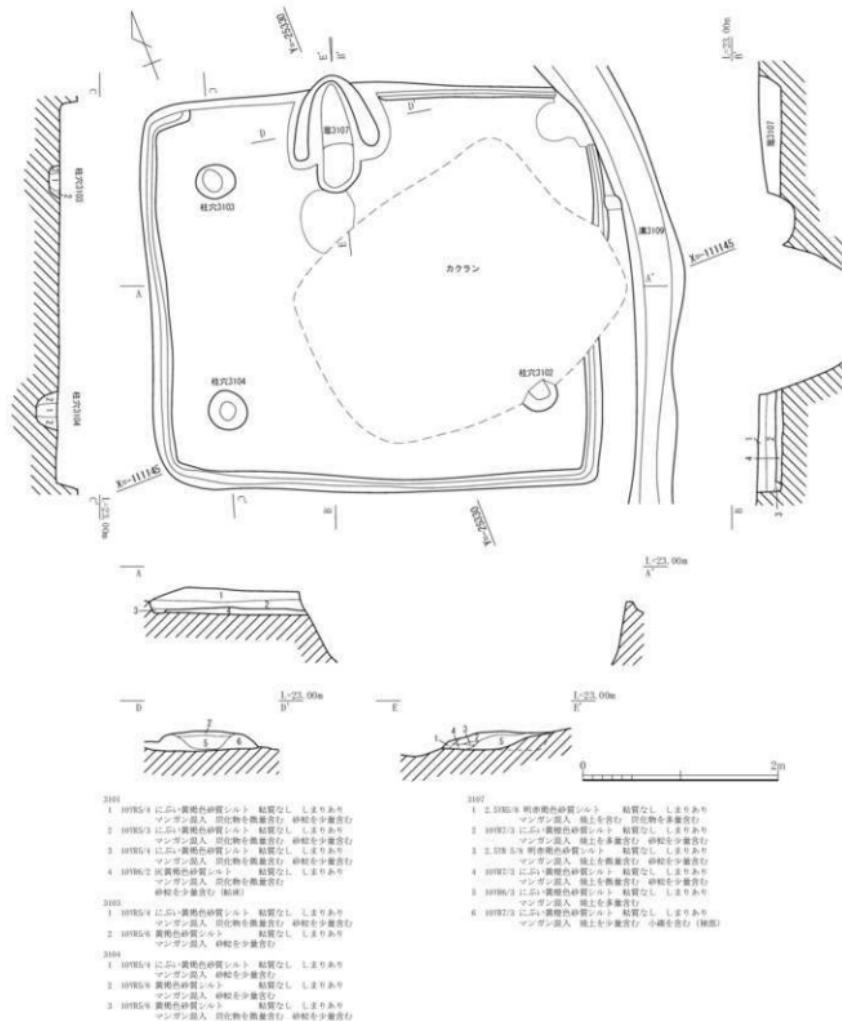


第42図 壁穴住居 3002 遺構実測図 (縮尺 1/50)



第43図 慶穴住居3003遺構実測図(縮尺1/50)

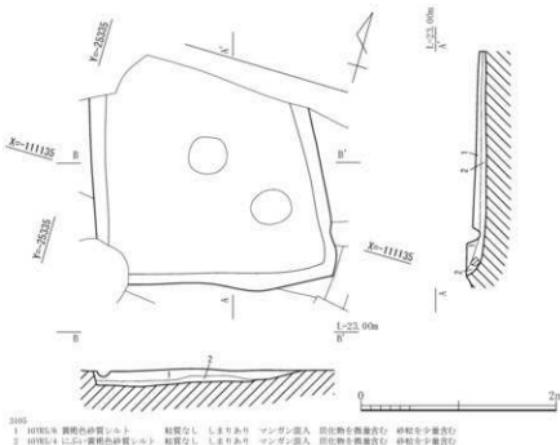
北壁西寄において竪3107が検出された。長さ1.2m、幅1mで、煙道部が0.1m程堅穴外に張出している。火床面からは多量の焼土が確認されている。袖部は幅0.35m程で黄褐色シルトで構成されている。遺物は床面付近より土器類高杯（第60図110）が出土している。5世紀後半である。



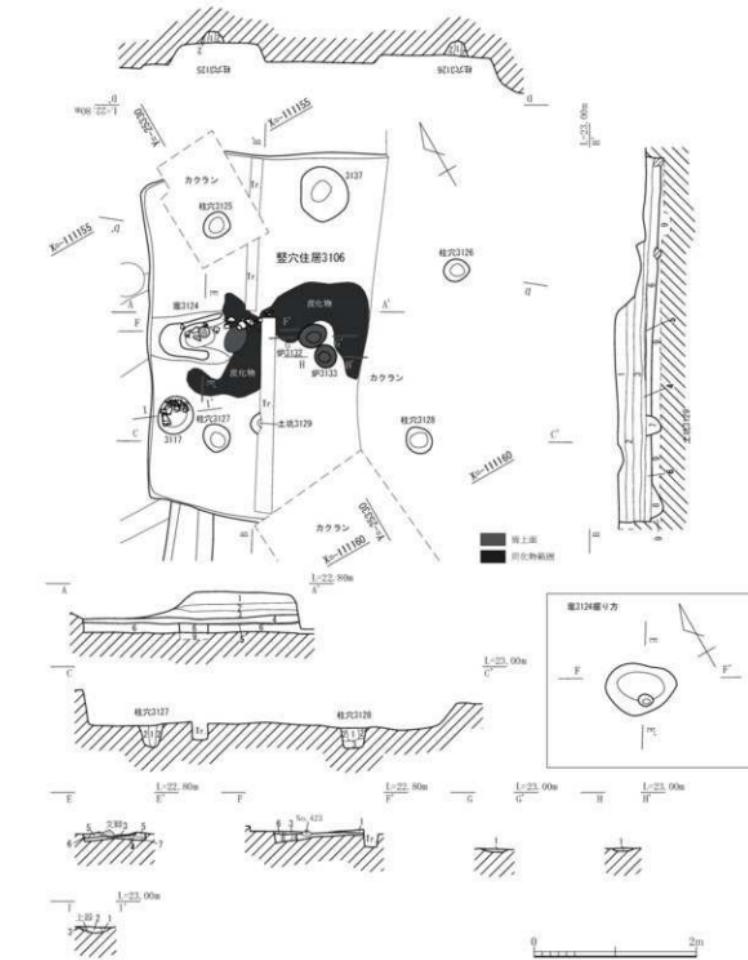
第44図 坚穴住居3101 遺構実測図 (縮尺1/50)

**竪穴住居3105** (第45図、図版二十五) 東区において検出された竪穴住居である。竪穴住居2113と重複しており床面下で検出された。北側は調査区外にかかる。東西2.3m以上、南北2.4mの南北軸の長方形を呈するものとみられる。西に20° 傾する。検出面から床面までの深さは0.15mである。壁の立ち上がり形状は西辺ではしっかりと立ち上がるものの、東・南辺においてはやや緩やかに立ち上がる傾向にある。主柱穴は確認されていない。壁周溝も確認されていない。床面はやや凹凸が認められるが明確な貼床構造は認められない。竈等の火処は確認されていない。遺物は堆積土中より須恵器杯（第60図111）が出土している。7世紀前半～中ごろである。規模も小形であり主柱穴も認められることから通常の竪穴住居とは異なる用途が想定される。

**竪穴住居3106** (第46図、図版二十五・二十六) 東区において検出された竪穴住居である。北側において溝2147と、東側において溝1143と重複するが、いずれよりも古い。南辺の一部を搅乱により消失する。東西3m以上、南北4.5mの方形を呈するものとみられる。東に30° 傾する。検出面から床面までの深さは0.4mで、壁周溝は認められない。主柱穴は3125、3126、3128、3127の4本が確認された。3125は搅乱、3126、3128は溝1143の底面より検出されたものである。いずれも柱痕跡が認められた。主柱穴の掘方は径0.3～0.37mの円形で、唯一床面で検出された3127で深さ0.25mである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.1m程の貼床を行い床面としている。竪穴中央部からは炉3132・3133が確認された。3132は0.32m×0.27mの平面椭円形で、3133は0.25m×0.27mの平面円形でいずれも強く被熱しており焼土面が硬化していた。なお、炉3132・3133の北側では炉を囲むように床面にU字形に炭化物が検出されている。西壁のほぼ中央において竈3124が検出された。長さ1m、幅0.57mで、長方形を呈する。焚口部が0.35m×0.25mの範囲で平面椭円形に強く被熱している。また、焚口部周囲の床面には竈を取り囲むように炭化



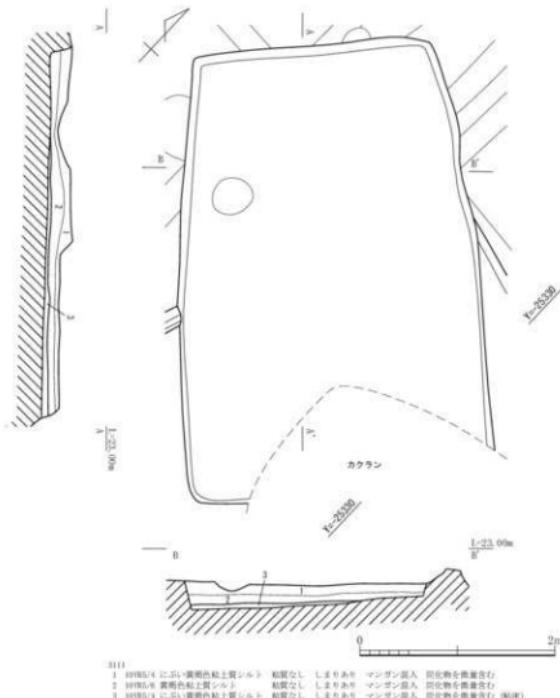
第45図 竪穴住居 3105 遺構実測図 (縮尺 1/50)



第46図 壁穴住居3106遺構実測図(縮尺1/60)

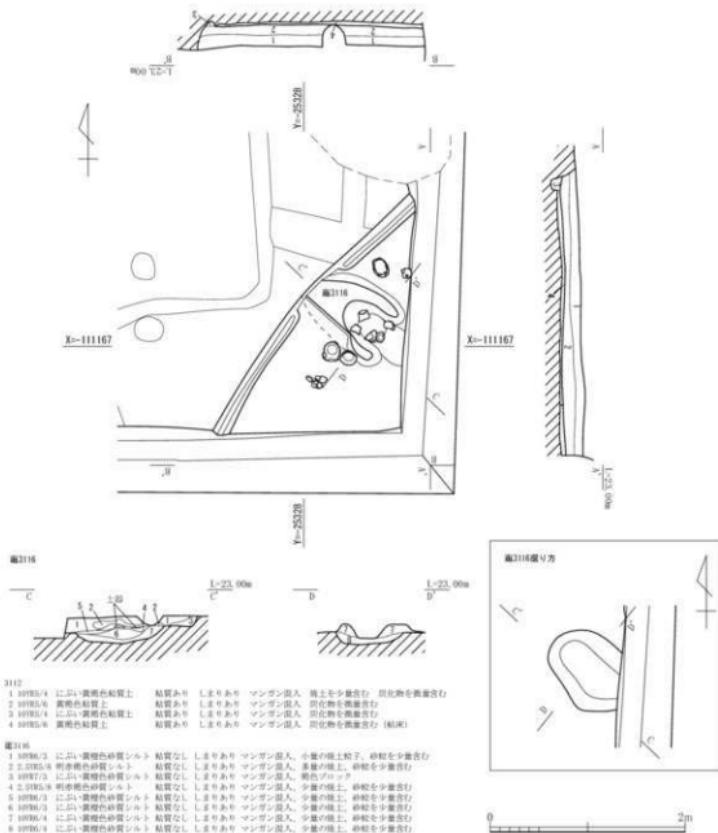
物が検出されている。袖部は幅0.17m程度で黄褐色粘土で構成されている。火床面はよく被熱していて、竈内部中央には高杯の杯部（第60図113）が逆位で据え置かれており、支脚として使用されていたものとみられる。竈の南西側には土坑3117が検出された。径0.42m×0.45m、深さ0.08mの平面ほぼ円形である。掘り込みが浅いが貯蔵穴の可能性が考えられる。遺物は須恵器高杯（第60図116）、土師器甕（第60図112）、土師器高杯（第60図113～115）が出土している。5世紀後半である。

**竪穴住居3111**（第47図、図版二十六） 東区において検出された竪穴住居である。東側において竪穴住居3101と西側において竪穴住居2103・2139と重複しており、いずれよりも古い。東隅部と南東辺は搅乱により一部消失する。東西4.6m、南北3.1mの南北軸の長方形である。西に43°偏する。検出面から床面までの深さは0.25mである。主柱穴は確認されていない。壁周溝も確認されていない。床面はほぼ平坦で、南西側1/2、南東側2/3の範囲では掘方を掘削したのちに厚さ0.05m程の貼床が認められた。竈等の火処は確認されていない。遺物は出土していない。規模も小形であり主柱穴も認められることから通常の竪穴住居とは異なる用途が想定される。



第47図 竪穴住居3111 遺構実測図（縮尺1/50）

堅穴住居3112（第48図、図版二十七） 東区において検出された堅穴住居である。調査区の南東隅において北東辺を僅かに検出したのみで規模は不明である。西に41° 傾する。検出面から床面までの深さは0.2mで、幅0.15m程の壁周溝が認められ、竈部分は途切れている。主柱穴は調査範囲においては確認されていない。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのに厚さ0.15m程の貼床を行い床面としている。北西壁において竈3116が検出された。長さ1m、幅0.75mで、楕円形を呈する。袖部は幅0.18m程で黄褐色土で構成されている。竈内部からは土師器高杯の杯部（第60図117・121）が、右袖部からは土師器高杯の杯部（第60図119・120）が出土している。また竈左袖外側からは製塙土器（第60図123）が正位で、土師器高杯（第60図122）が逆位で置かれていた。なお、竈内から出土した高杯については、他の事例同様、支脚として使用されていた可能性が考えられる。5世紀後半である。



第48図 堅穴住居3112 遺構実測図（縮尺1/50）

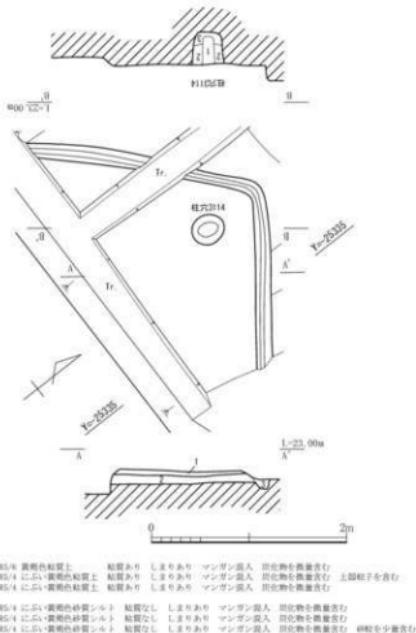
### 堅穴住居3113 (第49図、図版二十八)

東区から中央区にかけて検出された堅穴住居である。東側において溝1143と西側において堅穴住居2154と重複しており、いずれよりも古い。北隅部を僅かに検出したのみで規模は不明である。西に53°偏する。検出面から床面までの深さは0.05mで、壁内側には幅0.15m、深さ0.05mの壁周溝が巡る。主柱穴は北隅において柱穴3114が確認された。柱痕跡が認められている。主柱穴の掘方は径0.35mの円形で深さ0.3mである。床面はほぼ平坦で、掘方を掘削したのちに厚さ0.08m程の貼床が認められた。確認された範囲では竈等の火處は確認されていない。遺物は出土していない。

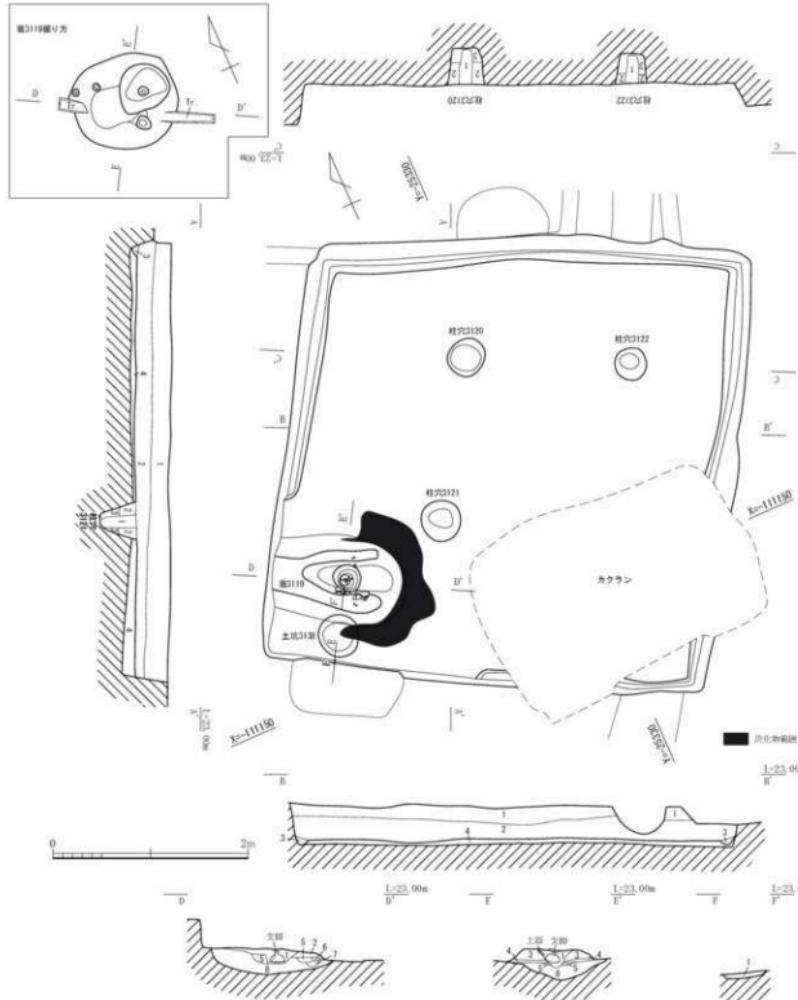
豎穴住居3115（第50図、図版二十八・

二十九) 東区において検出された堅穴住居である。北側において堅穴住居

3101と、東側において土坑3110と重複するが、いずれよりも古い。東辺・南辺の一部を搅乱により消失する。東西4.6m以上、南北4.6mの正方形を呈するものであるがやや西方向に歪みをもつ。東に30°偏する。検出面から床面までの深さは0.34mで、壁内側には幅0.25m、深さ0.05mの壁周溝が巡る。壁周溝は全周するわけではなく、竈に隣接する南西隅については西壁が1.5m程、南壁が2.1m程途切れている。主柱穴は3120、3122、3121の3本が確認され南東柱穴については搅乱により消失したものとみられる。いずれも柱跡痕が認められた。主柱穴の掘方は径0.3～0.4mの円形で、深さ0.32～0.35mである。床面はやや凹凸がみられるが、掘方を掘削したのちに厚さ0.08m程の貼床を行い床面としている。西壁の南西隅寄りにおいて竈3119が検出された。長さ1.35m、幅0.9mで、梢円形を呈する。焚口部周辺の床面には竈を取り囲むように炭化物が検出されている。袖部は幅0.35mで黄褐色土で構成されている。竈内部はよく被熱していて、竈内部中央には高杯が逆位で据え置かれており、支脚として使用されていたものとみられる（第62図125）。また、左袖部からは土師器壺が出土しており、袖部の補強ないしは焚口部の補強として用いられていたものとみられる。竈の左袖下に一部かかるように土坑3138が検出された。径0.4mの円形で、床面からの掘り込みは0.06mと浅い。竈の袖部下で検出されたため竈構築時に掘削されたものとみられるが性格は不明である。遺物は竈周辺より土師器高杯（第61図125～128）が出土している。5世紀後半である。



第49図 駒穴住居3113遺構実測図(縮尺1/50)



第50図 積穴住居3115遺構実測図(縮尺1/50)

## 土坑

### 土坑3110（第51図）

中央区において検出された土坑である。中央部を溝1172と、東側を土坑3123と重複するが、1172より古く、3123より新しい。東側を搅乱により消失する。幅0.3m、長さ4.3m以上の平面隅丸長方形を呈している。西に29°偏する。検出面から底面までの深さは0.4mで、床面の断面形状は中央に向かい緩やかに傾斜を持っているが、南側において0.1m程の崖みをもつ。

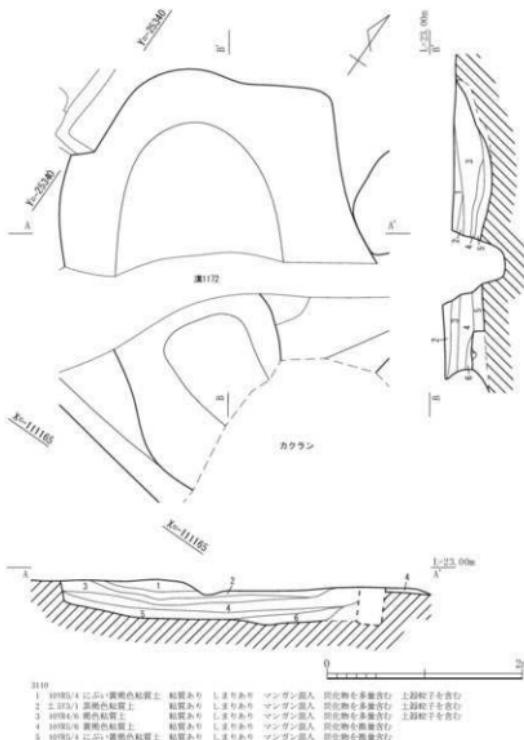
別構造の可能性も考えられるが、土層断面の状況では明確な重複の状況は確認できなかった。遺物は須恵器杯蓋（第61図129～131）、須恵器杯身（第61図132～

136）、須恵器壺（第61図

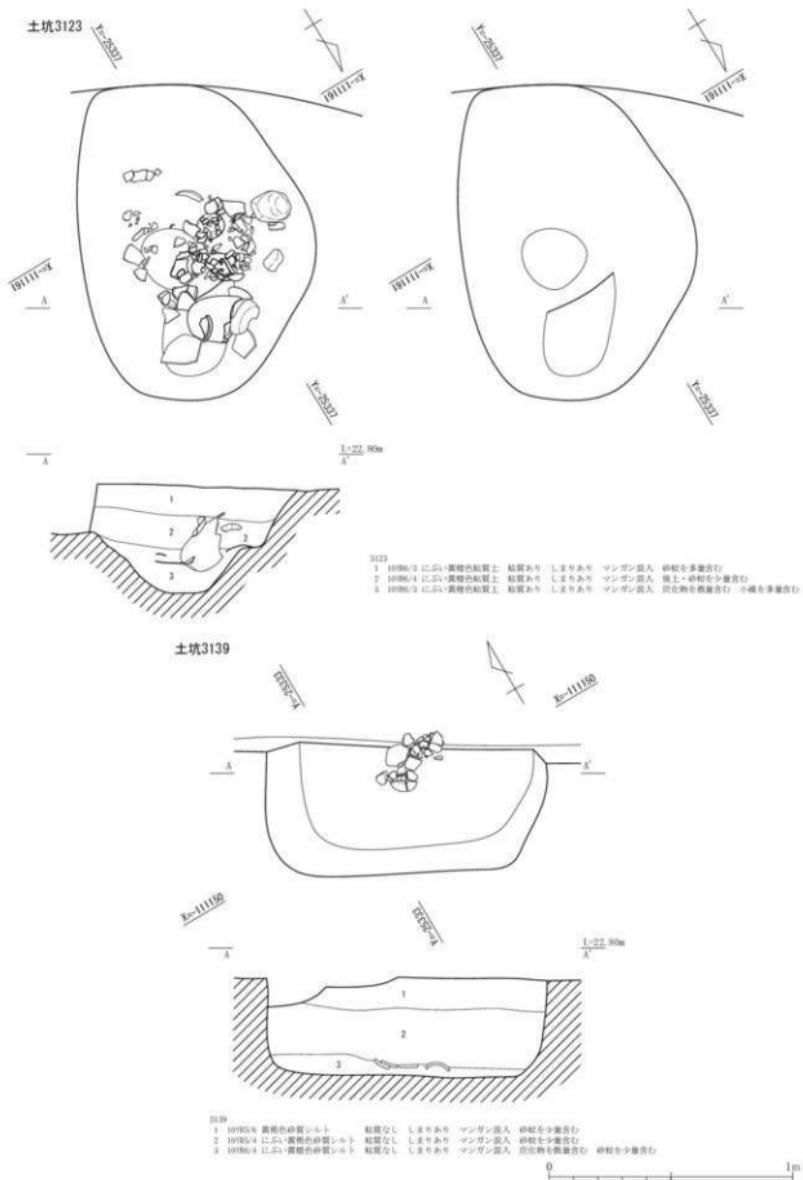
137）、須恵器甕（第61図138）、土師器杯（第61図139）、土師器皿（第61図140）、土師器甕（第61図141）などが出土している。8世紀中ごろである。

**土坑3123（第52図、図版二十九）** 中央区において検出された土坑である。南側で土坑3110と重複するが、古い。北側を搅乱により消失する。幅0.9m、長さ1.3m以上の不整円形を呈している。東に27°偏する。検出面から底面までの深さは0.45mで、床面の断面形状は中央に鉢鉢状の傾斜を持っている。遺物は2層を中心としてまとまって出土しており、須恵器横瓶（第61図143）、須恵器平瓶（第61図142）、土師器製塙器（第61図144）、石皿、敲石、磨石などが出土している。8世紀中ごろ～後半である。

**土坑3139（第52図、図版二十九）** 東区において検出された土坑である。北側で堅穴住居3115と重複するが、古い。幅0.5m以上、長さ1.14mで隅丸方形ないしは長方形を呈するものと思われる。東に30°偏する。検出面から底面までの深さは0.8mと深く、立ち上がりも直線的である。遺物は中央部より底面から0.05m程浮いた状態で、土師器小形壺（第62図149）、土師器高杯（第62図148）が出土している。5世紀後半である。



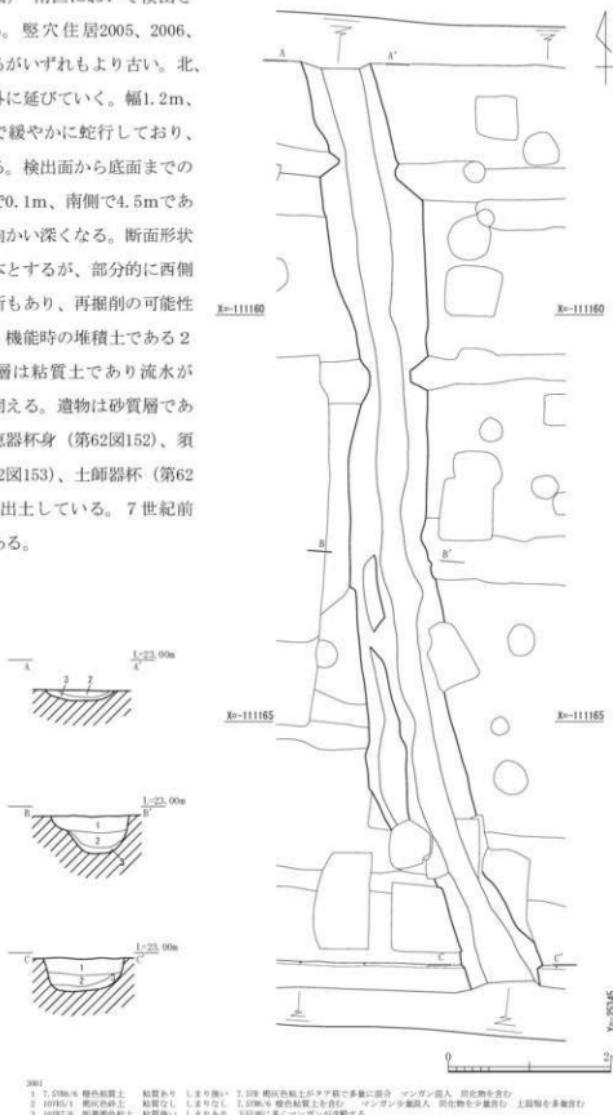
第51図 土坑3110 遺構測定図（縮尺1/50）



第52図 土坑3123・土坑3139 遺構実測図(縮尺1/20)

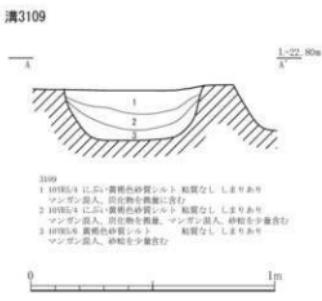
清跡

溝3001（第53図） 南区において検出された溝である。堅穴住居2005、2006、2039と重複するがいずれもより古い。北、南共に調査区外に延びていく。幅1.2m、検出長11.5mで緩やかに蛇行しており、西に10° 傾す。検出面から底面までの深さは、北側で0.1m、南側で4.5mであり北より南に向かい深くなる。断面形状はU字形を基本とするが、部分的に西側に広くなる箇所もあり、再掘削の可能性も考えられる。機能時の堆積土である2層は砂質で3層は粘質土であり流水があつたことが伺える。遺物は砂質層である2層より須恵器杯身（第62図152）、須恵器高杯（第62図153）、土師器杯（第62図150）などが出土している。7世紀前半～中ごろである。



第53図 漢3001 遺構実測図(縮尺1/60)

溝3109（第54図）中央区・東区において検出された溝である。竪穴住居3101、3115、土坑3110、溝1172、2147と重複するが、竪穴住居3101、3115、土坑3110より新しく、溝1172、2147より古い。北側においては西に28° 傾しているが、竪穴住居3101のあたりより東に15° 傾し、土坑3110の付近で消失する。北側は調査区外に延びていく。幅0.6～1m、検出長31.6mで、検出面から底面までの深さは、北側で0.2m、南側で0.25mであり北より南に向かい深くなる。断面形状は逆台形である。機能時の堆積土である3層は砂質であり流水があつたことが伺える。遺物は須恵器杯蓋（第62図154）、須恵器甕（第62図156）、土師器皿（第62図155）などが出土している。8世紀前半である。



第54図 溝3109 遺構実測図 (S=1/20)

#### 第4節 遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ数で箱である。なお、整理段階でランク分けを行った結果、33箱となった。遺物の種類は土師器、須恵器、弥生土器、瓦、石製品など弥生時代から平安時代までの遺物が出土した。

以下、遺構別に概要を述べる。掲載遺物の詳細については、第5～7表の出土遺物観察表に記載した。

第4表 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 箱数	A ランク点数	B ランク 箱数	C ランク 箱数
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦		土師器 3 点、須恵器 14 点、灰釉陶器 1 点、瓦 3 点、石製品 1 点		
飛鳥～奈良時代	土師器、須恵器		土師器 46 点、須恵器 65 点		
古墳時代	土師器、須恵器、石製品		土師器 20 点、須恵器 5 点、石製品 1 点		
弥生時代以前	弥生土器、石製品		弥生土器 2 点、石製品 4 点		
合計		33 箱	165 点 (15 箱)	1 箱	17 箱

##### 1) 第1遺構面出土遺物

###### 建物1 (1024) (第55図1～2)

杯蓋1は須恵器で、直径13cmほどのやや小形のもので、天井部をヘラ削りし、やや扁平な宝珠つまみをもつ。内面には、口端部以下に突出しないかえりをもつ。7世紀後半のものである。

杯身2は須恵器で、体部と口縁部とが外上方に直線的にのび、端部を丸くおさめる。時期は8世紀後半のものである。

###### 建物2 (1007、1012、1017) (第55図3～6)

杯蓋3は須恵器で、扁平で口縁端部を下方に短く屈曲させ、先端はにぶい稜をなしている。時期は8世紀前半のものである。柱穴1008に切られるピット1010から出土した。

杯蓋4は須恵器で、天井部が丸く盛りあがり、口縁端部は下方に短く屈曲させて、強い稜をなしている。

甕5は須恵器で、直立する短い口縁部をもつ大形のものである。体部外面には縱方向に平行叩き目文、内面には同心円文が残る。

甕6は土師器で、最大径が口縁部にある。短く外反する口縁部をもち、端部を丸く内側に屈曲させる。肩は張らずに下方に深くのび、外面には縦方向のハケを施す。

建物2出土の遺物は8世紀後半のものである。

###### 建物3 (1116、1207) (第55図7～9)

杯蓋7は須恵器で、扁平で口縁端部を下方に短く屈曲させ、先端はにぶい稜をなしている。時

期は8世紀前半のものである。

瓶8は須恵器の底部である。外方に開く高台は、杯に比べて厚く高い。

高杯9は土師器で、杯部は低く外方へ拡がり端部はやや肥厚する。外面は、ヘラ磨きする。橙色の色調で、胎土は精良である。

建物3の出土遺物は8世紀後半のものである。

#### 建物4（1156）（第55図10）

杯10は須恵器の底部で、高台は底部脇より内側に、垂直に短いものがつく。時期は9世紀前半のものである。縁軸皿の小片伴う。

#### ピット1119（第55図11）

杯11は須恵器で、体部、口縁部の外傾度が大きい。体部は外上方にのび、さらに口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。時期は8世紀後半のものである。

#### 柵1（1011）（第55図12）

杯蓋12は須恵器で、口縁端部を下方に短く屈曲させ、先端はにぶい稜をなしている。時期は8世紀前半のものである。

#### 溝1105（第55図13～20）

皿13は灰釉陶器で、高台は底部脇より、垂直に短い角高台がつく。黒窯90号窯式のもので、混入品である。

杯14は須恵器で、口縁部と体部の外傾度が大きく、口径が体部底径より大きく深みをもつ。底部附近から垂直に、短い高台がつく。

皿15は土師器で、短く外反する口縁部は、端部を内側に丸く肥厚させる。橙色の色調で、胎土は精良である。

杯蓋16は須恵器で、扁平で口縁端部を下方に短く屈曲させ、先端はにぶい稜をなしている。8世紀前半の混入品である。

鉢17は須恵器で、口縁部が緩やかに立上り、上端部をわずかに外方に肥厚させ、引出している。

小形壺18は須恵器で、強く張った肩から、体部下半に向って屈曲して底部となる。底部には、外方に開く、細くシャープな高台がつく。

高杯19は須恵器で、脚端部は下方に短く屈曲させ、ややくぼみ気味の稜をなしている。

小形壺20は土師器で、器壁は薄く、球形の体部は体部中ほどからやや下に最大径がくる。古墳時代中期の小形丸底土器の可能性もある。

溝1105の出土遺物は8世紀末～9世紀初頭のものである。

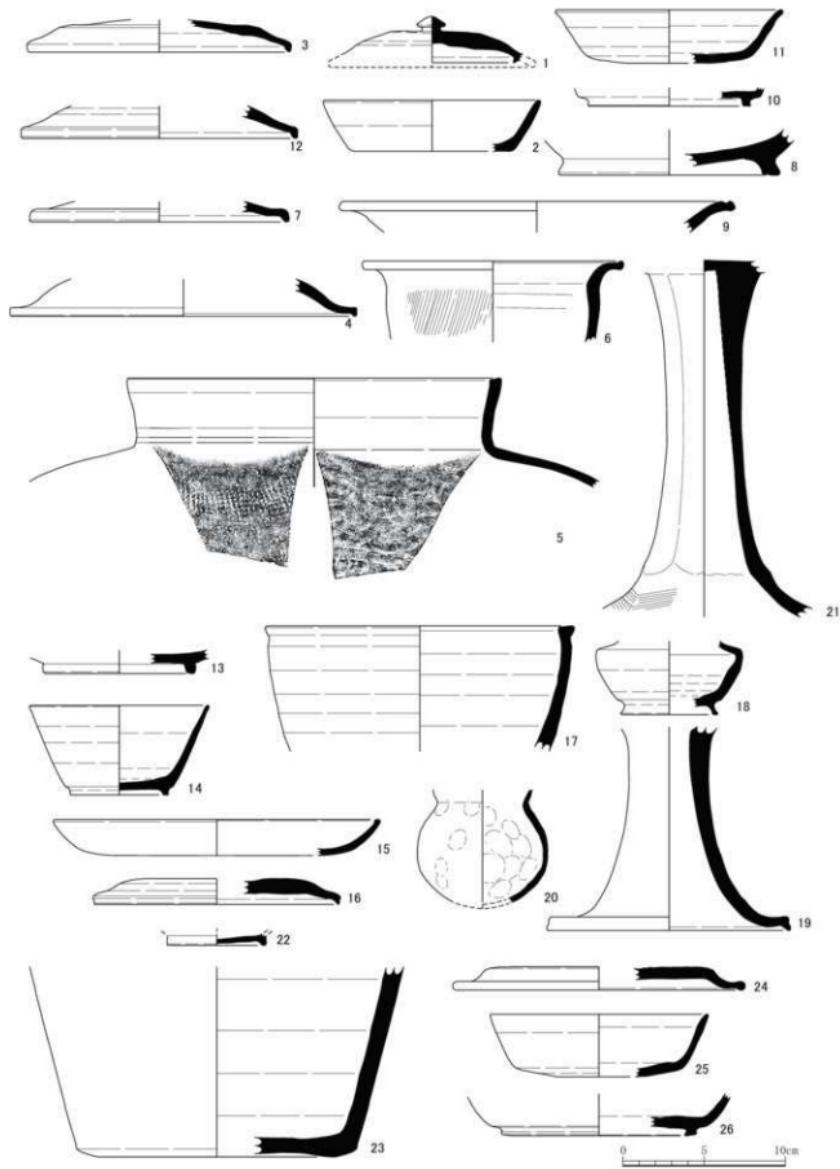
#### 溝1106（第55図21）

高杯21は土師器で、脚柱部を七角に削って面取りする。裾部には磨き（ハケ）がみられる。橙色の色調で、胎土は精良である。時期は8世紀末～9世紀初頭のものである。

#### 溝1140（第55図22・23）

碗22は土師器で、底部に低い高台を張り付ける。橙色の色調で、胎土は精良である。

瓶23は須恵器で、ヘラ切りによる平底より、体部は緩やかに外方へ立ち上がる。



第55図 第1遺構面出土遺物実測図①（縮尺1/3）

建物1(1・2)、建物2(3～6)、建物3(7～9)、建物4(10)、ピット1119(11)、柵1(12)、  
溝1105(13～20)、溝1106(21)、溝1140(22・23)、溝1143(24～26)

溝1140の出土遺物の時期は8世紀前半か。

#### 溝1143（第55図24～26）

杯蓋24は須恵器で、扁平で天井部上面が平坦である。口縁端部を下方に短く屈曲させ、先端は丸みをもった稜をなしている。

杯25は須恵器で、底部と体部の境界に稜をもち、そこから体部は外上方にのび、口縁端部をやや尖り気味におさめる。

杯26は須恵器の底部で、高台は底部脇より内側に、垂直に短いものがつく。

溝1143の出土遺物は8世紀末～9世紀前半のものである。

#### 溝1172（第56図27～36）

皿27は土師器で、口縁部は外方へかすかに反り、底部は平坦である。口縁部内外面はナデ仕上げする。橙色の色調で、胎土は精良である。

甕28・29は土師器で、28は口縁部から底部分で、上端を平坦に削ったのち指ナデする。29は底から焚口の上部である。

甕30は土師器で、短く開く口縁は内方にやや湾曲する。体部は球形で、中ほどに最大径がくる。口縁部径と体部最大径がほぼ等しい。内外面ともに横にならため刷毛目が消えるが、口縁部内面と、底部に刷毛目が残る。

杯蓋31は須恵器で、天井部上面が平坦で、扁平な宝珠つまみがつく。口縁端部は強い稜をなしている。時期は8世紀前半のものである。

杯32は須恵器の体部で、口縁部が大きく外反する。口縁端部はやや外方に丸くおさめる。低い貼り付け高台は、やや外方に開く。

杯33は須恵器で、底部と体部の境界に稜をもち、そこから体部は直線的に外上方にのび、口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。器壁は、体部に比べ底部がやや薄い。

杯34は須恵器で、底部と体部の境界に稜をもち、そこから体部は外上方にのび、口縁端部を丸くおさめる。器壁は、体部に比べ底部がやや厚い。

鉢35は短い口縁部が外反し、口縁端は稜をもち、内面をつまみ上げている。体部上方に肩があり、体部下半に向って丸みを帯びて屈曲している。最大径は口縁部にあり、肩部よりわずかに大きい。

甕36は須恵器で、短い口縁部がやや立ち上がり気味に外反し、口縁端は面をもつ。体部は縱長で、最大径が肩部よりやや下方にあり、底部は丸底である。外面には平行叩きの上から刷毛を施す。内面には同心円叩きが残る。

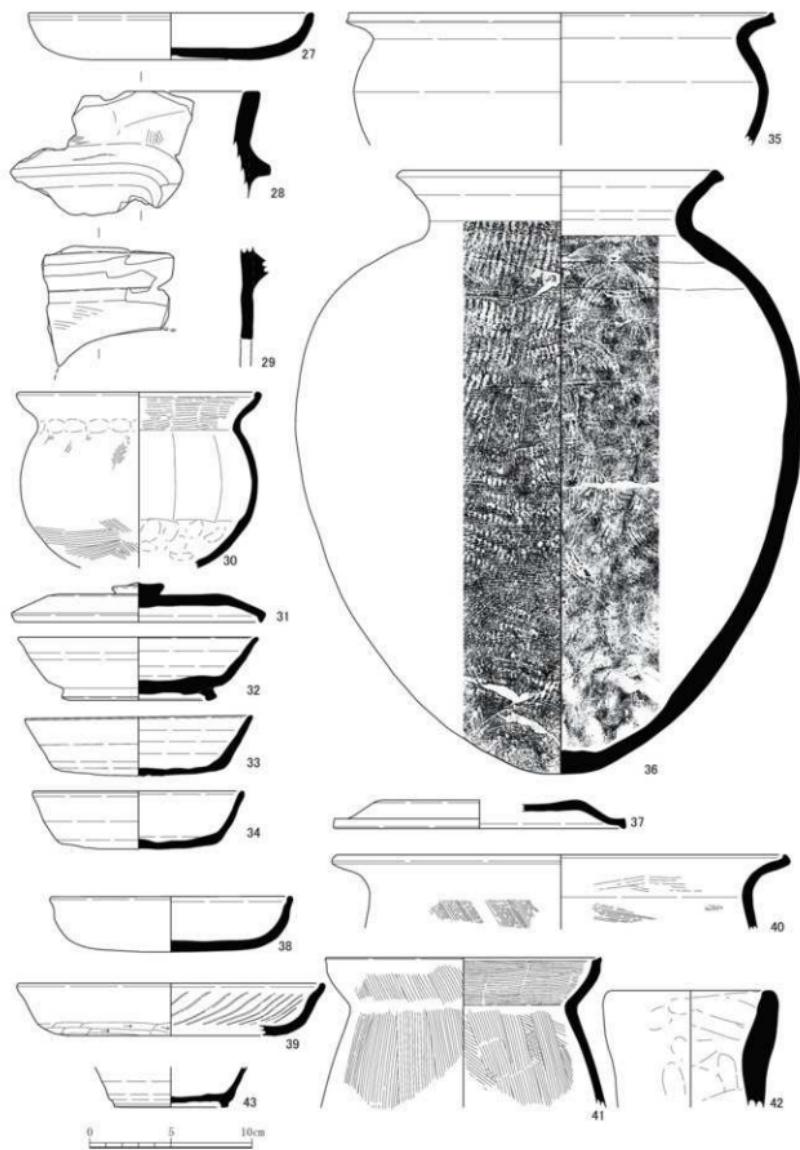
溝1172の出土遺物は7世紀末～8世紀前半のものである。

#### 土坑1188（第56図37）

杯蓋37は須恵器で、扁平で天井部上面が平坦である。口縁端部を下方に短く屈曲させ、先端は強い稜をなしている。時期は8世紀後半のものである。

#### 土坑1212（第56図38～43）

杯38は土師器で、短い口縁部は緩やかに立ち上がる。端部はわずかに屈曲し、内面に沈線がめぐる。口縁部外面および内面は横ナデ調整される。



第56図 第1遺構面出土遺物実測図② (縮尺1/3)  
清1172(27~36)、土坑1188(37)、土坑1212(38~43)

皿39は土師器で、底部より外反する短い口縁部は、端部が屈曲し、内面に沈線がめぐり、体部内面には放射状暗文を施す。外面は、口縁部を横ナデ調整し、底部へラ削りである。

甕40は土師器で、緩やかに外反する口縁部は、内面に端部が肥厚する。内外面ともに、ハケ調整される。

甕41は土師器で、短く聞く口縁部は内方にやや湾曲する。体部はやや開き気味に下方にのび、長胴になるものと思われる。内外面ともに、ハケ調整される。

製塩土器42は土師器 わざかに口縁部が聞く。コップ状。口縁部の器壁は1.7cmと厚く、体部はそれよりやや薄くなる。指押さえによる凹凸が著しい。

杯43は須恵器で、小形のもので、高台は底部に沿って貼り付けられ、一体になって直線的に外上方にのびる。

土坑1212の出土遺物は8世紀中ごろのものであるが、杯43のみ9世紀前半のものであり、上層からの混入品と思われる。

## 2) 第2遺構面出土遺物

### 竪穴住居2002 (第57図44)

杯身44は須恵器で、高台のつかない身の底部である。8世紀後半のものであろう。

### 竪穴住居2003 (第57図45～48)

杯蓋45は須恵器で、口縁端部を下方に短く折り曲げ、先端はにぶい稜をなしている。

杯46は土師器で、外方に聞く口縁部は緩やかに屈曲する。口縁部内外面はナデ仕上げする。橙色の色調で、胎土は精良である。8世紀中ごろものである。

杯47は土師器で、外方に聞く口縁部は緩やかに屈曲し、端部内面を丸く肥厚させる。口縁部内外面はナデ仕上げする。黄橙色の色調で、胎土は精良である。

甕48は土師器で、体部より体部半ばまで残る。体部は丸みを帯び、外面には底部まで平行叩きが残るが、内面はナデ仕上げで、當て具の痕跡は見られない。

竪穴住居2003の出土遺物は8世紀中ごろ～後半のものである。

### 貯蔵穴2028 (第57図49・50)

片口鉢49は土師器で、やや内湾気味の口縁の一ヵ所に片口がつく。端部の内面に鋭い稜がつく。

杯蓋50は須恵器で、口径13.6cmと小振りで、天井部下半はふくらみをもつ。口縁部内面にかえりをもつが、かえりの先端が口縁部以下に突出しない。

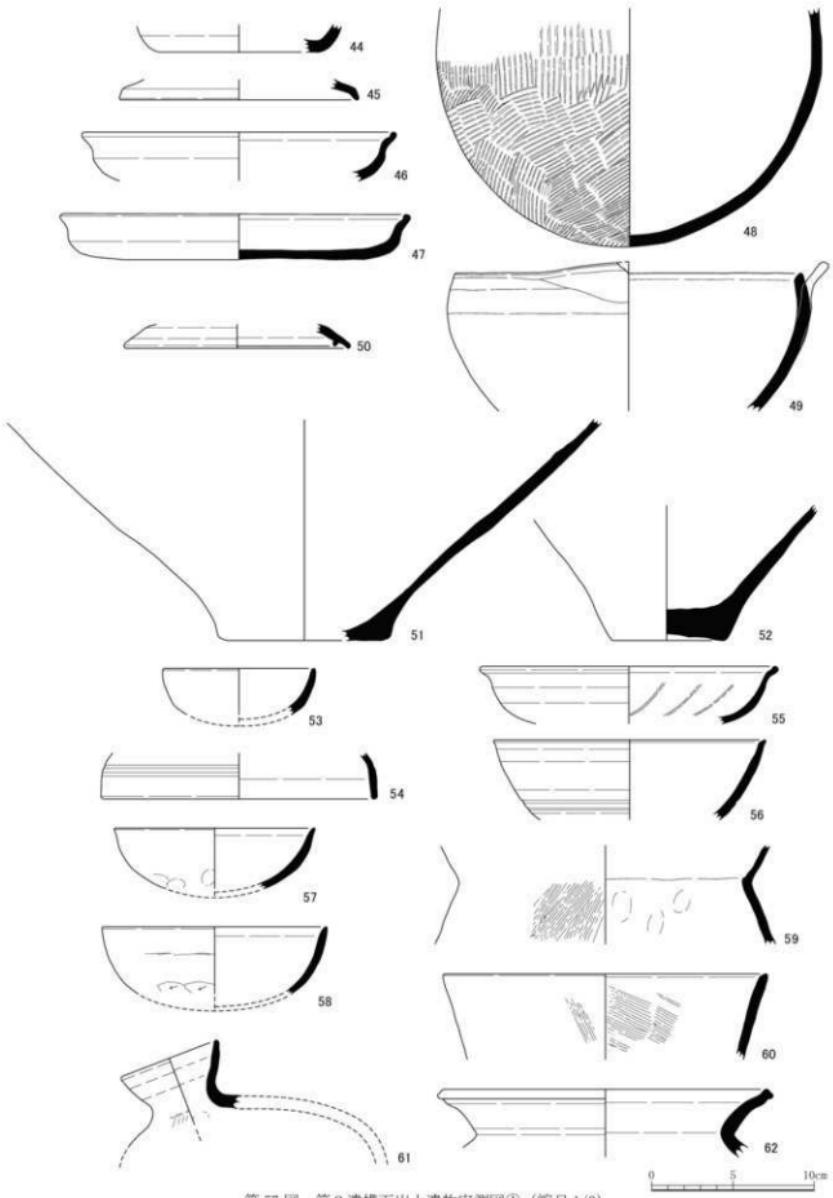
時期は7世紀中ごろのものである。

### 竪穴住居2004 (第57図51・52)

壺51・52は弥生土器で、下半部である。51は、おそらくこのあたりが、最大径になるものと思われる。51の底部は平底で、内面を薄くつくる。それに対して52の底部は体部に比べて厚く、底面をわずかに上げる。色調は灰白色である。時期は弥生時代中期のものであろう。

### 竪穴住居2005 (第57図53・54)

杯53は土師器で、小振りである。口縁部を最大径に、底部に向って緩く湾曲する。口縁部内外



第57図 第2遺構面出土遺物実測図①（縮尺1/3）  
整穴住居2002(44)、整穴住居2003(45~48)、貯藏穴2028(49・50)、整穴住居2004(51・52)、  
整穴住居2005(53・54)、整穴住居2006(55・56)、整穴住居2039(57~62)

面はナデ仕上げする。橙色の色調である。

杯蓋54は須恵器で、天井部と口縁部をわける突出部の稜がほとんど失われ、代ってその部分に凹線をめぐらせる。口縁端部は丸くおさめている。

堅穴住居2005の出土遺物は6世紀中ごろのものである。

#### 堅穴住居2006（第57図55・56）

杯55は土師器で、外方に開く口縁部は緩やかに屈曲し、端部内面をわずかに丸く肥厚させる。口縁部外面はナデ仕上げし、内面に放射状暗文が認められる。器壁は3.5mmと杯46にくらべて薄い。

56は須恵器で、高杯の杯部かと思われる。湾曲気味に大きく外方に開き、端部は面取りして尖り気味におさめる。外面の下半に、2条の沈線がめぐる。

堅穴住居2006の出土遺物は8世紀前半のものであろう。

#### 堅穴住居2039（第57図57～62）

杯57・58は土師器で、口縁部を最大径に、底部に向って緩く湾曲する。口縁部は横ナデによつて、わずかに外方に開き、端部は尖り気味におさめる。内外面はナデ仕上げであるが、57は外面に指押さえ痕が顕著で、58は外面底部をヘラ削りする。共に橙色を基調とした色調である。

甕59は土師器で、頸部より短く開く口縁部は内方にやや湾曲する。体部は大きく開いておらず、こうした特徴からみて、長胴になるものと思われる。体部外面はハケ調整するが、内面はナデ仕上げである。

甕60は土師器で、口縁部は直線的に外へ開く。端部上端の内側をナデで狭小な面を作っている。外面は縦に、内面は斜め方向にハケ調整する。

平瓶61は須恵器で、やや内湾気味に開く、口径の小さい短い口縁部をもち、体部上半は丸みをもつ。

甕62は須恵器で、短い口縁部は大きく外反するが、端部付近でやや屈曲し、それに伴って外面に緩い稜をつくる。また、端部外面は上下に肥厚し、面をもつ。

堅穴住居2039の出土遺物は7世紀中ごろ～後半のものである。

#### 堅穴住居2101（第58図63～66）

杯63は土師器で、底部に向って緩く湾曲し、底部は平坦である。口縁部は横ナデによって、端部がわずかに外方に開き、尖り気味におさめる。内外面はナデ仕上げであるが、外面下半は指押さえ痕が顕著である。橙色の色調である。

高杯64は土師器で、脚柱部の上部で、断面は円形である。浅黄橙色の色調である。

杯65は須恵器で、口縁部が大きく外反する。低い貼り付け高台は、やや外方に開く。

甕66は須恵器で、短い口縁部が緩やかに外反する。端部は丸く肥厚させるが、下方に続い稜をもつ。

堅穴住居2101の出土遺物は7世紀末～8世紀前半のものである。

#### 堅穴住居2103（2107）（第58図67・68）

杯67は須恵器で、たちあがりは内傾し、非常に低い。

甕68は土師器で、頸部より短く開く口縁部は、内方にやや湾曲する。端部内面は、ナデによって面をもつ。口縁部内面には横ハケが施されているほか、外面には、胴部の縦ハケの一部が残る。口縁部の形状からみて、長胴甕と思われる。

堅穴住居2103の出土遺物は7世紀前半のものと推定される。

#### 堅穴住居2113（2138）（第58図69～71）

甕69は土師器で、頸部より短く開く口縁部は内方にやや湾曲する。体部は大きく開いておらず、こうした特徴からみて、長胴になるものと思われる。体部外面はハケ調整するが、内面はナデ仕上げである。

杯70は須恵器で、口縁部が大きく外反する。体部、口縁部が大きく外反する。低い貼り付け高台は、底部端よりやや内側につく。

瓶71は須恵器で、大きく開いた口縁部は、下方の頸部に向ってすぼまる。口縁端部は内面に折り返し、面をつくる。8世紀後半のものであり、混入品であろう。

堅穴住居2113の出土遺物は7世紀末～8世紀初頭のものである。

#### 堅穴住居2120（第58図72）

杯72は須恵器で、口縁部は直線的に外反し、端部は尖り気味におさめる。

堅穴住居2120の出土遺物は8世紀後半のものである。

#### 堅穴住居2126（第58図73）

杯73は須恵器で、口縁部は大きく外方に開き、底部と体部との境界は丸みをもっている。

堅穴住居2126の出土遺物は8世紀前半のものである。

#### 堅穴住居2128（第58図74～76）

杯蓋74は須恵器で、天井部は扁平で、口縁端部は下方に短く屈曲させて、稜をなしている。

壺75は土師器で、口縁部は頸部より短く開く。肩部は丸みをもつ。頸部以下の体部外面にはハケを施し、内面にはヘラ削りを行っている。

手づくね土器76は土師器で、手づくねによる平底のミニチュア土器である。

堅穴住居2128の出土遺物は8世紀前半のものである。75・76は古墳時代中期の5世紀前半～中ごろと推定され、混入と思われる。

#### 堅穴住居2134（第58図77）

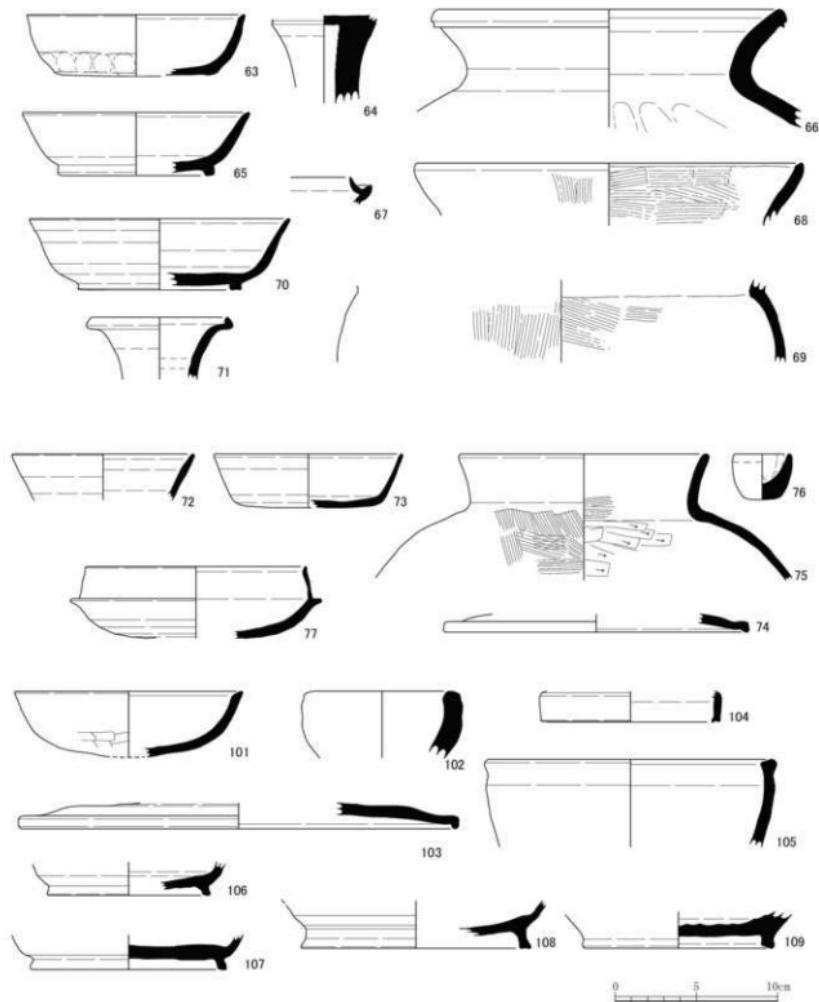
杯77は須恵器で、たちあがりはやや内傾し、端面は内側へ傾斜する。底部は扁平で、下部をへラ削りする。受け部は水平にのび、端部の稜はあまり。時期は古墳時代後期、6世紀前半のものである。

#### 堅穴住居2148（2153）（第59図78～100）

杯78は土師器で、外方に開く口縁部は緩やかに屈曲し、端部内面を丸く肥厚させる。口縁部外面はナデ仕上げする。黄橙色の色調で、胎土は精良である。

杯79は土師器で、体部は外方に開き、口縁部は屈曲し、端部を内面に丸く肥厚させる。内外面をナデ仕上げする。橙色の色調である。

杯80は土師器で、口縁部は外方に開き、底部は丸みを帯びる。口縁端部内面に小さな面をもつ。



第58図 第2遺構面出土遺物実測図② (縮尺1/3)  
 壁穴住居2101(63~66)、壁穴住居2103(67・68)、壁穴住居2113(69~71)、壁穴住居2120(72)、  
 壁穴住居2126(73)、壁穴住居2128(74~76)、壁穴住居2134(77)、壁穴住居2155(101~109)

底部外面をヘラ削りし、その他の内外面をナデ仕上げする。橙色の色調である。

皿81は土師器で、体部から短い口縁部がわずかに外反する。内外面をナデ仕上げする。浅黄橙色の色調である。

鍋82は土師器で、外方に開く短い口縁部は、端部を上下に拡張させ、外面に面をもつ。体部は肩部が大きく広がらず、浅い。体部外面にハケ調整する。灰白色の色調である。

甕83は土師器で、外方に開く短い口縁部は、中ほどがわずかに膨らむ。端部は、内側上方に肥厚する。

鍋84は土師器で、体部は播の弱い球形で、最も広い部分の左右に、幅広の把手が貼りつく。体部外面は、ハケ調整を施す。

高杯85は土師器で、脚柱部を八角に削って面取りする。橙色の色調で、胎土は精良である。

杯蓋86は須恵器で、天井部は扁平で、口縁端部は下方に短く屈曲し稜をなしている。天井部には扁平な宝珠つまみがつく。8世紀前半のものである。

杯蓋87は須恵器で、天井部にやや外開きの低い輪状つまみがつく。8世紀中ごろのものである。

須恵器の杯身には、高台のつかないもの88～90と、高台のつくもの91がある。高台のつかないもの88～90は、口縁部は大きく外方に開き、底部と体部との境界に稜をもっている。

杯身91は、直径10.5cmの小振りのものである。口縁部は大きく外方に開き、底部端に外方に開く高台を貼り付ける。見込に、×印の線刻がある。

須恵器の皿は、平らな底部から、短い口縁部が大きく外反するもので、同形で高台のつくもの92と、つかないもの93～95がある。高台のつく92は、底部端よりわずかに内側に、短く直立する高台を貼り付ける。

甕96～98は須恵器で、大きく外反する口縁部をもち、96は口縁端をさらに下方に反らせ面をつくる。97・98は端部を丸くおさめる。98の体部は、頸部の屈曲部よりやや下方から、外面に平行叩目、内面に同心円文がつけられる。

瓶99は須恵器で、平底の底部端から体部が緩やかに立上がる。

高杯100は須恵器で、円筒形の脚部上半で、脚柱部に施文や透かしはない。裾部はさらに広がるものと思われる。

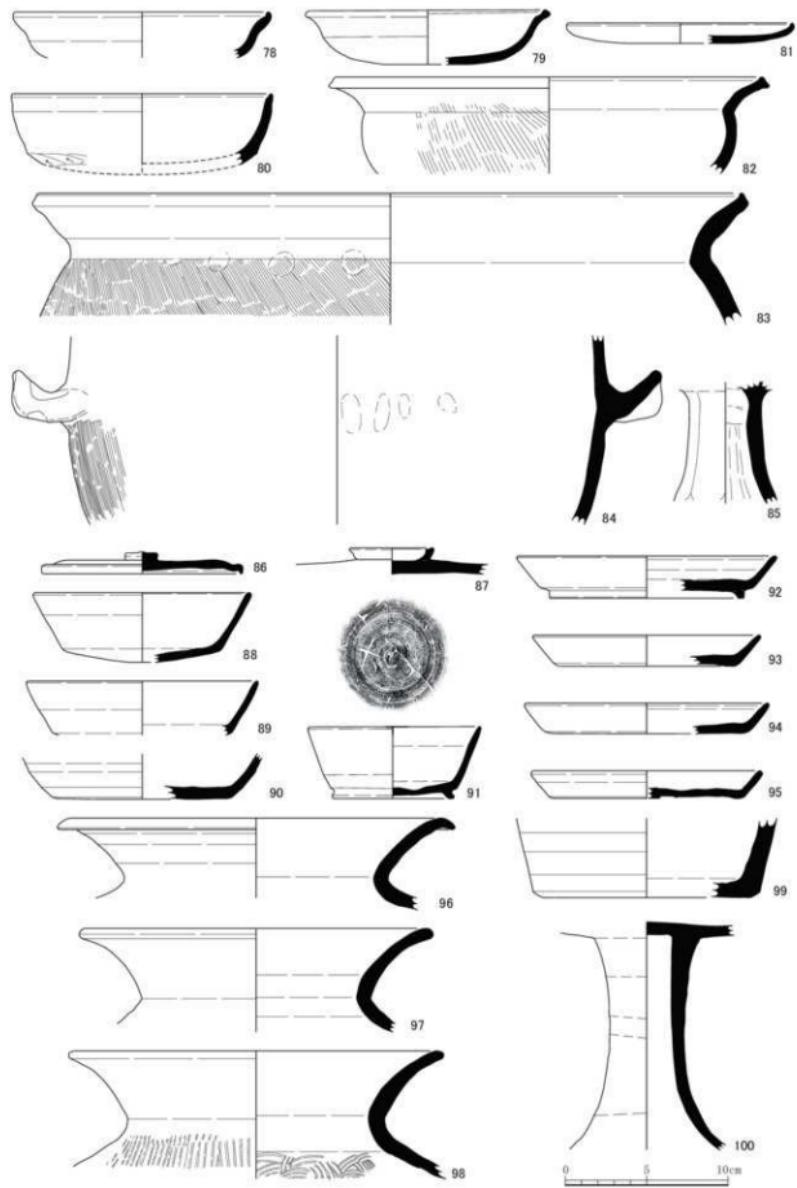
堅穴住居2148の出土遺物は大きく3時期以上の遺物が混在し、古いものでは80が7世紀後半まで通り、8世紀のもの（78・79・81～85・88～89）、8世紀末～9世紀初頭（91～95）に分かれる。91～95は混入と思われる。

#### 堅穴住居2155（第58図101～109）

杯101は土師器で、口縁部は外方に開き、底部は丸みを帯びる。口縁端部内面に小さな面をもつ。内外面はナデ仕上げする。橙色の色調である。7世紀末～8世紀前半のものと思われる。

製塙土器102は土師器で、粗製でコップ状である。器壁は1.2cmと厚く、体部は指押さえによる凹凸が著しい。

杯蓋103は須恵器で、口径26.7cmと大形のものである。天井部は扁平で、口縁端部は下方に短く屈曲させて、稜をなしている。8世紀前半のものである。



第59図 第2遺構面出土遺物実測図③ (縮尺1/3)  
堅穴住居2148(78~100)

壺蓋104は須恵器で、天井部を欠失した、まっすぐにのびる口縁部である。薬壺型の壺の蓋であろう。

鉢105は須恵器で、口縁部が緩やかに立上り、上端部をわずかに外方に肥厚させ、引出している。口縁部に最大径がくる。

杯身106・107は須恵器で、底部端に付く貼り付け高台はシャープで、外方に開く。

瓶108は須恵器で、底部端に付く貼り付け高台はシャープで高く、外方に開く。

瓶109は須恵器で、底部端に付く貼り付け高台は108に比べ低くて太く、直線的である。

豊穴住居2155の出土遺物は8世紀中ごろ～後半のものである。101はそれより古くなり、混入とみられる。

### 3) 第3造構面出土遺物

#### 豊穴住居3101 (第60図110)

高杯110は土師器で、椀型の杯部に、透かし孔のない、緩やかに開いた短い脚部がつく。杯部に、脚柱部を差し込んでつくっている。

豊穴住居3101の出土遺物は古墳時代中期、5世紀後半のものである。

#### 豊穴住居3105 (第60図111)

杯111は須恵器で、たちあがりは内傾し、非常に低く、受け部は上方に巻き込む。

豊穴住居3105の出土遺物は7世紀前半～中ごろのものである。

#### 豊穴住居3106 (3124) (第60図112～116)

甕112は土師器で、口縁部が肥厚し、丸い体部をもつ。体部外面はハケ仕上げし、内面はナデ仕上げである。

高杯113は土師器で、杯部はやや内湾気味に広がる。杯底部と口縁部との境界に、緩い棱がある。に橙色の色調で、胎土は精良である。

高杯114は土師器で、脚柱部の上部で、断面は円形である。

高杯115は土師器で、脚部でやや下部で広がる脚柱部は、根部で大きく外方に広がる。

高杯116は須恵器で、小片であるが、復元径などからみて杯部と思われる。杯部は浅く、シャープな受け部から、口縁部は短く外反し、端部は内側に内傾する。

豊穴住居3106の出土遺物は古墳時代中期、5世紀後半のものである。

#### 豊穴住居3112 (3116) (第60図117～124)

高杯117は土師器で、口縁部は平らな杯底部より直線的に大きく外方にのび、底部との境界に強い稜をもつ。器形、口径とも118に類似するが、117の方が作りがシャープで、器壁も薄い。橙色の色調である。

高杯118は土師器で、口縁部は杯底部より曲線的に外方にのび、上半は外反する。底部との境界に段をもつ。橙色の色調である。

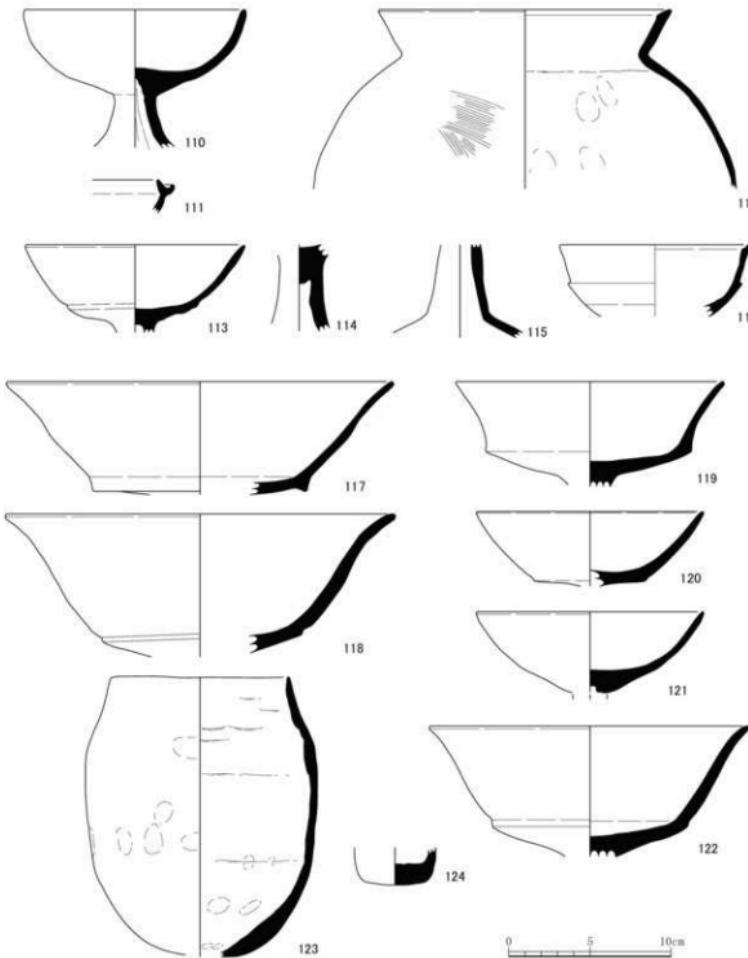
高杯119は土師器で、口縁部は平らな杯底部より直線的に大きく外方にのび、底部との境界に強い稜をもつ。にぶい橙色の色調である。

高杯120は土師器で、口縁部は平らな杯底部より内湾気味に外方にのび、底部との境界に稜をもつ。橙色の色調で、胎土は精良である。

高杯121は土師器で、口縁部は脚部との境より内湾気味に外方にのびる。橙色の色調である。

高杯122は土師器で、口縁部は杯底部より曲線的に外方にのび、端部は外反する。底部との境界に段をもつ。橙色の色調で、胎土は精良である。

製塙土器123は土師器で、丸底の砲弾型をし、口縁部は内傾する。粗製で器壁は約0.6cmと薄い



第60図 第3遺構面出土遺物実測図① (縮尺1/3)

整穴住居3101(110)、整穴住居3105(111)、整穴住居3106(112~116)、整穴住居3112(117~124)

が、底部は厚ぼったく、体部は指押さえ、内面は粘土紐痕による凹凸が著しい。

手づくね土器124は土師器で、手づくねによる平底のミニチュア土器である。

竪穴住居3112の出土遺物は古墳時代中期、5世紀後半のものである。

#### 竪穴住居3115（3119）（第61図125～128）

高杯125は土師器で、口縁部は脚部との境より内湾気味に外方にのび、まっすぐに下方にのびる脚注部は、大きく裾で広がる。脚部には透かし孔はない。黄褐色の色調である。

高杯126は土師器で、杯底部より外方に広がるが、杯部と底部との境界は不明瞭である。にぶい橙色の色調である。

高杯127・128は土師器で、椀型の杯部に、下部で広がる脚柱部は、裾部で大きく外方に広がる。脚柱部の最下部に、円孔を穿っている。橙色の色調である。

竪穴住居3115の出土遺物は古墳時代中期、5世紀後半～末のものである。

#### 土坑3110（第61図129～141）

杯蓋129は須恵器で、低い宝珠つまみをもつ扁平な天井部をもち、口縁端部は内方へ短く屈曲し、稜をなしている。時期は8世紀前半のものである。

杯蓋130は須恵器で、天井部上面が平坦で、口縁端部は下方へ短く屈曲し、先端は強い稜をなしている。時期は8世紀前半のものである。

杯蓋131は、天井部が丸く盛りあがり、口縁端部は下方に短く屈曲させて、強い稜をなしている。

須恵器の杯身には、高台のつかないもの132～135と、高台のつくもの136がある。高台のつかないものは、外面が丸みを帯び、口縁端部がゆるやかに外反するもの135、底部と体部との境界に稜をもっているもの132～134がある。高台のつくものは、小振りのものである。口縁部は大きく外方に開き、底部端よりやや内側に、垂直に高台を貼り付ける。

壺137は須恵器で、短く直立する口縁部をもち、端部は丸く終わる。肩は大きく広がる。

甕138は須恵器で、短い口縁は直立気味にやや外反し、上端部に面をもち、端部内面が断面三角形にやや肥厚する。頸部との境界から肩は大きく開き、体部外面には縦方向に平行叩き目文、内面には同心円文が残る。

杯139は土師器で、短い口縁部は緩やかに立ち上がる。端部を外方につまみ出す。内外面をナデ仕上げする。

皿140は土師器で、短い口縁部は大きく外方に開き、端部はわずかに屈曲する。外面をミガキで仕上げ、内面は摩滅が激しく仕上げ調整は不明である。

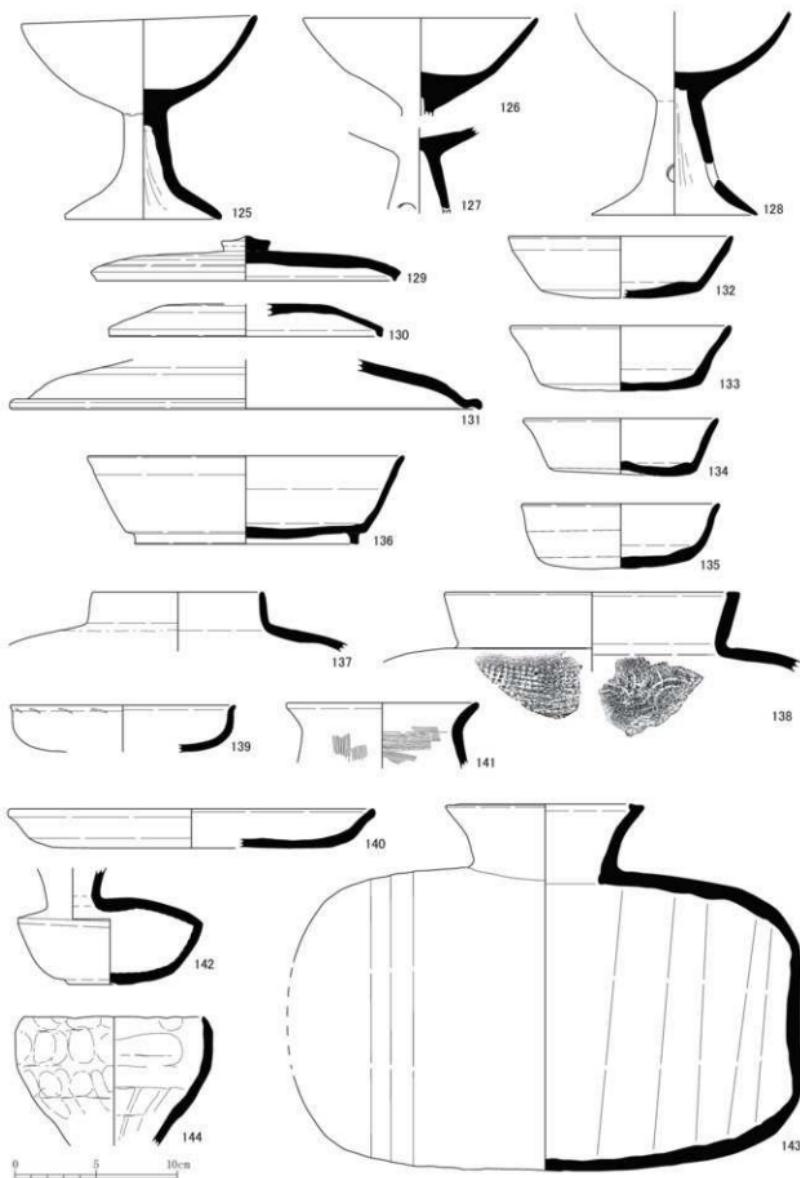
甕141は土師器で、外反する口縁部に対して、体部上半は広がらない。体部が手面に紙ハケ、内面に横ハケを施す。

土坑3110出土の遺物は8世紀中ごろのものである。

#### 土坑3123（第61図142～144）

平瓶142は須恵器で、小形のもので、直立し口縁部は体部の一方に偏ってつけられる。体部上面は平で、体部は最大径に対して、体高は低く扁平である。底部は小さな平底である。

横瓶143は須恵器で、短い口縁部は外反し上端は内側に尖る。体部は大きく、器壁は口縁部よ



第61図 第3遺構面出土遺物実測図②（縮尺1/3）  
堅穴住居3115(125~128)、土坑3110(129~141)、土坑3123(142~144)

り厚く、内外面ともにロクロナデ仕上げである。閉鎖口は平らで、内面はややふくらみを残す。

製塙土器144は土師器で、コップ状であるが、底部はすぼむ。粗製で、体部内外面は、指押さえによる凹凸が著しい。

土坑3123の出土遺物は8世紀中ごろ～後半のものである。

#### 土坑3131（第62図145）

甌145は土師器で、口縁部は直線的に外へ開く。端部上端の内側をナデで狭小な面を作っている。外面は縦にハケ調整する。

土坑3131の出土遺物は古墳時代中期、5世紀後半のものであろう。

#### 土坑3136（第62図146・147）

高杯146は土師器で、下部で広がる脚柱部は、低い裾部が大きく水平に広がる。透かし孔はない。脚柱部の内面をヘラ削りする。

甌147は土師器で、口縁部外面が外側にわずかにふくらみ、端部がほぼ水平に肥厚している。

丸い体部をもつ。体部外面はハケ仕上げし、内面はオサエとナデで仕上げる。

土坑3136の出土遺物は古墳時代中期、5世紀後半のものである。

#### 土坑3139（第62図148・149）

高杯148は土師器で、浅い杯部は底部より緩やかに外方に広がる。下部で広がる脚柱部は、裾部で大きく外方に広がる。透かし孔はない。体部外面をヘラ磨きする。橙色の色調である。

小形壺149は土師器で、口縁部を欠いた体部で、球形である。外面はハケ、内面はヘラ削りする。

土坑3139出土遺物は古墳時代中期、5世紀後半のものである。

#### 溝3001（第62図150～153）

杯150は土師器で、口縁部は外方に開き、端部はやや外反する。底部はやや扁平である。内外面をナデ仕上げする。黄橙色の色調である。

甌151は須恵器で、台付 算盤玉形の体部に、大きく外方に開く脚台部と、ラッパ状に開く頸部、外傾して立ちあがる広口の口縁部をもつ。口縁部外面と頸部上半にヘラ描きの斜線文、頸部と体部の中位に櫛描きの列点文をめぐらす。

杯身152は須恵器で、たちあがりはやや内傾し、端面は内側へ傾斜する。受け部は長く、やや上方にのびる。底部は扁平で、下半をヘラ削りする。

高杯153は須恵器で、杯部は浅く、シャープな受け部から、口縁部は短く外反する。端部は、116に比べると、鋭さはない。時期は古墳時代後期、6世紀前半のものである。

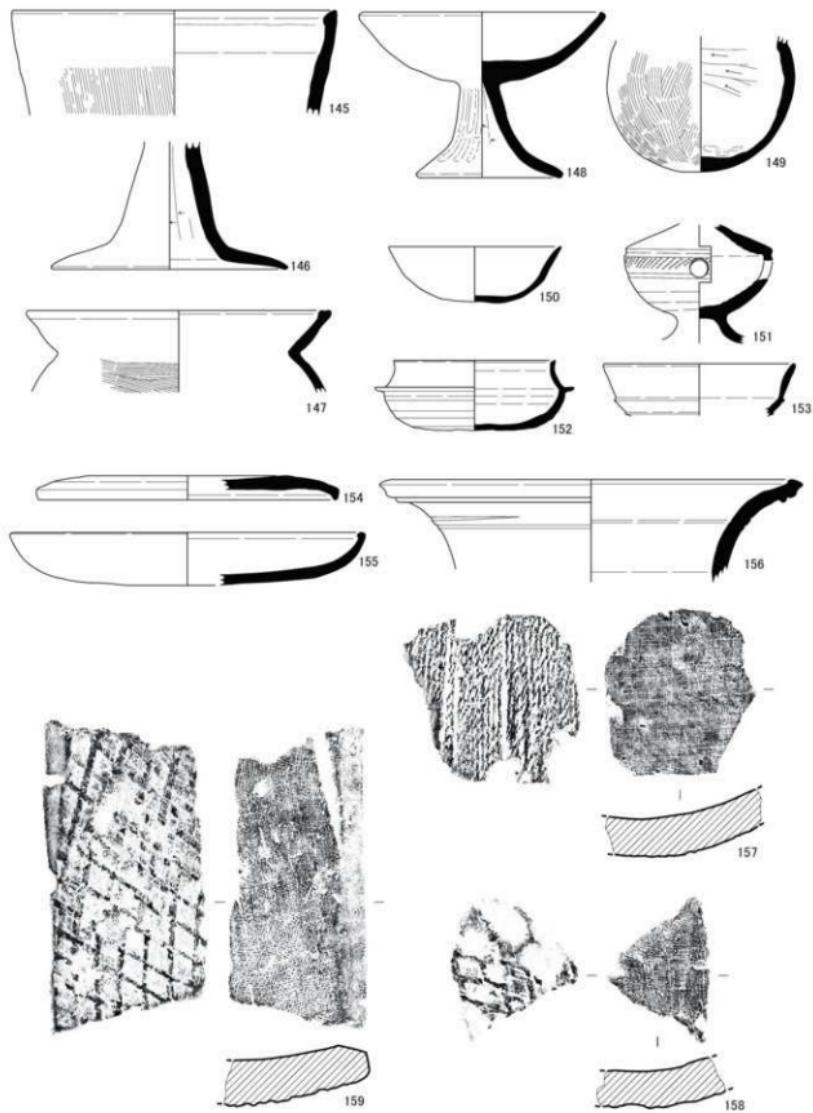
溝3001の出土遺物は、全体には飛鳥時代、7世紀前半から中ごろまでのものである。152・153は古墳時代、6世紀前半のもので混入品である。

#### 溝3109（第62図154～156）

杯蓋154は須恵器で、扁平で口縁端部は下方へ短く屈曲し、先端はにぶい稜をなす。

皿155は土師器で、体部から短い口縁部が内済気味に立あがる。端部は内面に丸く肥厚する。内外面をナデ仕上げする。

甌156は須恵器で、短い口縁部は大きく外反し、口縁の端部は外方へ折り曲げ肥厚させる。口



第62図 第3遺構面出土遺物・瓦実測図(縮尺1/3)  
 土坑3131(145)、土坑3136(146・147)、土坑3139(148・149)、溝3001(150~153)、  
 溝3109(154~156)、溝3110(157)、土坑3112(158)、土坑3114(159)

線上端はややつまみあげ、面をもつ。頭部には凹線をめぐらせる。

溝3109の出土遺物は8世紀前半のものである。

#### 瓦 (第62図157~159)

平瓦157は溝1105から出土した。凹面に細かい布目、凸面に縄目が残る。厚さは2.4cmである。

平瓦158は土坑1120から出土した。凹面に布目、凸面に格子叩きが残る。厚さは2.3cmである。

平瓦159は溝1143から出土した。凹面に布目、凸面に格子叩きが残る。凹面の端部に面取りを施す。厚さは2.8cmである。

#### 石器・石製品 (第63図160~165)

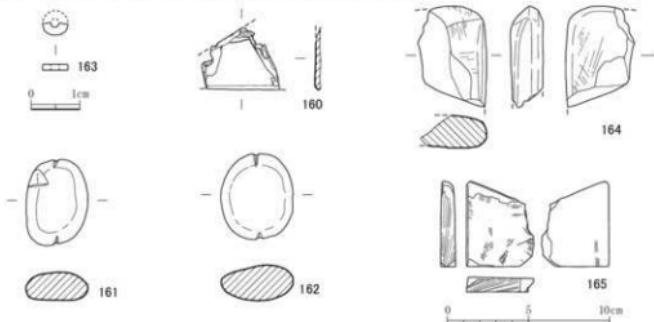
不明石器160は、堅穴住居2101から出土した。頁岩または千枚岩の磨製石器が破損、剥離したものである。当初の面を残す部分では、面は平らで、刃部が確認できる。実測図の下部にある刃部は直線的で、表裏両方から砥ぎだされている。また上部に、下部の刃と角度を異にする、刃状の面取りがあり、わずかな残存部分ではあるが、これも直線的である。弥生時代中期のものであろう。

石錐161・162は、堅穴住居3003から出土した。やや扁平な礫の両端に、3~4mmの切込みを入れたものである。重量は、161が54.8g、162が63.5gである。石材は、161が頁岩ホルンフェルス、162が泥質頁岩ホルンフェルスである。形体からみて、縄文時代のものと思われる。

白玉163は、遺物包含層から出土した。約半分が欠損する。大きさは、直径0.5cm、厚さ0.1cm、中央に直径0.15cmの穿孔がある。側面はよく磨かれていたが、上下面是平らであるが、薄いため再度磨けなかつたためか、切離しのままである。石材は、クロム白雲母である可能性がある。古墳時代のものである。

磨製石斧164は、東区の遺物包含層から出土した。破損した頂部の右角で、形状から、扁平片刃石斧と思われる。表面、側面に比べ、背面の磨きは雑で、原石の表面を多く残している。石材は、砂質泥岩ホルンフェルスである。弥生時代中期のものである。

砥石165は、包含層から出土した。破損した角の部分で、側面に成形時の摺り切り痕が残る。また、両面に砥ぎ痕が見られるが、一方の面に顕著である。厚さは0.9cmある。石材は、珪質頁岩である。きめ細かな質よりみて、歴史時代の仕上げ砥石と思われる。



第63図 石製品実測図 (縮尺1/3、163は1/1)  
堅穴住居2101(160)、堅穴住居3003(161・162)、包含層(163~165)

第5表 土器觀察表

掲載番号	器種	器形	遺構/層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	胎土	備考
1	須恵器	杯蓋	1024	-	-	2.85	N6/ 灰色	やや密	
2	須恵器	杯身	1024	(14.8)	(11.2)	3.2	N7/ 灰色	密	
3	須恵器	杯蓋	1010	(16.0)	-	[2.0]	N7/ 灰白色	密	
4	須恵器	杯蓋	1017	(11.1)	-	[2.3]	2.5Y7/1 灰白色	密	
5	須恵器	甕	1007	(22.8)	-	[6.7]	N6/ 灰色	密	
6	土師器	甕	1012	(15.7)	-	[5.0]	10Y8/2 にぶい黄橙色	やや密	外面に被熱痕あり
7	須恵器	杯蓋	1116	(15.8)	-	[1.3]	5Y7/1 灰白色	密	
8	須恵器	瓶	1207	-	(13.4)	[2.8]	N8/ 灰白色	密	表面が剥離している 焼成不良(瓦質)
9	土師器	高杯	1207	-	-	[1.9]	5Y8E/6 橙色	密	
10	須恵器	杯	1156	-	(10.0)	[1.1]	2.5Y7/1 灰白色	密	降灰
11	須恵器	杯	1119	(3.8)	(5.0)	3.3	2.5Y7/1 灰白色	密	
12	須恵器	杯蓋	1011	(16.8)	-	[2.0]	N7/ 灰白色	密	降灰
13	灰釉陶器	甕	1105	-	(9.0)	[1.4]	2.5Y7/1 灰白色	密	
14	須恵器	杯	1105	(11.0)	(6.0)	5.5	N7/ 灰白色	密	
15	土師器	甕	1105	(20.0)	-	[2.2]	5Y8E/8 橙色	密	全体に磨減している
16	須恵器	杯蓋	1105	(15.0)	最大径 (15.2)	[2.1]	N7/ 灰白色	密	
17	須恵器	鉢	1105	(19.0)	-	[7.7]	2.5Y7/1 灰白色	密	
18	須恵器	小形壺	1105	-	(6.0)	[4.5]	N7/ 灰白色	密	
19	須恵器	高杯	1105	-	(15.0)	[12.5]	N8/ 灰白色	密	全体に磨減が著しい 金雲母を微量に含む
20	土師器	小形壺	1105	-	-	[6.9]	7.5Y8E/7 橙色	密	全体に剥離している
21	土師器	高杯	1106	-	-	[21.9]	5Y8E/6 明赤褐色	密	七角形に面取りしてある
22	土師器	楕	1140	14.5	(6.0)	[0.7]	5Y8E/8 橙色	密	
23	須恵器	甕	1140	(14.4)	-	[12.2]	5Y7/1 灰白色	密	
24	須恵器	杯蓋	1143	(17.5)	-	[1.4]	N7/ 灰白色	密	
25	須恵器	杯	1143	(13.3)	-	3.8	5Y6/1 灰色	密	
26	須恵器	杯	1143	-	(10.7)	[2.5]	2.5W6/1 黄灰色	密	
27	土師器	甕	1172	(17.3)	-	2.9	5YR7/6 橙色	密	
28	土師器	移動式壺	1172	-	-	[7.6]	7.5Y8E/4 浅黄橙色	密	
29	土師器	移動式壺	1172	-	-	[7.4]	10Y8E/3 にぶい黄橙色	密	
30	土師器	甕	1172	(14.6)	-	[10.8]	7.5Y8E/6 浅黄橙色	密	外面に楕円着 擬宝珠マツミ
31	須恵器	杯蓋	1172	(15.2)	-	2.4	5Y7/1 灰白色	密	
32	須恵器	杯	1172	(14.6)	8.5	3.9	N7/ 灰白色	密	
33	須恵器	杯	1172	13.8	3.3	3.7	5Y7/1 灰白色	密	降灰
34	須恵器	杯	1172	(12.8)	(9.4)	3.6	N6/ 灰色	密	降灰
35	須恵器	鉢	1172	(25.9)	-	[8.1]	2.5Y7/1 灰白色	密	
36	須恵器	甕	1172	19.2	-	37.1	5Y7/1 灰白色	密	
37	須恵器	杯蓋	1188	(17.8)	-	[1.7]	N8/ 灰白色	密	降灰
38	土師器	杯	1212	(14.6)	-	3.4	7.5Y8E/6 浅黄橙色	密	
39	土師器	甕	1212	(18.6)	-	[3.2]	7.5YR7/6 橙色	密	内部暗文
40	土師器	甕	1212	(27.6)	-	[4.6]	2.5Y7/3 浅黄色	密	
41	土師器	甕	1212	(16.8)	-	[9.2]	10Y8E/4 浅黄橙色	密	
42	土師器	製塩土器	1212	(9.6)	-	[7.2]	5YR7/6 橙色	粗	
43	須恵器	杯	1212	-	(7.0)	[2.5]	N7/ 灰白色	密	
44	須恵器	杯身	2002	-	(9.8)	[1.7]	2.5Y7/1 灰白色	密	
45	須恵器	杯蓋	2003	(14.6)	-	[1.3]	N8/ 灰白色	密	
46	土師器	杯	2003	(19.0)	-	[3.0]	7.5YR7/6 橙色	密	
47	土師器	杯	2003	(21.0)	16.5	2.8	7.5Y8E/8 黄橙色	密	全体に磨減が著しい
48	土師器	甕	2003	-	-	[14.6]	5YR7/6 橙色	やや密	
49	土師器	片口鉢	2028	(21.0)	-	[9.3]	7.5Y8E/8 橙色	密	
50	須恵器	杯蓋	2028	(13.6)	-	[1.8]	N6/ 灰色	密	
51	弥生土器	蓋	2004	-	(10.6)	[13.4]	10Y8E/2 灰白色	粗	外面剥離している
52	弥生土器	甕	2004	-	6.8	[8.3]	10Y8E/2 灰白色	やや粗	全体に剥離している
53	土師器	杯	2005	(9.2)	-	[3.8]	7.5Y8E/6 橙色	密	
54	須恵器	杯蓋	2005	(16.4)	-	[2.8]	5Y7/1 灰白色	密	
55	土師器	杯	2006	(18.0)	-	[3.5]	7.5YR7/6 橙色	密	焼成不良
56	須恵器	高杯	2006	(16.6)	-	[4.9]	N7/ 灰白色	密	
57	土師器	杯	2039	(12.0)	-	[3.7]	5Y8E/6 橙色	密	
58	土師器	杯	2039	(13.7)	-	[4.1]	10Y8T/3 にぶい黄橙色	密	
59	土師器	甕	2039	-	-	[6.1]	10Y8T/4 にぶい黄橙色	密	
60	土師器	甕	2039	(19.8)	-	[5.2]	10Y8T/4 にぶい黄橙色	密	
61	須恵器	平甕	2039	(6.1)	-	[4.3]	N5/ 灰色	密	

揭露番号	器種	器形	横幅/ 縦幅(cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考
62	須恵器	甕	2039	(19.8)	-	[4.2]	N7/ 灰白色	密	
63	土師器	杯	2101	(13.4)	-	[3.7]	7.5YR7/6 橙色	密	
64	土師器	高杯	2101	-	-	[5.4]	10YR8/4 浅黄褐色	密	
65	須恵器	杯	2101	(14.0)	(9.6)	4.9	5Y6/1 灰色	密	
66	須恵器	甕	2101	(21.0)	-	[7.3]	7.5YR6/1 灰色	密	降灰
67	須恵器	杯	2107	-	-	[1.7]	N7/ 灰白色	密	
68	土師器	甕	2107	23.6	-	[3.9]	10YR8/4 浅黄褐色	密	
69	土師器	甕	2113	-	-	[5.0]	7.5YR7/6 橙色	密	
70	須恵器	杯	2113	(16.0)	(10.0)	4.4	5Y6/1 灰色	密	
71	須恵器	瓶	2138	(8.3)	-	[3.8]	N6/ 灰色	密	
72	須恵器	杯	2120	(11.0)	-	[2.6]	5Y6/1 灰色	密	
73	須恵器	杯	2126	(11.6)	(9.0)	3.3	2.5Y8/1 灰白色	密	
74	須恵器	杯蓋	2128	(18.4)	-	[1.1]	5Y6/1 灰色	密	
75	土師器	壺	2128	(14.8)	-	[7.8]	10YR3/1 黒褐色	密	8~10本単位のハケ
76	土師器	手づくね土器 (二ツ口)	2128	3.6	1.4	[2.8]	7.5YR5/8 明褐色	密	
77	須恵器	杯	2134	(15.4)	-	[4.4]	N7/ 灰色	密	
78	土師器	杯	2153	(17.6)	-	[2.7]	7.5YR7/6 橙色	密	
79	土師器	杯	2148	(14.4)	-	3.3	5YR7/8 橙色	密	
80	土師器	杯	2148	(15.8)	-	[4.4]	5YR6/6 橙色	密	
81	土師器	甕	2148	(13.8)	-	[1.1]	10YR8/3 浅黄褐色	密	磨減している
82	土師器	鍋	2148	(26.0)	-	[5.9]	10YR8/2 灰白色	密	金雲母を少量含む
83	土師器	甕	2148	(43.0)	-	[8.0]	5YR7/8 橙色	密	10本単位のハケ
84	土師器	鍋	2148	-	-	[11.5]	外側:10YR7/6 明黄褐色 内側:5YR7/6 橙色	やや粗	2mmまでの砂粒を含む
85	土師器	高杯	2148	-	-	[7.5]	5YR7/6 橙色	密	八角形に面取りしてある
86	須恵器	杯蓋	2148	(12.2)	-	1.4	2.5Y7/1 灰白色	密	
87	須恵器	杯蓋	2148	-	-	[1.6]	2.5Y6/1 黄灰色	密	
88	須恵器	杯身	2148	(13.2)	(9.8)	4.3	N7/ 灰白色	密	
89	須恵器	杯身	2148	(16.0)	-	[3.3]	2.5Y7/1 灰白色	密	
90	須恵器	杯身	2148	-	(11.0)	[2.8]	2.5Y7/1 灰白色	密	
91	須恵器	杯身	2148	10.5	7.3	4.4	N6/ 灰色	密	内面に線刻あり
92	須恵器	甕	2148	(16.0)	(11.8)	2.6	N7/ 灰白色	密	
93	須恵器	甕	2148	(13.9)	(10.8)	1.9	N6/ 灰色	密	
94	須恵器	甕	2148	(14.8)	(11.7)	1.9	2.5Y8/1 灰色	密	焼成:並(瓦質仕上がり)
95	須恵器	甕	2148	(13.9)	(12.0)	1.2	N7/ 灰白色	密	
96	須恵器	甕	2148	(22.6)	-	[5.6]	N5/ 灰色	密	焼成:並(生焼け)
97	須恵器	甕	2148	(20.3)	-	[6.3]	2.5Y7/1 灰白色	密	
98	須恵器	甕	2148	(23.0)	-	[7.8]	2.5Y7/1 灰白色	密	降灰 内面に同心円状のタタキ あり
99	須恵器	瓶	2148	-	(12.8)	[4.9]	5YR7/3/ にぶい橙色	密	
100	須恵器	高杯	2148	-	-	[14.0]	N8/ 灰白色	密	齊滅著しい 焼成:並(やや瓦質仕上がり)
101	土師器	杯	2155	(13.9)	-	[4.0]	7.5YR7/6 橙色	密	
102	土師器	製塙土器	2155	-	-	[4.1]	5YR6/8 橙色	粗	3mm程度の粒子を含む 焼成:不良
103	須恵器	杯蓋	2155	(26.7)	-	[1.6]	N6/ 灰白色	密	
104	須恵器	蓋置	2155	(11.0)	-	[1.9]	2.5Y6/1 黄褐色	密	
105	須恵器	鉢	2155	(17.6)	-	[5.3]	2.5Y7/1 灰白色	密	焼成:並(やや瓦質仕上がり)
106	須恵器	杯身	2155	-	(9.8)	[2.0]	N7/ 灰白色	密	
107	須恵器	杯身	2155	-	12.0	[2.1]	N6/ 灰白色	密	
108	須恵器	瓶	2155	-	(14.0)	[2.9]	N7/ 灰白色	密	
109	須恵器	瓶	2155	-	(9.5)	[2.3]	N7/ 灰白色	密	
110	土師器	高杯	3101	13.6	-	[8.5]	7.5YR7/6 橙色	密	全体に磨減している 金雲母を含む
111	須恵器	杯	3105	-	-	[2.0]	10YR7/1 灰白色	密	降灰
112	土師器	甕	3106	(17.8)	-	[11.0]	7.5YR6/6 橙色	やや密	
113	土師器	高杯	3124	3.4	-	[5.4]	10YR8/4 浅黄褐色	密	全体に磨減している
114	土師器	高杯	3106	-	-	[5.3]	5YR6/8 橙色	密	磨減著しい
115	土師器	高杯	3106	-	-	[6.1]	10YR7/6 明黄褐色	密	磨減している
116	須恵器	高杯	3106	(10.5)	-	[4.4]	5Y7/1 灰白色	密	降灰
117	土師器	高杯	3116	(23.6)	-	[6.9]	2.5Y6/6 橙色	密	全体に判別している
118	土師器	高杯	3116	23.7	-	[8.8]	5YR6/6 橙色	密	外間に黒斑あり
119	土師器	高杯	3116	16.4	-	[6.4]	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや密	

揭露番号	器種	器形	造構/層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	胎土	備考
120	土師器	高杯	3116	(13.8)	-	[4.6]	7.5YR6/6 橙色	密	
121	土師器	高杯	3116	(13.9)	-	[5.0]	7.5YR6/6 橙色	密	全体に磨減している
122	土師器	高杯	3116	(19.6)	-	[8.0]	10YR8/6 黄褐色	密	全体に磨減している
123	土師器	製塙土器	3116	(11.0)	-	[7.2]	10YR8/3 浅黄褐色	やや密	外面に黒斑あり
124	土師器	手づくね土器 (±7.7)	3112	-	-	[2.3]	7.5YR6/6 橙色	密	
125	土師器	高杯	3119	14.5	9.6	12.5	7.5YR6/8 橙色	密	外間に黒斑あり 全体に磨減している
126	土師器	高杯	3115	14.3	-	[6.0]	7.5YR7/4 にぶい橙色	密	
127	土師器	高杯	3115	-	-	[5.2]	2.5Y6/6 橙色	密	
128	土師器	高杯	3115	-	(10.2)	[12.5]	7.5YR6/8 橙色	密	穿孔3ヶ所
129	須恵器	杯蓋	3110	(18.3)	-	2.7	5Y7/1 灰白色	密	
130	須恵器	杯蓋	3110	(10.6)	-	[2.0]	N7/ 灰白色	密	
131	須恵器	杯蓋	3110	(28.7)	-	[3.0]	N8/ 灰白色	密	
132	須恵器	杯身	3110	(13.6)	(9.8)	3.8	5Y7/1 灰白色	密	
133	須恵器	杯身	3110	(13.4)	(9.8)	4.0	N6/ 灰色	密	
134	須恵器	杯身	3110	(11.8)	9.1	3.5	N6/ 灰色	密	
135	須恵器	杯身	3110	(12.0)	(9.7)	4.0	N7/ 灰白色	密	
136	須恵器	杯身	3110	(19.3)	13.6	5.4	N6/ 灰色	密	
137	須恵器	蓋	3110	(10.4)	-	[3.6]	2.5Y7/1 灰白色	密	
138	須恵器	裏	3110	(18.0)	-	[4.9]	N6/ 灰色	密	
139	土師器	杯	3110	(13.6)	-	[2.8]	5YR7/6 橙色	密	
140	土師器	皿	3110	(22.3)	(17.2)	2.4	5YR7/4 にぶい橙色	密	
141	土師器	裏	3110	(11.6)	-	[4.0]	7.5YR8/4 浅黄褐色	密	
142	須恵器	平瓶	3123	-	4.0	[7.1]	5Y6/1 灰色	密	降灰
143	須恵器	横瓶	3123	10.5	-	22.6	2.5Y6/2 黄灰色	密	降灰
144	土師器	製塙土器	3123	(11.0)	-	[7.9]	7.5YR7/6 橙色	密	
145	土師器	瓶	3131	(20.0)	-	[6.5]	7.5YR7/6 橙色	密	内面磨減している
146	土師器	高杯	3136	-	(14.2)	[7.9]	5YR6/6 橙色	密	
147	土師器	裏	3136	(18.6)	-	[5.0]	10YR8/4 にぶい黄褐色	密	煤付着
148	土師器	高杯	3139	(14.6)	(8.7)	10.2	2.5Y6/8 橙色	密	
149	土師器	小形壺	3139	-	-	[8.3]	10YR8/3 浅黄褐色	やや密	
150	土師器	杯	3001	10.0	-	3.6	7.5YR8/8 黄褐色	密	磨減著しい
151	須恵器	瓶	3001	-	-	[7.3]	N4/ 灰色	密	
152	須恵器	杯身	3001	(9.8)	-	4.3	N7/ 灰白色	密	
153	須恵器	高杯	3001	(9.8)	-	[3.2]	7.5YR7/2 明褐灰色	密	
154	須恵器	杯蓋	3109	(18.2)	-	[1.5]	5Y6/1 灰色	密	
155	土師器	皿	3109	(21.4)	(15.9)	3.2	5Y6/6 橙色	密	
156	須恵器	裏	3109	(24.7)	-	[6.3]	N7/ 灰白色	密	

第6表 瓦観察表

報告書番号	種類	造構/層位	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	備考
157	平瓦	1105	[10.8]	[10.7]	2.4	
158	平瓦	1120	[9.2]	[8.1]	2.3	
159	平瓦	1143	[19.3]	[9.4]	2.8	

第7表 石製品観察表

報告書番号	種類	造構/層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
160	不明石器	2101	4.6	[3.7]	0.3	石材: 手枚骨
161	石鍤	3003	5.3	3.8	1.7	石材: 頁岩、ホルンフェルス
162	石鍤	3003	5.2	4.4	2.2	石材: 泥質頁岩、ホルンフェルス
163	臼玉	包含層	0.25	0.5	0.15	石材: クロム白雲母
164	磨製石斧	包含層	[6.2]	[4.2]	2.0	石材: 砂質頁岩、ホルンフェルス
165	砥石	包含層	[5.2]	[4.2]	0.9	石材: 粘質頁岩

## 第4章　まとめ

今回の調査では、古墳時代から近世にいたるまでの遺構を検出した。古墳時代中期から平安時代にかけては分布の粗密はあるもののほぼ連続して遺構が構築される状況が確認された。遺物に関しては縄文時代や弥生時代のものも含まれている。ここでは、本調査地における時代ごとの変遷を整理し、総括とする。

本調査地において検出された遺構の基盤層は黄褐色シルト層を基本とするが、特に東区においては砂礫層や砂層が露出するなど不安定な状況にあった。調査最終段階において、下層の遺構の有無と基盤層の状況を確認するため断面を行った。それによれば東区において氾濫堆積物とみられる砂礫層の堆積や、粘成化された止水層の堆積、離水後のシルト化などの状況が確認された。これらの堆積物は北東から南西方向への傾斜方向を見て取れ、現地形が形成される以前の埋没流路の存在が示唆されるものである。この状況は、主に東区において遺構検出面の状況が一定ではなく北東から南西方向に砂礫層が露出していたこととも一致する。これらの、基盤形成がいつの時代に遡るのかは遺物が確認されていないため明らかではないが、周辺の遺構や遺物の状況を加味すると遅くとも弥生時代までには現状の基盤が形成されていたものと推定される。

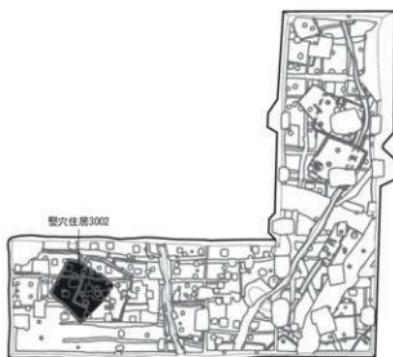
### 弥生時代以前

縄文時代から弥生時代の遺構の存在は確認できなかったが、他の遺構に混入する状況や遺構外より遺物が僅かに出土している。本調査地から40m程南東の1989年度調査地やそれに隣接する2006年度調査地では弥生時代後期の竪穴住居が集中して確認されており、弥生時代の集落の中心は本調査地の南から南東に広がるものとみられる。

### 古墳時代中期から後期

本調査地において明らかな遺構が確認されるのは古墳時代中期以降である。遺構の重複状況、出土遺物からみて、第64図のような変遷が考えられる。古墳時代中期から後期にかけての遺構については西側と東側に分布している。竪穴住居の軸方向については北から $22^{\circ}$ ～ $48^{\circ}$ 東へ偏しており、飛鳥時代以降の遺構の軸方向がおむね正方位を示すのに対し特徴的である。本調査地から50m程北西の2006年度調査地における同時期における竪穴住居の軸方向の傾向とはやや異なっている。これは、既に述べたように基盤層下には埋没流路の存在が想定されており、竪穴住居の軸方向はこれら埋没地形により形成された微地形の方向に影響を受けているものと推定される。なお、遺物の出土していない竪穴住居3002、3003、3113についても軸方向からみて同時代のものとみられる。作り付け竈が確認されたのは竪穴住居3101、3115、3106、3112であり西京極遺跡における初期の竈である。3106、3112、3115においては西壁側に、3101においては北壁側に作られる。3115は隅際に寄つて構築されるが、他はほぼ辺中央に構築されている。3106、3115の竈中からは高杯を倒立させて支脚に転用している状況が確認されたが西京極遺跡においては同事例を知らない。また、3111のように長方形プランをもち主柱穴が確認されない竪穴住居も認められる。伴出

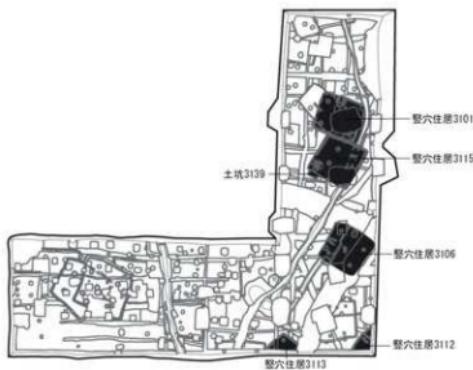
① 5世紀前期



② 5世紀中期



③ 5世紀後期



第64図 遺構変遷図①（縮尺1/500）

遺物がないため明確な時期は明らかではなく、他の堅穴住居と軸方向も異なるが、他遺構との重複関係から古墳時代中期以前と考えられる。火凧もなく居住用の堅穴ではなかった可能性も考えられる。なお、遺構外ではあるが、白玉が1点出土している。本調査地から130m程南の2005年度調査地において古墳時代の堅穴住居や構から未製品を含む玉類が出土していて玉造工人集落の存在が指摘されており、本遺物も関連する可能性が考えられる。

### 飛鳥時代

飛鳥期の遺構については、遺構の重複状況、出土遺物からみて、第65図④⑤のような変遷が考えられる。堅穴住居の軸方向については北から2°程東へ偏しており、後の奈良から平安時代のものより僅かではあるが西に偏している特徴をもつ。堅穴の平面形としては堅穴住居2005、2101、2103のように長方形状を呈するものが認められる。作り付け竈が確認されたのは堅穴住居2001、2103であるが、2103の竈は南西隅に構築されており特徴的である。

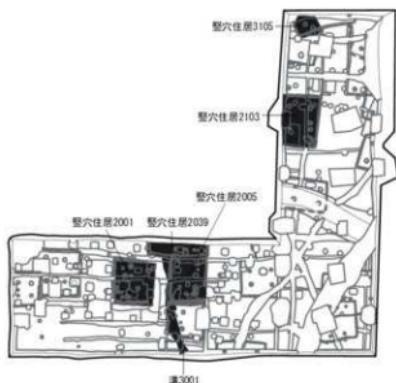
### 奈良時代

奈良時代の遺構については、遺構の重複状況、出土遺物からみて、第65図⑥～第66図⑧のような変遷が考えられる。堅穴住居の軸方向についてはほぼ正方位を示している。堅穴住居は規模が小型化する傾向が認められる。確実な作り付け竈が確認されたのは堅穴住居2003のみである。なお、遺物の出土していない堅穴住居2102、2119、2127なども軸方向からみて同時代のものとみられる。堅穴住居が確認できるのは8世紀までであり、8世紀後半以降には掘立柱建物である建物1・2・3が作られる。建物1・2の軸方向は北から3°程東へ偏している。建物3の軸方位はほぼ正方位で、建物1・2とは異なっており、これらとは年代に差があると考えられる。方形の掘方を持つ側柱建物である。溝1172は微地形の傾斜に沿って奈良時代に開削された溝であるが、8世紀後半には機能を失っている。本調査地の北西部や南西部においては西方向にそれぞれ落ち込んでおり一部湿地化した状況が確認されている。後背地の落ち込みに關係するものとみられるが、奈良時代の堅穴住居2002や2003が近接して構築されていることから、奈良時代には安定した状況になっていたものとみられる。当地域は8世紀においては葛野郡の一部となっており、遺構の軸が正方位を向くことに関しては条里制地割との関連が示唆されているところであり、周辺の状況と合致している。

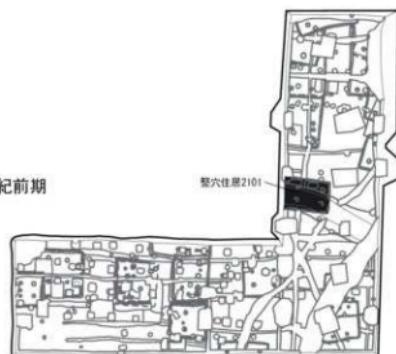
### 平安時代以降

平安時代以降の遺構については、遺構の重複状況、出土遺物からみて、第66図⑨のような変遷が考えられる。本調査区は菖蒲小路に面した区画であるが、溝1140が四行八門の地割りにほぼ一致しており境界溝の可能性が考えられる。建物4は柱穴が円形の掘方を持つ建物である。柵列の可能性も考えられるが、東西の妻側に棟持柱状の柱穴をそれぞれ持つことから建物の可能性が高い。検出された建物遺構の中では最も新しいものであり、中世以降の可能性も考えられる。耕作溝はいずれも正方位で東西方向を中心とするが、溝1105、1106のように南北方向のものも認めら

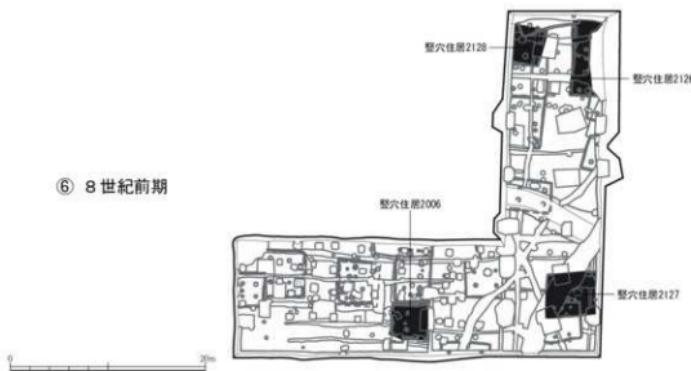
④ 7世紀前～中期



⑤ 7世紀後期～8世紀前期

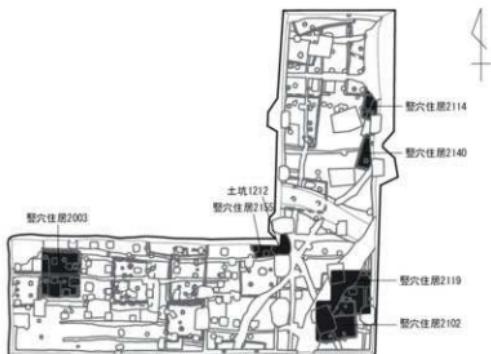


⑥ 8世紀前期

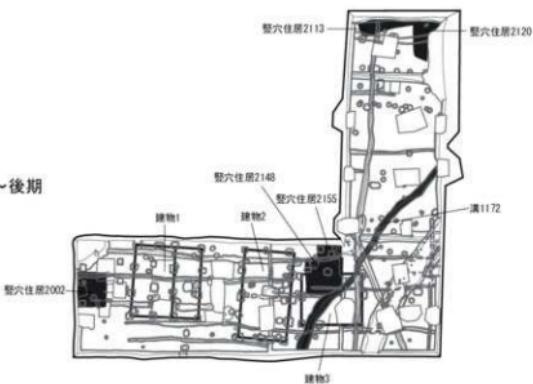


第65図 遺構変遷図②（縮尺1/500）

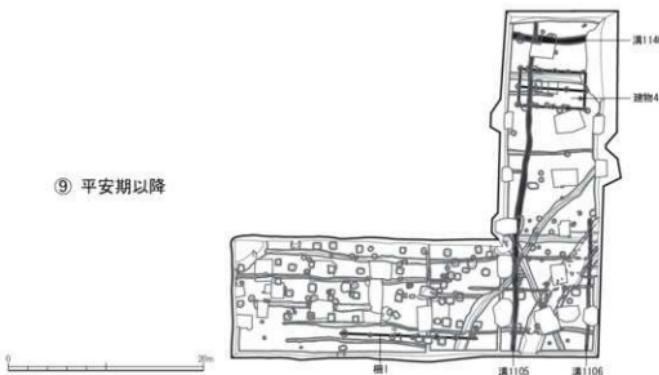
⑦ 8世紀中期



⑧ 8世紀中～後期



⑨ 平安期以降



第66図 遺構変遷図③（縮尺1/500）

れ南北方向のものが新しい。部分的に幅広になる箇所も認められることから継続的な耕作の可能性が伺える。なお、中世以降に関しては耕作溝以外の遺構は確認されず、居住域としては利用されなかつたことが伺える。

以上のように、本調査地における遺構変遷の概略をみてきたが、古墳時代中期から平安時代にかけて継続的に居住域が営まれていたことが明らかとなった。特に、これまでの調査成果とあわせ、古墳時代から奈良時代にかけては当遺跡においての集落としての中核部を占める可能性が認められたこと、基盤層の形成における埋没地形の一旦が明らかとなり、少なくとも古墳時代においてはこれらにより形成された微地形が集落構成に一定の影響を与えていた可能性が認められたことは大きな成果であると思われる。

#### 【参考文献】

- 河角龍典 「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 日本文化財科学会 2001  
家崎孝治 『平安京右京五条四坊十二町 西京極遺跡－西院月双町の調査－』 古代文化調査会 2010

# 写 真 図 版



1. 第1遺構面南区全景（西から）



2. 第1遺構面中央区全景（西から）



1. 第1遺構面東区全景（北から）



2. 建物1（東から）



1. 建物2（北から）



2. 建物3（北から）



1. 建物4（西から）



2. 土坑1120（南から）



3. 土坑1212（南から）



4. 溝1143（南から）



1. 溝 1143 (南から)



2. 溝 1172 (南から)



3. 溝 1172 (北西から)



4. 溝 1172 出土状況 (北西から)



1. 第2遺構面南区全景（西から）



2. 第2遺構面中央区全景（西から）



1. 第2遺構面東区全景（北から）



2. 壁穴住居 2001 窑（西から）



1. 壁穴住居 2002 (北から)



2. 壁穴住居 2003 (北から)



1. 壁穴住居 2003 窓（西から）



2. 壁穴住居 2004（北から）



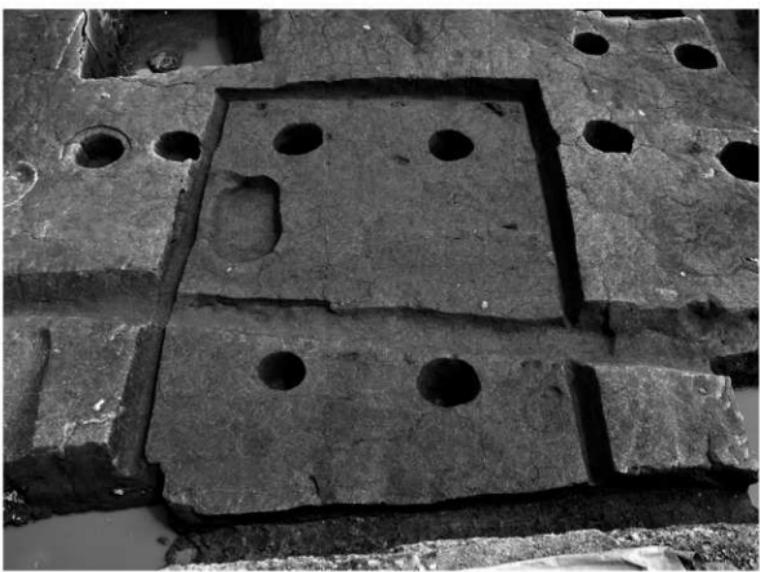
1. 穂穴住居 2005 (東から)



2. 穂穴住居 2006 (東から)



1. 壁穴住居 2039（南から）



2. 壁穴住居 2101（西から）



1. 穂穴住居 2102 (南から)



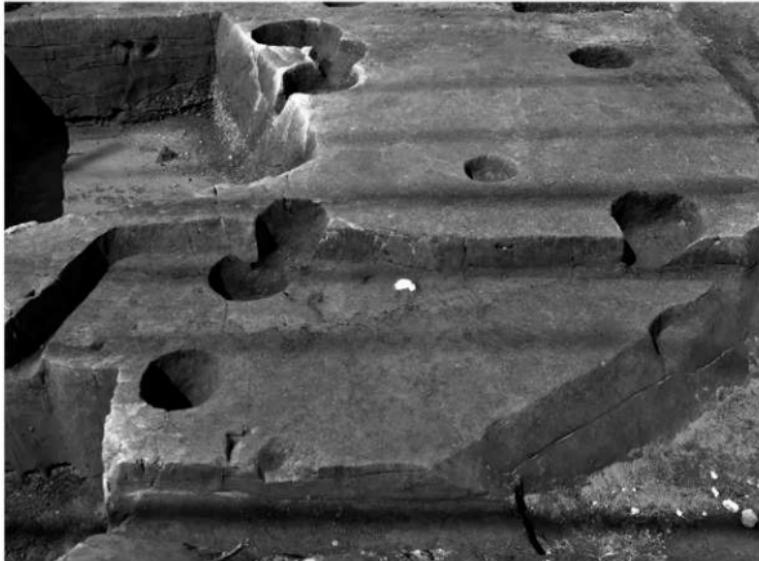
2. 穂穴住居 2103 (西から)



1. 壁穴住居 2103 罠（北西から）



2. 壁穴住居 2113 (西から)



1. 穂穴住居 2114 (東から)



2. 穂穴住居 2119 (西から)



1. 壁穴住居 2120 (西から)



2. 壁穴住居 2126 (北から)



1. 穂穴住居 2127 (南から)



2. 穂穴住居 2128 (西から)



1. 壁穴住居 2134 (南から)



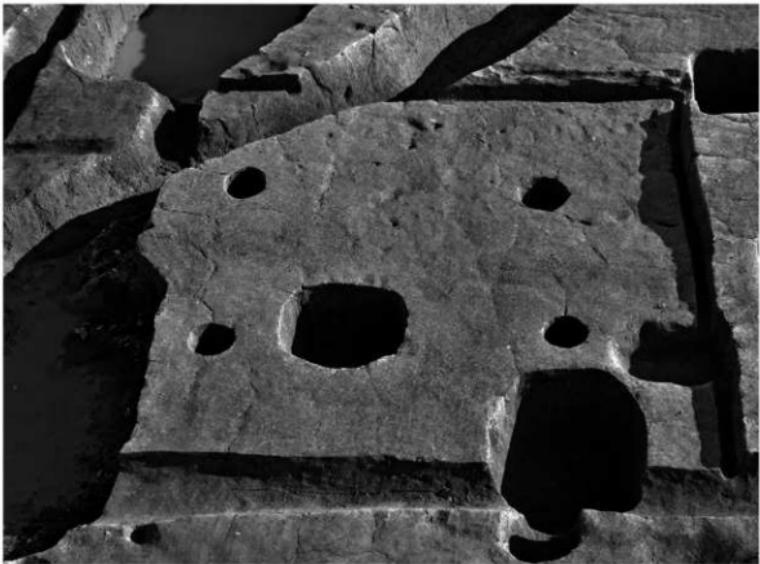
2. 壁穴住居 2139 (西から)



1. 壁穴住居 2139 窓 検出状況（南から）



2. 壁穴住居 2140（東から）



1. 売穴住居 2148 (北から)



2. 売穴住居 2154 (北から)



1. 壁穴住居 2154 窓（南から）



2. 壁穴住居 2155 窓（南から）



4. 溝 2147（西から）



3. 壁穴住居 2155 窓（東から）



5. 溝 2147（東から）



1. 第3遺構面南区全景（西から）



2. 第3遺構面中央区全景（西から）



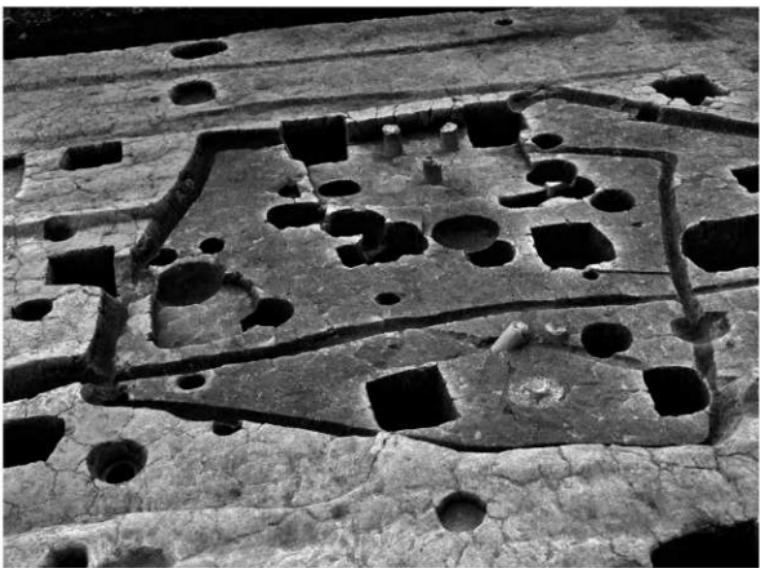
1. 第3遺構面東区全景（北から）



2. 壁穴住居 3002・壁穴住居 3003（北から）



1. 壁穴住居 3002 (北から)



2. 壁穴住居 3003 (北から)



1. 壁穴住居 3101 (西から)



2. 壁穴住居 3101 窑 (南から)



1. 壺穴住居 3105（西から）



2. 壺穴住居 3106（東から）



1. 壑穴住居 3106 出土状況（東から）



2. 壑穴住居 3106 炉（南から）



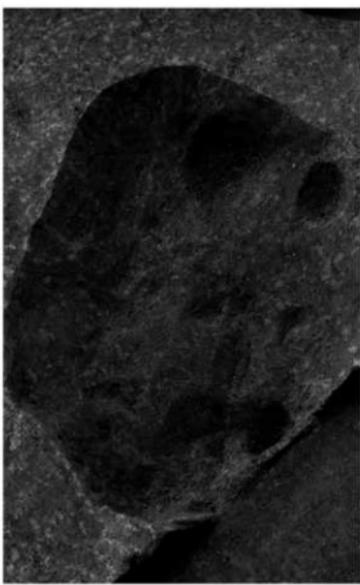
3. 壑穴住居 3106 罹（南から）



4. 壑穴住居 3111（北西から）



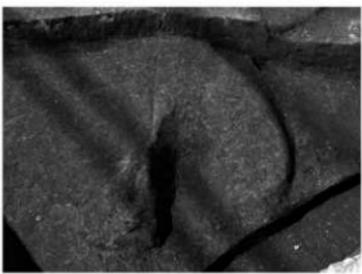
1. 壊穴住居 3112 (東から)



2. 壊穴住居 3112 窓 (東から)



3. 壊穴住居 3112 出土状況 (東から)



4. 壊穴住居 3112 窓 (東から)



1. 壁穴住居 3113 (南から)



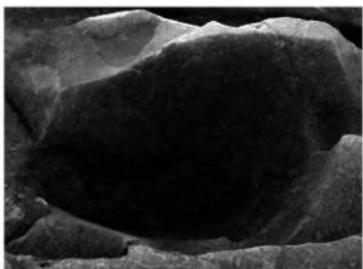
2. 壁穴住居 3115 (東から)



1. 壺穴住居 3115 罐 (東から)



2. 壺穴住居 3115 罐 掘り方 (東から)



3. 土坑 3123 (西から)



4. 土坑 3123 出土状況 (西から)



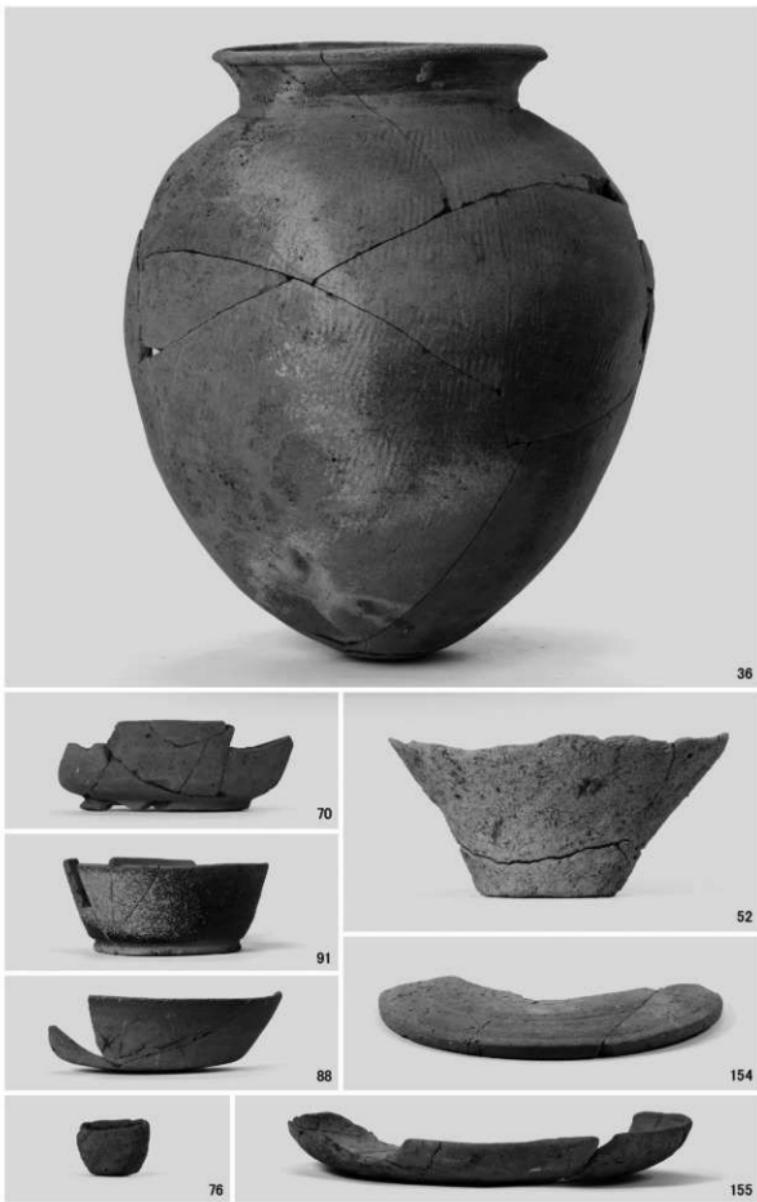
5. 土坑 3131 (西から)



6. 土坑 3139 出土状況 (東から)



1. 第1・2遺構面出土遺物（溝1105・1140・1143・1172、竪穴住居2003）



1. 第1～3遺構面出土遺物（溝1172、竪穴住居2004・2113・2128・2148、溝3109）



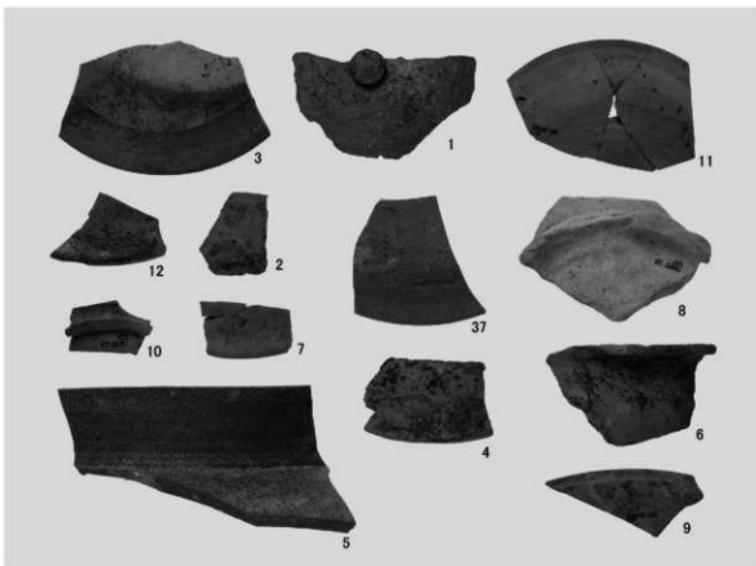
1. 第3遺構面出土遺物（溝3001、竪穴住居3110、土坑3123）



1. 第3遺構面出土遺物（竪穴住居 3106・3115、竈 3116・3119・3124）



1. 第3遺構面出土遺物（堅穴住居 3115、土坑 3136・3139）



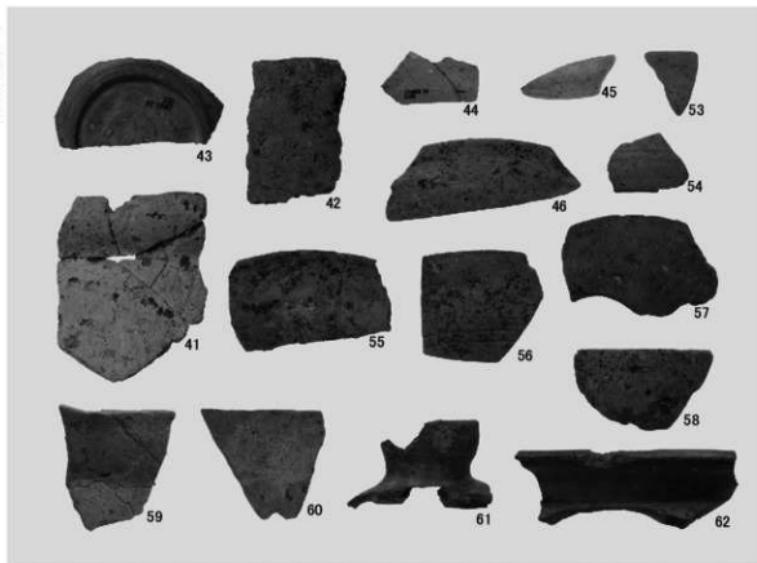
2. 第1遺構面出土遺物（建物 1～4、柵 1、土坑 1188）



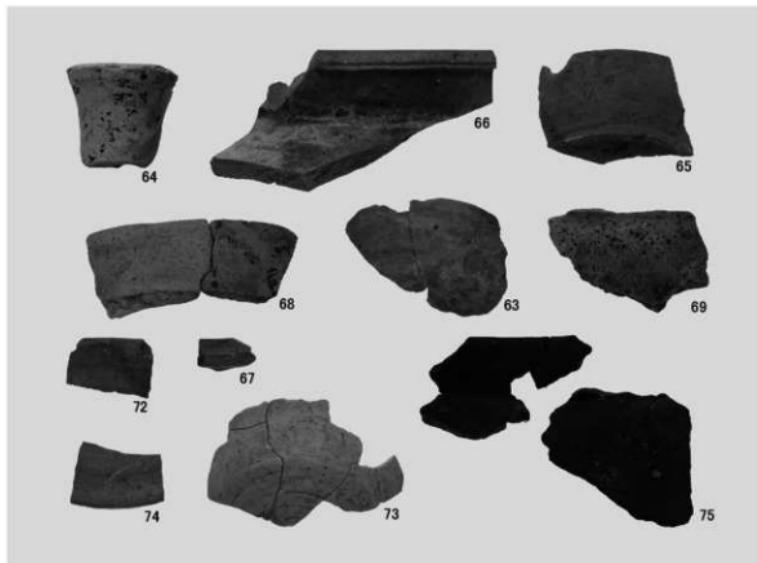
1. 第1遺構面出土遺物（溝 1105・1106・1140）



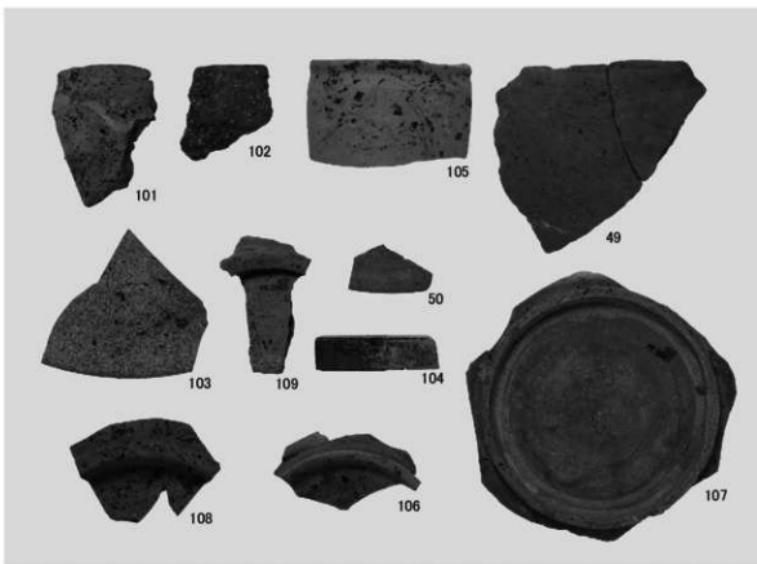
2. 第1遺構面出土遺物（溝 1143・1172、土坑 1212）



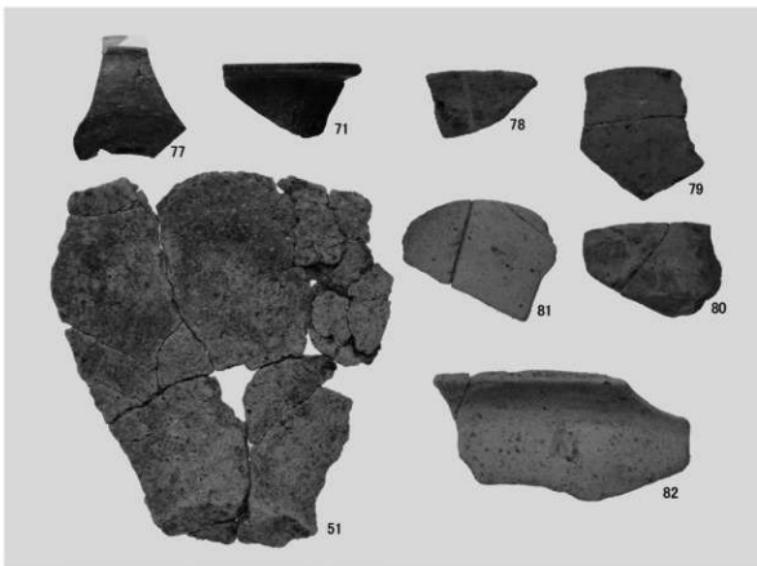
1. 第1・2遺構面出土遺物（土坑1212、竪穴住居2002・2003・2005・2006・2039）



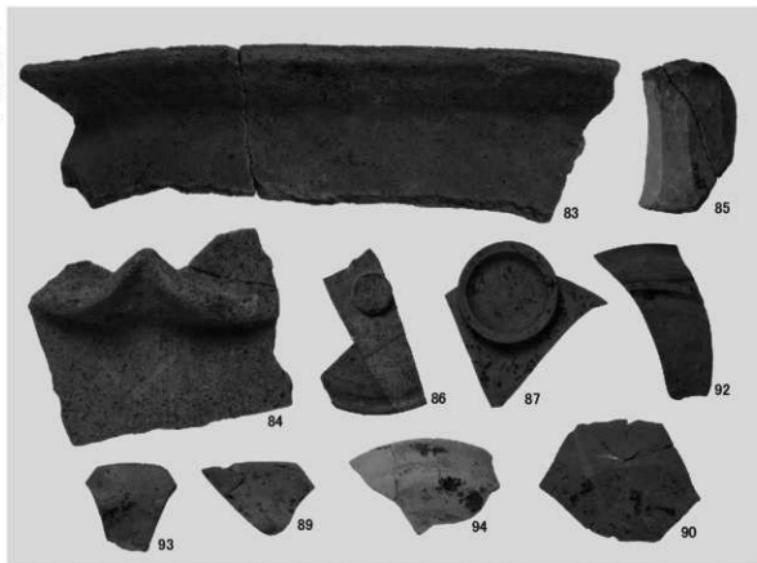
2. 第2遺構面出土遺物（竪穴住居2101・2113・2120・2126・2128、竈2107）



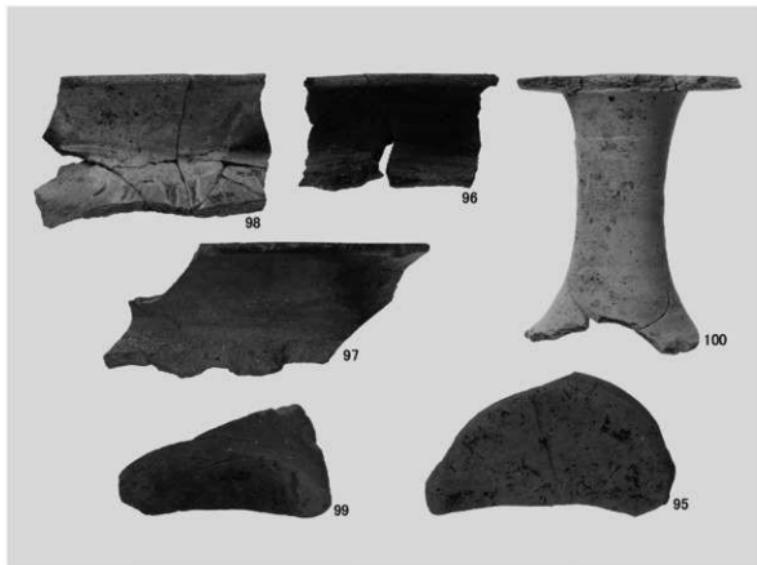
1. 第2遺構面出土遺物（堅穴住居 2155、貯藏穴 2028）



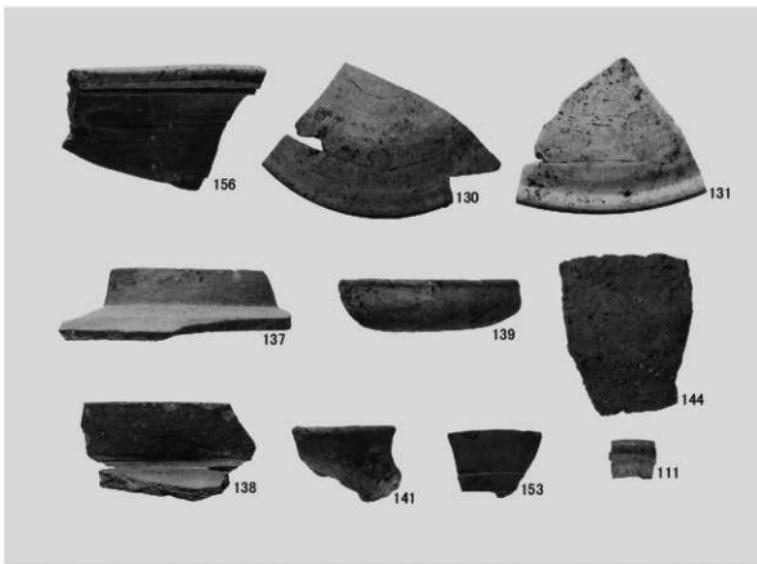
2. 第2遺構面出土遺物（堅穴住居 2004・2134・2148、柱穴 2138・2153）



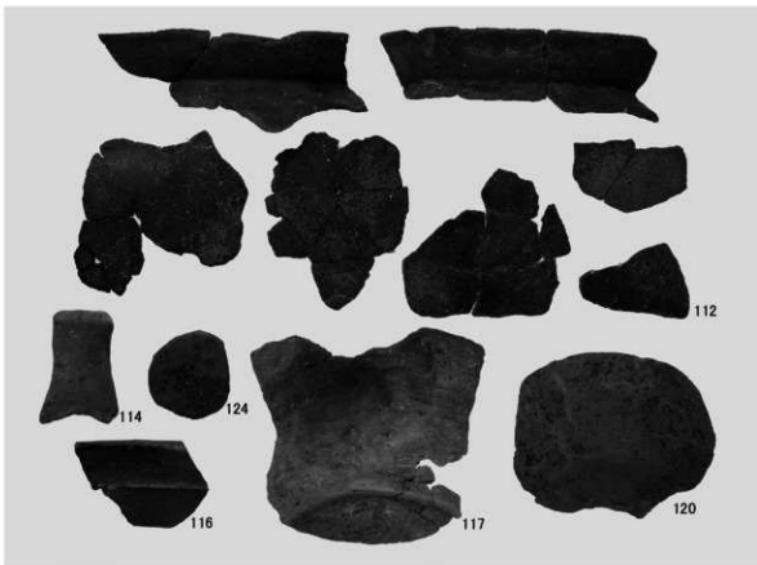
1. 第2遺構面出土遺物（堅穴住居 2148）



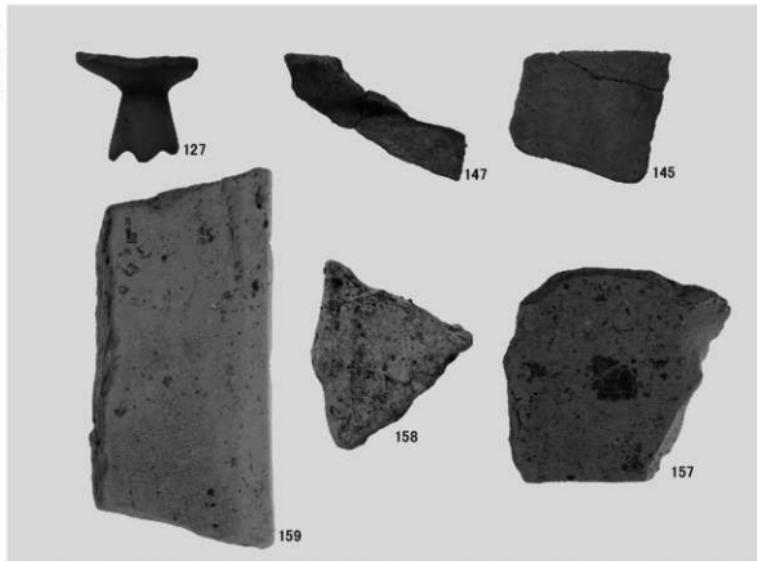
2. 第2遺構面出土遺物（堅穴住居 2148）



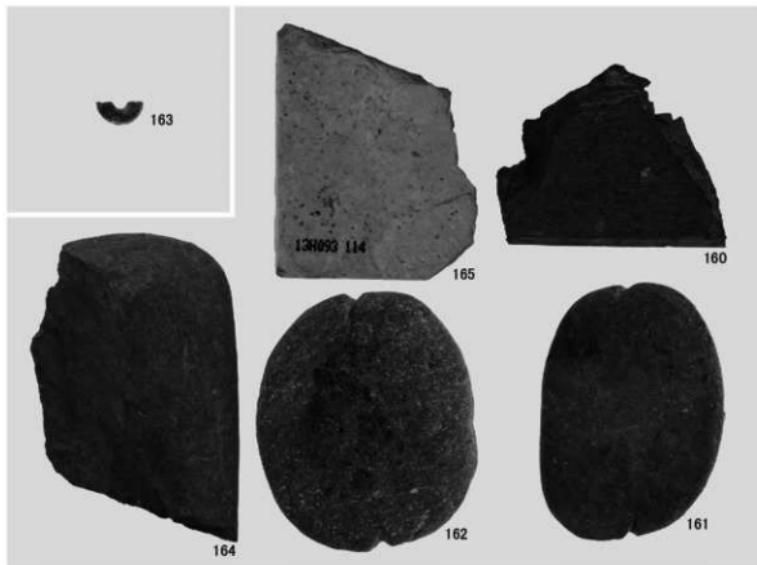
1. 第3遺構面出土遺物（堅穴住居3105、溝3109、土坑3110・3123）



2. 第3遺構面出土遺物（堅穴住居3106・3112）



1. 第1・3遺構面出土遺物（溝1105・1143、土坑1120、竪穴住居3115、土坑3131・3136）



2. 第2・3遺構面出土遺物（竪穴住居2101・3003、包含層）

## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうしほうはっちょうあと・にしきょうごくいせき
書名	平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡
副書名	西院月双町集合住宅建設に伴う理藏文化財発掘調査報告書
シリーズ名	イビソク京都市内遺跡調査報告
シリーズ番号	第8輯
編著者名	佐藤好司、高木佑介、吉村 晶
編集機関	株式会社イビソク関西支店
所在地	〒 612-8425 京都府京都市伏見区竹田中殿町 8 6 番地 TEL 075-632-8109
発行年月日	2014年3月

所取遺跡名	所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京右京六条 四坊八町跡・ 西京極遺跡	京都市右京区 西院月双町 84	26108	1・931	34° 59'	135° 43' 51"	20130701 20131007	730 m <sup>2</sup>	集合住宅 建設

所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京六条 四坊八町跡・ 西京極遺跡	古墳時代以前 都城跡・集落跡	古墳時代以前	堅穴住居・ 土坑・溝	土師器・須恵器・弥生 土器・石製品	
		飛鳥～奈良時代	堅穴住居・溝	土師器・須恵器	
		平安時代	掘立柱建物・ 柵・土坑・溝	土師器・須恵器・瓦	
要約	(特記事項) ・奈良時代以降と考えられる底付掘立柱建物を検出した。 ・奈良時代・古墳時代中期～後期の堅穴住居を多数検出した。 ・古墳時代の堅穴住居の竈から高杯転用の支脚が確認された。 ・検出面からの出土ではあるが白玉が確認された。				

## 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡

—西院月双町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2014年3月

編集  
発行 株式会社イビソク関西支店

住所 京都府京都市伏見区竹田中殿町86番地  
〒612-8425 TEL 075-632-8109

印刷 富士出版印刷株式会社